
Jolly Rogerに杯を掲げよ

早瀬黒絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jolly Rogerに杯を掲げよ

【Nコード】

N6449T

【作者名】

早瀬黒絵

【あらすじ】

「ペットですか？」「人形は船員にはなれねエからな。」それもそうですね。気付いたら見知らぬ場所いて、何故かうさぎのヌイグルミの中に入ってしまったいました。そんな私を買ってくださいったのは海賊でしたが、私はどうやら船長さんのペットになったようなのです。天然マイペースなですます口調の外見ヌイグルミな女の子と、そんな女の子を買った気紛れな海賊船長のお話。（この小説は自サイトでも公開しております。）

いち。

‘理不尽’という言葉が辞書で引いたことがありますでしょうか？

物事の筋道が立たないこと。道理に合わないこと。

とりあえずそんな感じの内容が出てくると思います。

何故いきなりこんなことを言い出すのかって思うかもしれませんが。

だけど、こんな状況に陥ったら誰だって‘理不尽’という言葉を出すでしょう。

「今回の目玉商品は何と言っても此れ！！」

バツと音を立てて檻にかけられていた布が外されたます。

檻越しに大勢の人々が私を見えています。勿論、檻の中にいるのは私

の方ですね。

ぼんやりと座って観客を眺めていれば脇に立っていた初老の男性が私の首に繋がっている鎖を引っ張りました。

「何でも良いから動いて喋れ！」そんなことを言われましてもこんな狭い檻の中で何をして、何を話せと言うのでしょうか。

見上げた先にあつた初老の男性の目は異様にギラギラとして私を見ています。

仕舞いには言う事を聞かないと切り刻んでやるとまで脅されてしまひまして、仕方なく檻の中で立ち上がって観客へ顔を向けました。

それだけで観客はざわめき立ちます。あまりジッと見られると恥かしいのです。

「…こんにちは。初めまして。」

たったそれだけしか言っていないのに観客は総立ちで私を見ようとするものですから、ステージと客席を隔てる柵は今にも倒れてしまいそうですね。

初老の男性は観客席へ向かって叫びました。

「いかがです？動いて喋る愛らしいヌイグルミ！中身は人間、な
に体はヌイグルミという不思議な存在！！こんなもの滅多にいま
せんよ？五千万ゼアから、さあさあ買った買った！！！」

そう、私は今人身売買の会場にいます。それも何故かうさぎのヌ
イグルミという姿で、です。

普通に学校から帰ろうとしていたのに気が付いたら古臭い路地っ
ぽい所において、それも子どもが喜びそうな可愛らしい真っ白のも
ふもふフワフワなヌイグルミ。

自分の体でなければとても可愛いのです。

訳が分からずウロウロしていたせいで捕獲されてしまったのです
ね。大失態です。

…私はどうしてこうボンヤリさんなのでしょう？

六千万、七千万と跳ね上がっていく売値を聞きながら今後どう
すべきか思案していると、不意によく通る声が会場に響き渡りま
した。

「——…一億だ。」

どよつと一際ざわめいた観客が揃って声のした方向へ顔を向けます。私もそれに倣って檻の鉄格子の隙間から声の主を見ました。男の方ですね。

大勢の観客の注目を浴びても物怖じせず、堂々と歩いて来た男性は近くで見るとかなりイケメンさんで、頭に巻かれた布はどこかアジアンっぽいのです。

深い青色の髪に黄金色の鋭い瞳のそのイケメンさんは一度私を見て、それから背後にいた数人をチラリと見て、初老の男性へ顎で示します。

数人のうちの一人でガタイの良いお兄さんが持っていたケースのよなものをドン！とステージに下ろしました。とても重そうな音です。

初老の男性がケースを開けると中にはギッシリ詰まった札束のようなもの。

…初めて大量の札束というものを見ました。

驚いて見ていると初老の男は愛想良く笑って「一億以上はいませんか？では商談成立！」と声高らかに言い、私の入った檻の鍵をお兄さんに手渡しました。

お兄さんはアツサリ檻の鍵を開けると私を持ち上げます。

乱暴に扱われるのではと思いましたが、予想より丁寧に檻から出され、抱っこしてくれました。

先に言っておきますがイケメンさんは綺麗系の美形さんで、お兄さんは髪を編み込んでサングラスをかけたレゲエのような男らしい美形さん。

：レゲエさんがうさぎのヌイグルミを抱えてる図ってとっても変じやありませんか？

誰もそのことに突っ込まないのが不思議です。何とも思っていないのでしょうか。

首の鎖は付けられたまま私はお兄さんに抱っこされて人身売買会場を出ました。

外はお世辞にも綺麗とは言えませんが、ヨーロッパ調っぽい建物が広がる大通りには屋台がひしめき合い、物を売っていたり、何かを作っていたりと様々な人々がいます。

「おい。」

ドレス姿で目の前を横切って行った女性を追いかけて見つめていると首がグイと横に引かれました。

顔をそちらへ向けるとイケメンさんが私の首に繋がる鎖を持って見下ろしてきます。

「なんでしょうか？」

首を傾げて返事を返すと私を持っているお兄さんが「キャーッ、可愛いつ！！」と頬をすり寄せて来ました。

え、お兄さんはその姿でまさかのおネエ言葉を駆使しちゃう方なのですか？

ちょっとしたショックを受けながらもイケメンさんの視線を見つめ返していると、イケメンさんはニヤリと悪い笑みを浮かべます。

カッコイイ人はどんな表情をしてもカッコイイですね。

「お前、俺が誰だか分かるか？」

いいえ。全く以って分かりません。首を横に振って素直に返事を返します。

するとイケメンさんは殊更愉しそうに目を細めて私をお兄さんの腕の中から奪い取りました。

さっきまでは何も反応を示さなかったイケメンさんの後ろにいる人

々が、ギョツとした表情で私とイケメンさんを見ます。

お兄さんに至っては私を返せとイケメンさんに文句を言っています。
イケメンさんはそれら全てを完璧スルーして私の首から鎖を外してくださいました。

「俺の名はヴェルノ＝ウルフガング。…海賊だ。」

「アタシはアイヴィー＝クウォーク、ヴェルノは船長でアタシは副船長なのよお。」

イケメンさんはヴェルノさん、お兄さんはアイヴィーさん。

アイヴィーさんは語尾にハートがついてそんな様子ですね。

頭を撫でられながら「可愛いうさぎちゃんの名前はあ？」と問われたので答えます。

「真白ましろといいます。」

「あらあ、見た目通りの名前なのね。」

「あ、そうなりますね。気付きました。」

今の体は真っ白なヌイグルミなので真白という名前は見たまんま。

でも、元々の名前なので変えようもありません。

私はヴェルノさんに抱えられたまま街を後にしました。

に。

ヴェルノさんの海賊船に着くと、船に乗っていた方々が全員茫然とした様子で船長である彼の腕の中にいる私を凝視しました。

もし私があなた方の立場でしたら同じ行動をしていたと思います。

イケメンな方がうさぎのヌイグルミを抱えて戻ってきては驚きますよね。それも海賊船長ではなおさらです。驚かれるのも無理はありません。

縄梯子を片腕でヒョイヒョイと上がって行くなんて流石海賊です。私には到底真似できない腕力と俊敏さです。

船の甲板に下ろされ、漸く私の足は地面を踏むことができました。

ちょっと揺れている感じがしますが慣れば問題ないかと思われます。

自分の頭から横に立つヴェルノさんの足へ水平に手を動かしてみると腰よりも低く、膝よりはやや高い。…一応耳の一番長い部分で測ってみたのですが。

「何してんだ。」

呆れたような表情で見下ろされてしまいました。

「私ってとっても小さいですね。」

「人形だからな。」

せつかく歩けると思ったのに、またヒョイと抱き上げられてしまいます。

真上にはアイヴィーさんの顔。

頭の上にスリスリと顔を寄せられます。この体でも感覚はあるようで、頭の上に温かな感触がありました。

ぶらんと手足が宙に浮いている状態で少々不安定な体勢のまま動かない私を船員の一人が指差しました。

「船長、何ですかコレ!」

人を指差してはいけないですよ。

…ヌイグルミの場合は良いんでしょうか？

「俺のペットだ。」

「ペットですか？」

「人形は船員にはなれねエからな。」

それもそうですね。濡れてふにふにになって、使い物にならない
くなってしまいそうです。

潮風にさらされたらカピカピになりそうですし。

何はともあれ御挨拶というものは大事なのです。

「はじめまして、真白といいます。ヴェルノさんに買われたうさぎ
のヌイグルミです。役に立たないかもしれませんがお世話になります
ので、よろしく願います。」

ぺこりと頭を下げると意外にも「あ、ああ」とか「お、おう」とか戸惑いながらも返事を返してくれました。

海賊とは言っても実は皆さん優しい方々なのかもしれませんね。

船員さん方も気になりましたが私はアイヴィーさんに抱えられて船内へと足を踏み入れました。

やはり暗いです。足元というか、廊下の角とか隅っこが見えません。

アイヴィーさんに船内を一人で歩かないよう注意されます。

何故ですかと聞くと、とても良い笑顔で――

「こんなに暗いと蹴られたり踏まれちゃうでしょ？」

――と言われました。確かにその可能性は高いです。

思わず頷いた私にアイヴィーさんは声を上げて笑いました。

入り組んだ廊下や階段を進むと、大きな扉の部屋があつて、先を歩いていたヴェルノさんがその扉を開けました。

暗さに慣れた視界に明るく柔らかな日の光が眩し過ぎて目が開けられせん。

何度か目をシパシパさせているとまた可愛いと頭を撫でくり回されます。

ヴェルノさんは地図や本、様々宝石などが置かれた部屋の中央にある大きな椅子に腰掛け、私はその目の前にある大きな机の上に乗せられました。

アイヴィーさんは部屋を出て行ってしまうです。

…自分の身長よりも高い机では飛び降りるのは怖いですね。

金の瞳にジッと見つめられたので、私はヴェルノさんの目の前に失礼ながら座らせていただきました。

どうやら正解だったらしく、少し骨張って傷跡なんかが残る手が私の手を掴んで、何やら触り心地を確かめているようで。

私としては触られている感覚はありますが、それだけなのです。

「お前、元は人か？」

唐突な問いでしたが、はいと強く頷くとどうして人形になったんだと聞かれました。

答えられるのならば答えたいのですが、残念なことに私の中にその答えはありません。

分かりませんと言うとそうかと短く返されます。

あなたが何を求めているのか私には測り知ることは出来ません。

「私はこの船で何をすればいいのでしょうか？」

ヌイグルミでは皿を洗うことも洗濯をすることも出来ないかもしれない。せいぜい軽い荷物を運ぶかお掃除くらいしか思い浮かばないのです。

でもヴェルノさんの言葉は予想外でした。

何もする必要はねエ。

それでは何のために私を買ったのでしょうか？思わず私は聞き返してしまいました。

「珍しいもんを手元に置いておきてエと思ったただけだ。」

「では私の仕事はヴェルノさんのお傍にいますね。」

「そうなるな。」

ヴェルノさんは私を見つめ、一言「お前が女じゃねエのが惜しいな、」ポツリと呟きます。

一応女ではありますが。そう言うとヌイグルミじゃ抱けないし、そんな気も起きないと言われました。

成る程そういう意味でしたか。ヌイグルミ相手ではどうしようもありませんね。

「申し訳ありませんが、私の体では抱き枕くらいにしかなれませんか。」

「まあ、クッションくらいにはなるだろ。」

この船の中で私の仕事は二つできました。

いち、船長であるヴェルノさんの傍にすること。

に、抱き枕もしくはクッション代わりにすること。

人間の体であれば少なからずドキドキする状況なのですが、いかにせんヌイグルミの体ではドキドキどころか心音すらしていないので少女漫画的展開は望めません。

ヴェルノさんは机の上に乗った沢山の宝物の中から何かを取り出すと、指で来いと示されました。

どこまで行けば良いのか分かりませんでしたので目の前まで近寄ってみることに。

首元で何やらゴソゴソと手を動かした後満足げな顔で見下ろされました。

さん。

丁度タイミング良く扉がノックされ、入って来たのはアイヴィーさん。私を見て黄色い声——で、いいのでしょうか——を上げて抱きついてきます。

「いやーん！すっごく似合ってるわー！！可愛いー！」

ほらと鏡を前に置いてもらえると、真っ白なヌイグルミの首元には蝶々結びされた黒と白のストライプリボン。リボンの中央には青い大きめの宝石が輝いていました。

鏡の中から見つめてくるうさぎのヌイグルミは赤い目で見つめ返してきます。

花の模様が薄っすら描かれた白いワンピース姿のうさぎは私ですね。初めてヌイグルミの全貌を見ることができました。

振り返るとヴェルノさんとバッチリ目が合います。

「こんな高価な物、いただいていいのですか？」

「ああ。どうせ奪ったモンだ。」

海賊というものはもしかすると下手に働くよりお金になるのかもしれない。

大切にしなければいけませんね。

首輪のようにも見えますが、せつかくの好意を無碍にする訳にもいきませんし、光り物は大好きです。

アイヴィーさんは何やら数枚の紙をヴェルノさんに渡して難しいお話を始めてしまいました。

二人ともとても真剣な表情なので私は黙って待機するとしましょう。

机に端にぺたんと座って傍の宝物の小山をしげしげと眺めて待ちます。どれもキラキラしていて綺麗なのです。

一番近くにあった腕輪を拝借させていただいて着けてみましたが、やっぱりヌイグルミの腕には大きすぎてダメですね。大きな宝石を中心に透明で小さめな宝石がいくつも絡み合っただけの腕輪は少々重さがあります。

一体どれほどの価値があるのでしょうか？

する事ありませんので一緒に置いてあった少し汚れた布で腕輪を磨きます。多分この布は宝物を磨くための布なのです。

地味な作業ですがやり出すと楽しくて腕輪だけでなく傍にあった小山の物を丁寧に拭いてしまいました。

何かが綺麗になるという事はとても清々しい気持ちになります。

ヌイグルミなので汗なんて出ませんが、額を拭ってしまうのはクセですね。

結構な時間をかけて拭き終わるとポンと頭に手が乗ってきました。見上げるとヴェルノさんが可笑しそうに笑っています。

「随分熱心だったな。」

何せ光り物は大好きですから。

何時の間にはアイヴィーさんはいなくなっていました。何時の間に。

私は一仕事終えた心地よさに机の上に寝転がってしまうことにしました。ヌイグルミでは行儀が悪いとか、はしたないなんてないでしょうし。

耳がカサリと何かに乗ってしまいました。

起き上がると先程アイヴィーさんが置いていった紙のようで、同じ大きさの何枚かの紙には何やら色々と線やら文字が書かれてあります。

…これはもしかしくとも地図なのでしょうか。

文字や線を見ながら机の上に並べてみるとパズルのようでちょっと面白いのです。

随分変な形の島が現れました。片方は真っ平らなのですがもう反対側はリアス式海岸によく似た所がいくつもあります。…まるで一つの島が半分に裂けたようなのです。

丸いヌイグルミの手でなぞってみたりなんかしていましたらヴェルノさんに汚れるからと取り上げられてしまいました。

もう少し見ていたかったのに残念です。

ヴェルノさんが懐から出した銃を掃除し始めたので今度はそちらを見学することにしました。

現代のようにマガジンを入れるタイプではなく、古いリボルバータイプで丁寧に汚れを拭いたりシリンダー部分を確認したりと忙しいそうです。

転がされていた弾丸は丸い先端をしています。

船の揺れで机から転がり落ちそうになっていたのでワンピースのス

カート部分に入れて安全確保。弾丸を入れる時に手渡ししましたら何してんだと苦笑されてしまいました。

銃の手入れを済ませてしまつと用事はなくなつてしまつたらしくヴェルノさんは椅子から立ち上がります。

意を決して机から飛び降りようとした私に気付いてくださつて、抱えてもらいました。

歩きたいなと思つたのは秘密です。

どちらにせよ私の今の身長では扉のドアノブまで手が届きませんか
ら部屋を出ることもできませんし。

薄暗い廊下を歩いていきますと船員さん方が何人が掃除をしたり洗濯
をしたりと忙しそうにしている、少し申し訳ない思いを感じます。
役立たずなヌイグルミの体が恨めしい。

甲板へ出た私は目が点になりました。

だつて三百六十度全てが青いのです。

何時の間に出航したのでしょう？

明るい空の青と濃い海の青、海独特の磯の香りが全身を包み込みま
す。こんな広大な海の風景を見たのは初めてでしたので私の口は開
きっぱなしなのです。

…このヌイグルミでは口は見えませんが。

ヴェルノさんは船首の縁で海を眺めます。私も縁に乗りたかったのですが落ちては一大事なので置いてありました木箱の上に座ることにしました。そうすると丁度縁から頭だけ出るので安心して海を見ることが出来るのです。

でもヌイグルミというものはとても不便です。

ちょっと大きな波が来て船体がグラリと傾くと頭でつかちなこの体は、勢いに耐え切れずコロンと転がってしまうのです。

箱から落ちた私をチラリと見て「苦労してるな。」なんて言うヴェルノさんでしたが、そう思うのでしたら箱の上に戻るのを手伝って欲しかったです。

優しいかと思えば船長さんはちょっと意地悪でした。

漸く箱の上に戻ると綺麗なカモメさんが丁度船の縁にとまります。黒い瞳がキュートです。

ジッと見つめていたらカモメさんが突然口を開きました。

【あんた変な姿をしているね。】

ビックリです。まさかカモメさんの言葉が分かるとは。

「ヌイグルミですから。」

【ぬいぐるみ？それって人間の子どもが持っているやつかい？】

「はい。中身は人間ですけど、体はヌイグルミなんです。」

【へえ！不思議だねえ。】

どうやらお話好きなカモメさんは本当に不思議そうに首を傾げて私の手を嘴で軽く突きます。

カモメさんの翼を撫でさせてもらっていますとヴェルノさんが私とカモメさんの様子を見ている事に気が付きました。

「誰と話してるんだ。」

「カモメさんです。」

「…分かるのか？」

「はい。何故だか普通にお話できるようです。」

ヴェルノさんはカモメさんを見ました。

カモメさんは空を見上げると「あら、」と首を傾げます。

どうしたんですかと尋ねましたらもうすぐ嵐が来そうだと教えてくれました。でも空は気持ち良いくらい快晴なのです。

またねと言って飛んで行ってしまったカモメさんを見送ってから私もヴェルノさんへ嵐の報告を。

「これから嵐が来るかもしれないそうです。」

「あのカモメが言ってたのか？」

「はい。」

ヴェルノさんは少し考えた後、傍を通りかかった船員さんに嵐が着た時のための準備をしておくようにと声をかけました。

信じてもらえたようで嬉しく思います。

よん。

バタバタと慌ただしい足音が部屋の外から聞こえてきます。

出来ることならば私も何かお手伝いできれば良いのですが、部屋から出たら蹴飛ばされてしまいそうな怒涛の仕事ぶりに今は船長室のベッドの上でお留守することになりました。

窓の外に望む海はとても荒れています。まさにシケなのです。

カモメさんの言葉は正しかったらしくヴェルノさんが船員さんに嵐に備えておけと言って十分も経たずに空が真っ暗になってしまいました。

こんなときは人間の体でないことに感謝してしまいます。

右に左に揺れる船の中、ヌイグルミだからなのか船酔いすることもなく私は船長さんを待つことができるのですから。

当の船長であるヴェルノさんは船員の方々に指示を出すために甲板に残っています。アイヴィーさんも私を船長室に押し込むと足早に

甲板へ向かわれてしまいました。

もう一時間以上こんな状態です。

山の天気は変わりやすいと言いますが、海の天気も変わりやすいのでしょうか？

早く嵐が去ってくださいるのを祈ることしか私にはできません。

柔らかな毛布に包まれながら、激しく窓を叩く雨と波を眺め続けることにしましょう。

嵐が来るかもしれないとカモメの助言を受けてから三時間後。

酷い暴風雨を連れて来た嵐が何とか過ぎ去った船の上は大の男たちがあちこちに倒れ込み、死屍累々と化していた。

海賊として暮らしている以上、何度も嵐には出くわしてはいたけれど、これ程に大きな嵐は久しぶりの出来事である。船が沈まぬよう全力で船上を駆けずり回っていた男たちが疲労に喘ぐのも無理はない。

雨で額に張り付いてしまった前髪をウザったそうに掻き上げてヴェルノは己の船を見渡す。

あの激しい嵐だったにも関わらず船体に損傷はなく、船員も誰一人として欠けている様子はない。

カモメが教えてくれたと真白から嵐の話を聞いておかねばこうはならなかっただろう。

「アイヴィー。」

「はぁーい？なぁにいゝ…？」

副船長であり、右腕であり、頼れる仲間でもある友人の名を呼べば酷く疲れた声音が返って来る。

見た目通り体力のある彼ですらこの様子なのだ。船員たちが動けなくなるのも頷けた。

「アイツは？」

「真白ちゃんなら船長室よお。…あーんなちっちゃい子がウロウロしてたら、船員の方が逆に動けなくなっちゃうでしょー…？」

「…確かにな。」

膝よりやや大きいが、それくらいしかないヌイグルミが足元をウロついていたら下手に動けないだろう。

船長である自分のペットを蹴った踏んだとなれば罰は免れない。

…いや、アイツは気にしねエだろうな。

蹴っても踏まれてもケロリとした表情であの赤い瞳を向けてきそう
だ。

妙に肝の据わったうさぎのヌイグルミを思い浮かべつつ、それが待つ自室へとヴェルノは足を向ける。

船内では食事の支度や波で落ちたり転がったりした荷物を片付ける船員たちが慣れた様子で立ち回っていた。

濡れた服が少々冷え始めて来た頃、漸く自室である船長室に着き、扉を開ける。…が、部屋にいるはずのヌイグルミの姿はどこにもない。

机にも、椅子にも、ソファーにもいない。

着替えるために服を脱ぎながら、一体どこに行っただと新しい服を出すべくタンスに歩み寄り、そこでふとベッドの上にある不恰好な膨らみ気が付いた。

窓の下辺りにだけ小山が出来ている。

上から覗き込んで見れば毛布の端から見覚えのある白がひょっこりはみ出ているではないか。

毛布を少し引つ張って覗き込んだヴェルノの視線の先には、ぐっすり眠りこけているヌイグルミの姿があった。

…何してんだ、コイツ。

あの大シケの中よくもまあ寝れたもんだ。

脱いだ服を適当なカゴへ突っ込み、備え付けのシャワー室に入る。簡易的なものなのでやや狭い造りではあるけれど、コックを捻れば温かな湯が降った。

雨に似たその音を聞きながら冷え切った体を温め、雨と塩水で固まりかけていた髪を大雑把に洗う。ある程度体が温まると石鹸で塩を落としてシャワールームから出る。

下着姿のまま、タオルで髪の水気を拭き取った。

まだ湿つてはいるものの放っておいてもどうせ乾く。ベッドを覗き込むとヌイグルミは未だ夢の中。

「ちっせえ。」

寝転がって毛布に埋もれているヌイグルミをヴェルノはしげしげと観察してみた。

子どもが喜びそうな可愛らしい外見、一目で高級品だと分かる真っ白な毛並みは驚く程に触り心地が良い。

ヌイグルミの癖に胸元がゆっくり上下に動いているのが不思議だ。呼吸をする必要もないだろうし、第一この小さな体に肺があるとも思えない。中身は柔らかな綿しかないはずだ。

力が抜けて投げ出された耳を触っていると小さな唸り声を上げて身を振り、余程嫌だったのかポフポフと丸い手がヴェルノの手を叩く。ちょっとした悪戯心で弄り続けていると赤い瞳が薄っすら目を開けた。石のようにツルリとした丸い瞳が半眼になっている様はなかなか

かに面白い。

表情を読み取することは出来ないが雰囲気は酷く眠たげで、ぼんやりとヴェルノを見つめていた。

「……………せんちょー…?」

寝惚けているのか舌足らずな声が呼ぶ。

「起きたか。」

「ん…あらし、おさまった…ですか、?」

「お前が寝てる間にな。」

うにゃうにゃと言葉にならない呟きがヌイグルミの口があるであろう辺りから漏れ出ている。

まだ眠たいのか毛布に顔を押し付けて身を丸めてしまい、そうしてすぐに背中が規則正しく上下に呼吸をし出した。

船長である自分よりも先に寝るとは良い度胸だという思いとは裏腹

に、口元には笑みが浮かび、苛立ちや怒りを感じることはない。

これ程気分が良いのも久しぶりの事だった。

する事も無いと無沙汰だった手で眠るヌイグルミを撫でていれば部屋の扉が静かにノックされ、少ししてアイヴィーが扉を開けた。

「あら、お休み中だったかしら？」

「いや。」

起き上がったヴェルノの横で毛布に埋もれているヌイグルミを見つけ、覗き込んだアイヴィーは小さく笑いを零す。

「寝ちゃったのね。んもう、寝てる姿もすごく可愛いわあ。」

でも、もう食事なのに。困ったわねえ。

体はヌイグルミだが中身は人間でもある真白が食事をするのかさえ分からない。

本人が起きていれば確認する事も出来たが、生憎夢の中だ。

「起きたら聞けば良い。」

「…起きるかしら？」

「あの騒がしさで起きねえんなら、飯はナシだ。」

そうね、と先に船長室を出て行くアイヴィー。

その後を追うように、ヴェルノは熟睡している己のペットを抱き上げて己も食堂へ歩き出した。

「う。」

ヴェルノとアイヴィーが食堂へ行くと、見張り以外の船員のほとんどが所狭しと各々の席に座って食事を初めていた。

料理長であろう男が調理場で忙しそうに動いている。

船長と副船長用の机には小奇麗に料理が並べられており、二人分の席の周りには幹部であろう男たちが数人座り、二人を待っていた。

「あ、船長お疲れ様ッス！」

その中でも一番歳の若そうな十代後半ほどの少年がヴェルノに手を振る。すると傍にいた別の男が少年の頭を軽く叩いた。

少年は文句を垂れながらも怒っている様子はなさそうだ。

少年を叩いた二十代後半くらいの男は歩いてくる二人へ静かに目礼する。

少年と男の他には、アイヴィー同様に髪を編み上げて右目にモノクルをした青年とスキンヘッドに刺青を入れた大柄の男が席についていた。

ヴェルノとアイヴィーがテーブルまで来ると左右に座っていた彼らが席を引く。

至極当たり前な様子で椅子に腰掛けたヴェルノの膝の上を見た少年が目を瞬かせて、白いヌイグルミを指差す。

「それも連れて来たんスか？」

「ああ。」

「食事出来るか聞きたかったのに、寝ちゃってるのよねえ。」

横からアイヴィーに頬を突付かれているにも関わらず、全く起きる気配を見せない真白を抱えながら船長は呆れた表情でペットを見下ろす。

船員たちが少し離れた場所で宴並みに騒いでいるのだがヌイグルミにとっては騒音にすらなっていないらしい。

アイヴィーが手を動かしたり、耳を触ったりして漸くゴソゴソと反応を示した。

「おい、好い加減起きろ。」

やや強めに頭を叩けば手の下から「ふぎゅっ！」という珍妙な声が聞こえて来て、眠気が残る赤い瞳が緩慢な動作でヴェルノを見上げた。

先程一度起きたからか、数回瞳は瞬いた後にしっかりとヴェルノへ焦点を合わせた後にペコリとでっかな頭を下げる。

「…おはようございます?」

「言つとくが、朝じゃねエぞ。」

「でも起きたらおはようございますですよ。」

アイヴィーを覗く幹部たちは船長の膝の上でのほほんと会話を交わす生きたヌイグルミを半ば茫然と見つめていた。

気紛れなヴェルノは機嫌の良い時が極端に少なく、機嫌を損ねてしまえば幹部ですら近寄れないくらい恐ろしい。

そんな船長の膝の上に乗る、尚且つ運ばれ、平然と会話している真白は彼らから見れば驚くべき存在だろう。

ポツンと顔の中心にある黒い鼻がちょこちょこ動く。

「とってもいい香りがします。」

「飯だ。…お前、食事は出来んのか。」

「さあ、この体でご飯を食べるのは初めてなので分かりません。」

食べてみたらとアイヴィーに差し出されたスプーンを丸い手が持つ。傍からすると丸い手にスプーンがくっついていているようにしか見えないのだが、本人はきちんと持っているつもりらしい。

底の浅いカップに入れられたスープを器用にスプーンで掬う姿をヴェルノは面白そうに眺めている。

ばかり。真白本人は普通に口に入れたつもりだが、周囲の目が捉えた光景はスプーンの先の丸い部分がヌイグルミの口元直前辺りで消えているものだった。

「…食えたか？」

「はい。美味しいです。」

「味もすっかり分かるのねえ。」

真白が問題なく食事を摂れると分かり、ヴェルノも自身の食事へ手を付け出す。

すると幹部たちも食事を始めた。

消えるスプーンの先が面白いのか、はたまたヌイグルミが物を食べる様子が面白いのか、時折ヴェルノが己の皿から野菜や果物なんかを与えるものだから幹部たちは殊更驚きに目を見開く。

一方真白の方も特に気にすることなく差し出された物をモグモグと消化した。

けれど小さな体では入る量も知れている。程無くして満腹だと腹部を擦りながらカップをテーブルへ戻したヌイグルミをアイヴィーに譲り、ヴェルノはまだ残っている自身の食事をゆっくり消費する。

汚れてもいないのにきちんと口元を拭いた真白はテーブルを囲む幹部を見て、テーブルの端へしがみ付いた。

「初めまして、真白といいます。ヴェルノさんに買われた役立たずなヌイグルミですが、よろしく願いします。」

ペコリと、またでつかちな頭を下げた。テーブルとほとんど距離がなかったせいか、柔らかな頭が板にぶつかる。

「ばふつと音がして顔を上げたヌイグルミをアイヴィーが起こし、」
痛くなかった？」ぶつかったであろう額部分を撫でた。

「ぶつかる感覚はしましたが痛みはありません。」あっけらかんとした様子で頷く真白にヴェルノが笑う。

一部始終を見ていた幹部たちも、ヌイグルミが船長や船に害を成す存在には見えなさそうだと警戒心を解いて小さな存在を眺めた。

船長であるヴェルノに物怖じする事もなく話しかけ、たまに言葉に合わせて軽快に動く柔らかな手でその膝や腕を叩くので幹部は真白の動きに内心冷や冷やするけれど、船長は気にした風もなく小さな頭を軽く撫でる。

「ヴェルノさんもアイヴィーさんも、手が大きいんですね。」

ちょこんと丸い手が食事を終えたヴェルノの手に乗る。

汚れない白に金の瞳が細められ、気持ち色黒の大きな手がヌイグルミの手を掴んだ。

「人形より小せえなんて餓鬼くらいだろ。」

「なら大きくなる方法を探します。体が大きくなれば手も大きくなりますよね?」

「そんなにデケえと船から降ろすぞ。」

「あ、それは困ります。降ろされたら生きていけません。」

素直にそう言う真白にヴェルノは喉の奥で笑った。

ろく。

この間の嵐から数日が経ちました。

海賊船というからには、毎日が弱肉強食の奪い合いなのではと思っていた私の予想とは裏腹に、穏やかな日々が続いているのです。

船員のみなさんは思い思いにゲームをしたり、体を鍛えたり、好きなことをされている様子。

天気がいいからと甲板に椅子を出して——これは船員の方が運んでおりました——ゆったりと読書をされているヴェルノさんの前には私がいいます。

意味もなくそこにいるわけではありません。

「やだあ、この色も似合っ〜!」

アイヴィーさんに新しいお洋服の布地を当ててもらっているのです。明るい色や暗い色、淡い色の様々な布を私に合わせては楽しそうにニコニコと笑って、どんな服にしようかと考えてくださるので私としても出来上がりが楽しみでとても嬉しいです。

そうこうしているうちに本を読み終えたヴェルノさんが大量の布と私を見比べて言いました。

「薄い色にしろよ。」

「濃い色はだめですか？」

「服だけ目立つぞ。お前白じゃねエか。」

なるほど、白に赤や黒では私自身の色が服に負けてしまっわけですね。

アイヴィーさんも淡い水色の布を持ちながら「そうねえ。」と笑います。その布もとっても綺麗な色なのです。

寸法を測るからと必要な道具を取りに行ったアイヴィーさんを見送り、ヴェルノさんを見上げれば片眉を器用に上げてどうしたと聞かれました。

特に理由はないのです。

でもちよつとだけ恥かしかつたので傍にある布の山に潜り込んでしまいました。そうすると外から楽しい笑い声が聞こえてきます。

船長さんは私が何かするといつも笑いますね。

私はそんなに変なことばかりしているのでしょうか？

布の中でこそそそとしていると足音が近付いて来て、横辺りで止まりました。

「あら？真白ちゃん？」

どうやらアイヴィーさんだったようです。

「はい、ここです。」

布の中から何とか頭だけ出すとアイヴィーさんの顔が一気に笑顔になりました。

可愛い可愛いと、それこそ猫可愛がりするように頭を撫でられます。アイヴィーさんは船長さんとは逆に、いつも私を可愛いと褒めてく

ださいますね。

このヌイグルミの姿では当たり前でしょう。

私自身もとても可愛いヌイグルミだと思います。

布の山からアイヴィーさんは私を上手に引き抜くと、メジャーのよ
うなものを手にして見下ろしてきました。

「お部屋で測った方が良いかしら？」

「？」

「服着たままだとしっかり測れないのよねえ。」

そうですね、体のサイズを測るときは基本下着姿でやります。

ヌイグルミもどうやら同じ方法のようですが、私はここで測ってい
ただいても全く問題ありません。

何せヌイグルミですから服を脱いだところでもふもふ、ふわふわの
寸胴な体が出てくるだけなのです。

「構いませんよ。」と言えばそう？と少し考えたアイヴィーさんが、
ちよつとだけ体をスラして甲板で遊んでいる船員の方々から見えな
いように壁になってくださいました。

ヴェルノさんとアイヴィーさんの傍にはあまり船員の方も近付かないようなので、それで充分目隠しになります。

ワンピースを脱ごうともそしていましたら、頭上からとても視線を感じました。

見上げるとヴェルノさんが肘掛けに頬杖をつきながらニヤリとした笑みを浮べて私を見下ろしています。

「どうした？脱がねエのか？」

いくらヌイグルミの体でも中身は女の子なので、そんなに注視されるとやっぱり少しだけ恥かしいのですよ。

「ヴェルノ、女の子の着替え中は見ちゃダメよ？」

「俺のペットだ。別に構わねエだろ。」

「もう！そういう問題じゃないわ！」

アイヴィーさんが注意してくださいますが、船長さんはどこ吹く風。

全く悪びれた様子もなく私を見ています。

とても気になりますが仕方ありません。

ヴェルノさんに背中を向けてワンピースを脱ぐとアイヴィーさんが綺麗に畳んでくれました。

ワンピースの下は自分でも気が付きませんでした。が丈の短いキャミソールのようなものと、かぼちゃパンツを着ていたようで、裸にならずに済みました。

かぼちゃパンツなんて生まれて初めてです。

しげしげと眺めていると「色気がねエな。」とヴェルノさんから呆れと笑いの含んだお言葉を頂戴します。

ヌイグルミに色気を求められてもそれは難しい注文なのですよ。

「ナイスバディな方が好みなのですか？」

「そうとは限らねエよ。俺を苛立たせねエ女が居りゃあ一番良い。」

「…ヴェルノさんは短気さんなのですか？」

初耳です。驚きの新事実です。

テキパキと私のサイズを測るアイヴィーさんが「そうよお、とーつても短気なんだから。」と溜め息混じりに言いました。

でも私はこの船に乗らせていただいてから一度も船長さんが怒る姿を拝見したことはありません。

むしろ大らかで心の広い方だと思っておりました。

ほとんど笑っている姿しか目にしていませんので。

そう私が告げましてもヴェルノさんには「お前は面白いからな。」とよく分からない返事を返されてしまいます。

仲良きことは美しきかな。

喧嘩しているより、怒るより、笑っている方が私も嬉しいですし、美形なヴェルノさんの笑顔は素敵なので、怒った姿も気になります。がやはり今のままが一番いいのかもしれない。

「はい、終わったわよお。」

メジャーらしきものを巻きながら服を着ちゃいましょうねとアイヴィーさんに促され、ヴェルノさんの痛いくらいの視線を背に感じつつワンピースを着込みます。

布一枚とは言いましても、やはりお洋服を着ると安心するのです。

いつ頃完成しますかと聞いてみれば早ければ明日にでも一着くらいは出来上がると聞いて嬉しくなりました。

汗を掻かない身とは言え、流石に何日も同じ服を着ているのは嫌なのです。

「お風呂にも入れたらいいのですが…、」

「風呂？」

「はい、ちょっと体が汚れてきてしまっているのです。」

「入れるのかしら？」

食事と同じで何事も試してみなければ分かりません。

聞くより慣れろ、考えるより行動に移せ、です。

船長室の隣にあります浴室をお借りしてもいいですか。そう聞くとヴェルノさんが呆れた顔で今から入るのかと言いました。

全は急げ。思い出したが吉日。意欲があるうちにやらなければ。

ヴェルノさんは少しだけ笑って好きにしろとおっしゃってくださいました。

船長室まで行ける？とアイヴィーさんい聞かれてちょっと悩みましたが、はいと答えておきます。

いつも抱っこされていますが、せつかなので自分の足で行ってみたいのです。

意気揚々と船内へ乗り込む私にヴェルノさんの声がかかります。

「蹴られるなよ。」

そんな小さな気遣いが嬉しくて、私は大きな声で「はいっ」と返事をして開いている扉から薄暗い船の中へと足を踏み入れました。

なな。

薄暗い船内ではそこかしこの部屋から楽しげな笑い声が聞こえてきます。

船員のどなたかが船長さんはとっても怖いのだとおっしゃっておりましたが、こんな穏やかな船の船長さんが恐ろしいとは思えません。

とりあえず通路を歩く人の邪魔になつてはと端の方を歩くことにしました。

大きな船ですの中はとても入り組んでいまして、若干迷つてしまいそうになります。

やはり抱えてもらっているとなかなか道を覚えることができませんね。

それでも何とか食堂まで辿り着きますと何やら楽しげな談笑が響いてきました。食堂をちよつと覗き込むと幹部の方々が一つのテーブルに集まって何かをしています。

…すごくすごく気になるのです。

お邪魔になつてはいけないのでそつと近付いたはずなのですが、流石みなさん海賊と言っただけあつて後三メートルくらいの位置まで来た私を全員がパツと振り返りました。

あまりに息がピッタリに振り返るので私もビクリして足が止まつてしまいます。

「あ！うさぎ！！」

一番歳下のセシル君が私を指差して声を上げます。

私はうさぎのヌイグルミではありませんが、できれば名前で呼んでいただきたいのですよ。

そう思っていましたら右目にモノクルをかけたレイナーさんが「彼女には真白という名前があるんだよ。」と彼を窘めてくださいました。

どうしましうか悩んでいると一番私に近い場所に座っていた黒髪のユージンさんに手招きされます。

無表情でしたので少々緊張しましたが近寄ると優しい手付きでテーブルの上に乗せてくれたのです。

スキンヘッドのディヴィさんが目線を合わせるように体を屈めて聞いてきました。

「一人か？」

落ち着いた声に頷けばレイナーさんが珍しいねと目を丸くします。

今まではアイヴィーさんかヴェルノさんがずっと傍にいましたから、無理もないのです。

「みなさんは何をしているのですか？」

よく見てみれば全員の手には小さなナイフが握られていまして、この光景だけを見ると空恐ろしいのですが。

セシルさんがニツと笑って「ジャグラーって言う海賊のゲームツスよ！」と私の前に木で出来たサイコロのようなものと、いくつも大きな板が入った袋を置きます。

サイコロは私が両手で持たなければいけないくらいの大きさで、みなさんの手の平に何とか納まるくらい大きかったです。

一には髑髏が一つ、六には髑髏が六つ描かれたそれは私のよく知るサイコロとは真逆の黒一色で、髑髏だけがいやに白く塗られています。

した。

「まずこの賽を振って自分の数字を出すんす、それから板に書かれた自分の数字の所をナイフで刺すんす。中に入っていた硬貨と同じ硬貨を入っていた数と同じだけ手元に取り出すことができるんす。金貨や銀貨や銅貨は全部同じッスけど、黒と赤の硬貨は別ッス。」

金、銀、銅、黒、赤。五つの硬貨が目の前に置かれて、そのうち金銀銅だけセシル君が持っていてしまいます。

黒をレイナーさんが、残った赤をディヴィさんが取りました。

「黒は全員が持つ全ての硬貨を奪うことが出来るんだよ。」

「赤は逆に自分の硬貨を全て没収される。没収された硬貨は捨て硬貨になって、誰の物にもならない。」

「では運がよくなければ勝てないですね。」

「その通り。海賊には力だけじゃなく、運も必要だからね。」

せつかくだからやらないかと誘われましたが、見てみたかったので

丁寧に遠慮させていただきました。

みなさんはそうかと笑って早速ゲームをやり始めます。

全員がサイコロを振って、セシルさんは二、レイナーさんは五、ユージンさんは一、デイヴィさんは三。全員でナイフを持つと一斉に板の自分の数字が書かれた場所を突き刺しました。

どごん。大きな音と衝撃がテーブルを少し揺らします。

ビックリして後ろに転がった私をユージンさんが慌てて受け止めてくださいました。

他のみなさんは可笑しそうに笑います。

「ありがとうございます。」

御礼を言っているとユージンさんは首を緩く左右に振りました。

不思議に思っていましたらセシルさんが「ユージンは話せないんですよ。」と教えてくれました。ちょっとだけ申し訳なくて謝った私の頭をユージンさんは優しく撫でてくれます。

気にしなくて良いと言われた気がして少しホッとなりました。

板を覗き込むとナイフを抜いたみなさんがそれぞれの数字部分の板

を外します。

セシルさんは銅貨三枚、レイナーさんは金貨一枚、ユージンさんは銀貨四枚、デイヴィさんは銀貨二枚。今のところ一番はレイナーさんだそうです。

銅貨五枚で銀貨一枚、銀貨五枚で金貨一枚分に相当すると教えてくださいました。

これを五回繰り返し返して一番多額の硬貨を持っていた人が勝ちなのだそうです。

遊びも気になりますが、金貨や銀貨のキラキラとした輝きがとても魅力的なのです。金銀銅の硬貨はこちらのお金らしいのですが、本物で出来ているせいかズッシリと重く、とても綺麗です。

ジツと見つめていましたらレイナーさんが苦笑して「後で船長にお願いしてみたら？きつと貰えるよ。」と言いました。

後で必ずお願いすることにします。

まだ遊ぶ様子のみなさんに御礼を述べて、ユージンさんにテーブルから降ろしてもらった私は今度こそ船長室へと向かいます。

薄暗い通路を歩いていると何人かの船員の方々と擦れ違いましたが、みなさん私をみると少し驚いた顔をして、それから、

「どこ行くんのだ？」

「暗いから気をつけろよ。」

と声をかけてくださいます。

それがとても嬉しくて返事を返せば数人の方が私の頭を撫でていきました。

ヴェルノさんもそうですが、この船の方は頭を撫でるのが好きなのですね。

優しい船員の方々の好意にほっこりした気持ちになりながら、私は暗い通路を船長室までゆっくり歩くことにしました。

はち。

さらに数人の船員の方々と擦れ違い、ようやく私は船長室に到着することができました。

後はこの扉の向こうへ行かなくてはなりません。

が、問題が現在進行形で発生中なのです。

困ったことに扉が開けられません。だって、私はヴェルノさの膝より少し上くらいしか身長がないのですから、それよりずっと高い位置にあるドアノブに手が届くわけもないのです。

…なぜ今まで気が付かなかったのでしょうか？

ああ、困りました。どうしようと考え、そこでふと先ほど廊下で出会った船員の方が頭に思い浮かびます。

あの方をお願いして扉を開けていただきましょう。

少だけ通路を戻ると、先ほどと変わらず掃除をしていらっしゃる船員の方が戻って来た私を見て首を傾げます。

「ん？どうしだ？」

大柄な方ですが私に目線を合わせようとぎざぎざ屈んでくださいます。

「すみません、船長室の扉を開けてもらえませんか？」

「船長室、かい…？」

「はい。扉の取っ手が高すぎて、手が届かないのです。…あ、船長さんに許可は得ていますので大丈夫ですよ。」

そう告げますと納得した顔で快く了承してくださいました。

船長室へ戻り、船員さんが扉をそつと開けて私を見ます。どうすべきか迷いましたが、「また開けて欲しくなったら扉叩けよ。…近くで掃除しててやるから。」と気遣ってくださいいます。

この船にいる方々は本当になんて素晴らしい人たちなのでしょう。

深々と頭を下げた私に苦笑して船員の方は扉を閉めてくださいまし

た。

ヴェルノさんのお言葉に甘えて浴室に向かいますと、小さなバスタブと体を洗うスペースだけの狭く、簡易的な場所でした。私からすれば十分な広さですが長身の船長さんには些か狭いのだとも思います。

一度浴室から出て傍に積まれていたタオルのような布から大きなものと小さなものを二つお借りすることにします。

浴室の扉は横にスライドさせるものだったので私でも普通に開け閉めすることが出来ました。

持ってきたタオルを浴槽の隅っこに置き、シャンプーなどのボトルが置かれている段に上ってやや高い位置にあるシャワーのノズルを何とか引きおろします。

コックを捻ればノズルからザアと勢いよくお湯が出て、そのお湯にそっと手を触れてみました。

…温かいですね。

濡れた手を見ると不思議なことに水は染み込んでいません。でも濡れた感覚と言いますか、ああお湯に触れているなという感覚はするのです。

一度コックを戻すとタオルで軽く手を拭き、ワンピースと下着を脱いで脱衣所にあった箱の隅へ置かせていただきました。

そこでふと頭上から慌ただしい足音が聞こえてきた気がしました。

何ごとでしょうか？

気になりますが、今はせつかくの至福の一時ですので後で聞いてみることにします。

改めてシャワーでお湯を浴びれば久しぶりの心地よさに知らず溜め息が漏れてしまいました。

「…お風呂に入れるというのは、幸せですね。」

いくつか並ぶボトルを見ますとシャンプー、コンディショナー、ボディーソープそれからあまりよく分からないものがあります。

…ヌイグルミは髪がありません。でも、一応シャンプーをしておくべきでしょうか？

とりあえず普段と同じようにシャンプーを手に取って泡立て、わっしやわっしやと頭を洗ってシャワーで流します。二度シャンプーをした後に同様にコンディショナーでも洗います。

そのあとに、傍にあった丸いものにつけて体を擦ります。

柔らかいスポンジみたいなそれはとても泡立ちがよくて、あつという間に私の全身は泡だらけになってしまいました。

それすらも楽しくて仕方ありません。

鏡に映ったうさぎのヌイグルミは、あわあわ、もこもこ姿。体を擦ると泡は留まることを知らないのではと思うくらい、ふんわりと増えて行きます。

泡を充分堪能してシャワーで流してしましたら船長室の扉が開く音がしました。

どうやらヴェルノさんが戻られたようなのです。

ノズルを壁にかけていましたら、脱衣所の扉が開く音がしました。続いて服の擦れ合う音が扉越しに響きます。

…もしかして…？

「ヴェルノさん？」

声をかけると扉の向こう側から「まだ入ってたのか？」と呆れを滲ませた声が返ってきました。

それから、勢いよく浴室へと繋がる扉が開かれます。

何も履いてない足が見えます。でも、恐ろしくて上を見ることは出来ません。

「あの、あの…、」

視線を落としたまま、何と云えばいいのが困りました。

出て行ってくださいではおかしいのです。この浴室も船長室の一部ですから、ヴェルノさんのものですし。

タオルで隠そうとしましたが先に手を掴まれてしまって、それすらもできません。

ヌイグルミとは言え恥かしさがあります。

なのにヴェルノさんは浴槽にお湯を張りながら、私を抱え上げて専用の椅子みたいなものに腰掛けてしまいました。

…あ、タオルは巻いているんですね。

膝の上に乘せられてタオルが巻いてあることを確認できた私はそつと顔を上げます。目の前にはニヤリと笑うヴェルノさんの整った顔。本当にヌイグルミでよかったのです。もし人の体であったのならのぼせているか、悲鳴を上げてしまっておりまして。

「お前、ずっと此処に居たのか？」

頭を洗い出したヴェルノさんに「はい。」と頷けば、低く喉の奥で笑われました。

見上げると片方だけ開けられた金の瞳が丁度私を見下ろしてきます。

「襲撃された。」

「え？襲撃って、襲われたってことですか？」

「ああ。あんな騒いでたのに気付かなかったのか。」

「…泡で遊ぶのに忙しかったのですよ。」

泡をシャワーで洗い流し、今度はリンスを使います。膝から下ろしてほしいのですが、下りようとするや強い声で下りるなと命令されてしまいます。

体まで洗い終わったヴェルノさんは私を抱えたまま、今度は浴槽へざぶんと浸ります。

危うく沈みそうになりましたが、それに気付いてくださったヴェルノさんが私を抱えたまま狭い浴槽から足を出して横になりました。

きゅ。

「襲撃は、なんともありませんでしたか？」

気持ち良さそうに目を閉じていたヴェルノさんは私の問いにああと細く目を開けます。

「負傷者も死人もねエ。オマケに今回は良い収穫だった。」

「お宝ぞつくづく、ですか？」

「まあ、宝じゃねエが色々必要なモンも手に入ったぜ。」

それは相手の船の方々がお気の毒でしたのです。

この船は海賊船ですから、略奪行為はヴェルノさんたちにとってと

ても自然なことなのでしょう。

それで養われている私がそのことについて、とやかく言う資格もありません。

でも見たところ怪我もないご様子なので安心しました。

浴槽の縁にべったりとくっつく私を見たヴェルノさんは「そっぴや、風呂は問題ねエみてエだな。」と背中を指で突付いてきます。

服を着ている時ならばまだしも、今の状況でそれはダメなのですよ。離れようとすれば逆効果だったようでガツチリ抱え込まれてしまいました。

結局ヴェルノさんが心行くまでお風呂を堪能し、俺が出るまでお前も出るなという命令に従わざるを得ない状況になったのです。

…ヌイグルミでよかったと心底思いました。

だいぶゆったりお湯に浸かっていたヴェルノさんは起き上がると浴槽の縁に置いてあったタオルで私を包みます。

全身をさらすのは恥かしかったのですが、綺麗な金の瞳には変な色はなく、ただ純粹に楽しげに細められていたので澁々拭いていただき、先に失礼することに。

脱衣所できちんと拭くと完全に水気はなくなり、入浴前よりもふんわりもここのヌイグルミが鏡に映ります。

毎日入浴せねばこの綺麗な白と素晴らしい手触りは維持できないかもしれませんね。

ワンピースを着終えて脱衣所から出ますと、アイヴィーさんとバツチリ目が合ってしまいました。

ニツコリ笑顔で「ヴェルノと一緒に入ってたのねえ。」なんて語尾にハートがつきそうな口調で言われてしまい顔が熱くなってしまう。

ヌイグルミなので見た目では分からないでしょう。

とりあえずアイヴィーさんとソファアに腰かけて待っていましたら、程無くしてヴェルノさんも脱衣所から姿を現しました。

ガシガシと適当に拭っているからか、髪からはポタポタと雫が落ちています。

「やっと出て来たわね？遅いじゃない。」

ソファアから立ち上がったアイヴィーさんは不満そうな声でそう言いました。

ヴェルノさんは意地の悪い笑みを口元に浮べて私を抱き上げます。

「うるせエな。せつかく一緒に入ってたんだ、楽しませろよ。」

「アタシたちも色々楽しみたいの！全く、今回は酒の手に入ったから船員も首を長くして待ってるんだから。」

「分かってる。行きやあ良いんだろ、行きやあ。」

薄いワイシャツ越しに温かな体温を感じると、とてもホッとするのは何故でしょうか？

抱えられてお二人について行きましたら食堂ではなく甲板へ出てしまいました。

甲板の上には何やら大量のお酒と食べ物、それから沢山の宝石や貴金属類が山を成しているではありませんか。

驚いて見つめていた私に気付かなかったのか「思ったより少ねエな、」ポツリとそうヴェルノさんは呟きます。

これで少ないのですか？

見上げるとやや不満そうな顔の船長さん。アイヴィーさんが苦笑します。

「どうやら商品売り終わった後だったみたい。その分のコッチも

しつかり回収してあるから、そう怒らないでよお。」

親指と人差し指で丸く形を作って笑うアイヴィーさんに「そうか。」と返事を返したヴェルノさんは先ほどよりも少しだけ機嫌が直っていました。

…アイヴィーさんの今のあれは、お金という意味ですよね。きっと。商船の方々には申し訳ありませんが、奪った以上はこの船の、そうしてヴェルノさんの物なのですから仕方ありません。

弱肉強食とは本当に恐ろしい世界ですね。

入浴する前にありました椅子は船尾から船首に移され、ヴェルノさんがどつかりと椅子に座ります。

横に下ろされた私もちよこんと座っていたらお酒とお料理を持ったアイヴィーさんと幹部のみなさんが回りに座りました。

船長さんは渡されたグラスを高々と掲げます。

「今日はなかなかの収穫だった。お陰で酒も手には入った…野郎共、今夜は派手に飲め！俺が許す、宴を始めろ！！」

なみなみと注がれていたお酒をヴェルノさんが仰ると、全員が一気に手に持っていたジョッキの中身を飲み干しました。

一気に船員さん方が騒ぎ出します。

私は渡されたコップを両手で抱えたまま出遅れてしまったのです。なんと言う不覚。

そこかしこで騒いで、飲んで、時には踊り出す方々がいる甲板はまさに宴という言葉が相応しい状態になりました。

その様子を目を細めて眺めているヴェルノさんは船長の顔をしています。

嬉しそうな、楽しそうな、穏やかで、見守るような金の瞳は吸い込まれてしまいそうなくらい綺麗に輝いていたのです。

ぼんやりと見上げていましたら視線に気付いたヴェルノさんがフツと緩く微笑んで私の頭を撫でました。

筋張っている手は少し浅黒く、いくつかの古い傷跡が薄っすらと残っています。そんな大きな手で何度も何度も子どもにするように頭の上をゆっくり動くのです。

「ヴェルノさんは、幸せですか。」

唐突な問いでしたが、特に気にした風もなくさあなとはぐらかされてしまいました。

アイヴィーさんは幹部の方々とジャグラーを楽しんでおられます。

離れた場所では何人かの方々が既に泥酔状態で酷く楽しげに笑っていて、その光景をどこか眩しそうに見つめているヴェルノさんは、私から見ると幸せそうに見えました。

そつと船長さんの足に寄りかかりますと、金の瞳が船員さん方から私へ向きます。

優しい…本当に穏やかで優しい色の瞳に映った私を見て、少しだけ泣きたくなっていました。

「…私は、とても幸せなのです。」

頭に乗ったままの手に触れれば温かな体温が丸い手の先から全身に広がる気がしました。

この手が例えどんなに大勢の人の命を奪ったとしても、沢山の悪事を働いたとしても、私はヴェルノさんや船員の方々を嫌いになることは出来ないでしょう。

視線を向けた先には笑い合うみなさんの姿。

海賊とか、そんなもの関係ないくらい無邪気な笑顔がそこにあるのです。

「海賊でもいいんです。みなさんは私にたくさん優しくしてくださいまし、たくさんの方の新しい方を教えてくださいまし。…ヴェルノさんに買っていたからこそ知ることが出来たのです。こんな素敵な海賊船に私を連れてきてくださって、ありがとうございます。――私は今、とても幸せなのです。」

稚拙な言葉しか組み合わせられないのが歯痒いのです。

この温かな気持ちが伝わればいいのに。

見上げた先で柔らかく笑うヴェルノさんの表情に、ないはずの鼓動がドキリと音を立てた気がしてしまいました。

じゅっ。

商船という船は本当に商売のための船だったのですね。

いつもより少しだけ豪華な朝食を見ながら感心してしまいました。

さて、今日着ているワンピースは昨日までの物ではありません。

アイヴィーさんお手製の可愛いお洋服なのです。

白を基調としたふんわりフレアスカートのワンピースは、袖と襟、スカートの裾部分が淡い桜色で、小さな同色のお花がワンピース全体に散らばっています。

ウエスト部分の後ろには桜色の大きめなリボンがあって存在感を主張していました。

丸襟なのがとってもキュートですね。

スカートの裾も段々になっていて歩くとふわっと揺れて可愛いのです。

耳には片方だけ白と桜色のストライプ柄のシュシュみたいなものも装着されて、女の子が大好きそうな可愛らしいヌイグルミに仕上がりました。

「いやーん、真白ちゃん可愛過ぎ〜っ！」

服を汚さないよう気を付けてお野菜を食べていますとアイヴィーさんは体をくねらせて悶えます。

可愛くなったのはアイヴィーさんが作ってくださったお洋服のお陰なのですよ。

そう言えばギュギューツと抱きつかれてしまいました。

船員の方々は遠めに私を見えています。でも、その目は穏やかなので怖くはありません。

幹部の皆様も私の姿に頭を撫でながら「似合ってる」と褒めてくださいます。

後は船長であるヴェルノさんだけなのですが生憎彼はまだベッドの中で就寝中なのでですね。

早く起きて来ないでしょうか。

口の中でしゃくしゃくと鳴るお野菜の瑞々しさを噛み締めつつ、食堂の入り口ばかり気にしていたせいかな食事を終えるとユージンさんが前触れもなくヒョイと私を抱え上げました。

見上げると綺麗な無表情で見下ろされます。

「行つてらっしゃい。」

訳知り顔で手を振るアイヴヴィーさんに同様に振り返し、ユージンさんが私を抱えて通路を歩きます。

道順からしますと船長室なのです。でも、ヴェルノさんはお休み中なのです？

スタスタと足取りも軽やかに船長室に到着したユージンさんはノックを一度して、返事がないのに躊躇いもなく扉を開けてしまいます。

朝私と一緒に寝かせていただいていた時と何ら変わらない様子でヴェルノさんはベッドで眠っていました。

ユージンさんは私をベッドの上にポイと投げ捨てますと口元を微妙に引き上げて意味深な笑みを残して去ってしまいます。

…私にどうしろと言つのでしょうか？

熟睡しているヴェルノさんの横で投げ出された状態のまま悩んでい

ましたら、金の瞳が薄っすらと開きました。

「あ、おはようございます。」

「……………」

眠いからか、それとも返事をする気がないのか無言と一緒にジッと見つめる視線まで返されます。

少ししてから何か納得した風に一度目を閉じたヴェルノさんは私を引き寄せます。これはもしかしくなくても抱き枕のお仕事再開でしょうか？

せっかく起きて朝食まで頂きましたのに、これで寝てしまつては牛になつてしまうのです。

太ったヌイグルミはさすがに嫌なのですが…。

ガッチリ固く抱き締められておりまして逃げる隙間が一部もありません。

数度腕を叩きましたら不機嫌な唸り声と共にうなじ辺りに顔を埋められてしまい、起こすのは断念せざるを得ない状況になりました。

真後ろから聞こえて来る寝息と首筋に当たる息がくすぐったいのですが起きるまできつと離してくださらないのですね。

腕の中で振り返りますと目の前には丁度ヴェルノさんの顔があります。

そつとその頬に自分の頬を寄せ合わせて、私も眠ることにします。

「……寝るか、普通？」

真白から規則正しい寝息が聞こえて来ると、ヴェルノはパチリと目を覚ました。

ユージンが部屋の前に立った時には既に起きていたのだが、ベッドの上にぽんと飛んで来たものが真白だったためそのまま狸寝入りを決め込んでいたのだ。

見てみればアイヴィーが作っただろう可愛らしい服に身を包んだ又イグルミが投げられた格好のまま、ころんと横になっているではないか。

のほほんと挨拶を交わしてくる又イグルミは、外見に反して中身は

少女だ。

ベッドの上で異性というのに相変らず危機感やら羞恥やらを感じていない様子の真白に何とも言えない気持ちになりながら抱き寄せる。

でっかちな頭の後ろに顔を寄せると白くやわらかな体は自分と同じ香りがした。

昨日入浴したからだろうか？

自分と同じ匂いがするだけだが、とても良い。自分のものとハッキリ分かる。

これからは毎日入浴させようと内心思いながら目を閉じていると、寝てしまったと思ったのか腕の中の真白は振り返り、頬に頬を寄せて寝入ってしまった。

少女のような無垢さと、大人のような聞き分けの良さと、予想のつかない行動をするヌイグルミ。

何もかもが初めてで面白い。

ぐっすり眠りこけている真白の腕や耳をふにふにと弄りながら、何時もより少し早く目覚めてしまったヴェルノは目の前のヌイグルミについてツラツラと思考を巡らせていた。

が、不意に甲板の方が騒がしくなった気がして弄っていた手を止める。

音に集中していれば船長室へ向かってくる足音がした。

おそらくアイヴィーだろう。

ヴェルノがそう検討を付けるのと扉がノックされるのは同時で、入室を促してやれば思ったとおりアイヴィーが入ってくる。

「どうした。」

「ルイスの船が見えたわ。多分会いに来たんだと思うけど。」

「久しぶりだな。」

「そうね…半年ぶりじゃない？」

起き上がったヴェルノは手早く服を着替え、すうすうと寝息を漏らす真白を起こさぬよう細心の注意をしながら抱き起こし、片腕に乗せて自身の肩にもたれ掛けさせる。

動かしたせいで少し身じろいだものの丸い手が服を手繰り寄せる姿にフツと笑みを零した。

寝ている真白の前では流石のアイヴィーも騒がなかったがニツコリとした笑いは嬉しそうな、それでいて楽しそうなものである。

船長室から出てきた二人の姿を見て、次に眠っている真白の姿を確

認した船員たちは小さな声で挨拶をしていく。

甲板へ出て来たヴェルノに幹部たちも振り返り、その腕の中で気持ち良さそうに寝ているヌイグルミに脱力した様子で互いに顔を見合わせた後に誰からともなく笑い合った。

じゅう ぶらす いち。

幹部たちが笑っているうちに遠くにポツリと見えていた船が目視で
きるほどまで近付いた。

ヴェルノは船員に指示をして帆を畳み、自船の速度を落とす。

穏やかな波に乗って近付いて来る船に掲げられた旗は髑髏が描かれ、
見慣れたそれは自分のものとよく似ている。

やがて隣にゆっくりと追いついたその船から男が一人ヒョイと飛び
移ってきた。

背中まである鳶色の髪に、金の瞳を持つ男はヴェルノの前まで来る
と笑みを浮べる。

「久しぶりだなあ。」

差し出された手をヴェルノは力強く握り返した。

「ああ、最近見ねエから海軍に殺られたかと思っただぜ。」

「冗談。あんな奴らに負けるなんてありえないっての。」

「そりゃ良かった。元気そうで何よりだ、ルイス。」

ルイスと呼ばれた彼は自身の船に手を振って合図を送る。

そうすれば互いの船から梯子のようなものがかけられ、自由に行き来できるようになった。

船員たちも同士の無事を確認し、確かめ合い、楽しげに話を始める。そんな姿を眺めていたヴェルノにルイスは気になっていた疑問を投げかけた。

「ところで、その人形はどうしたんだ？」

海賊船長と真っ白なふわもこヌイグルミというあまりにもアンバランスな組み合わせにルイスは苦笑する。

ヴェルノは眠ったままの真白を見下ろし、ああと溜め息のような返事を返した。

「ペットだ。」

「ペット？って…え、それ生きてんのか？」

「生き物じゃなきゃ飼えねエだろ。」

トントンと手で小さな背を軽く叩いて起床を促せば、ヌイグルミはヴェルノの服に顔をすり寄せながら「…うー…、」と小さく唸る。

嫌がる素振りを見せたヌイグルミをルイスは目を見開いて見つめ、溜め息を零す。

そんなもんも居るんだなあ。なんてどこか感心した様子で呟いた。聞き慣れない声に反応したのかピクリと耳が動き、閉じていた赤い瞳がぼんやりと開かれる。

最初にヴェルノを見て、それから酷く緩慢な動きで周囲を見回し、見慣れぬルイスでピタリと首が止まった。

焦点のズレていた瞳がすっかり合わさった途端、ヌイグルミはびっくりにした様子で目を見開いた後にヴェルノの腕の中から逃げ出してしまう。

ぼてり。結構な高さを顔面から落下した真白には抱えていたヴェルノも若干驚いていたけれど、あたふたと傍にあった木箱の後ろへ隠れる姿はまさに草食動物の動きだった。

箱の影に入り切らずに耳が出てしまっているのだが恐らく本人は気付いていないのだろう。

赤い瞳がチロリと箱の影からルイスを覗き見て、目が合うとパツと引っ込んでしまった。

妙に愛嬌のあるその動きに先に噴出したのは主人のヴェルノ。

箱の影でモソモソと動くヌイグルミに振り返り腰を落とす。

「おい、隠れんな。」

子どもを諭すような優しい口調でヌイグルミに声をかけたヴェルノにルイスは驚く。

どちらも海賊としてはかなり名を馳せている悪だが、彼が誰かに対してこれほどに優しい声をかけることなど初めて見る光景だったのだ。

主人に言われたからか、箱から顔を半分ほど出してコチラの様子を伺うヌイグルミ。

周囲の幹部や船員たちも苦笑するだけでペットの無礼を気にした様子もない。

「――真白。」

少し強めにヴェルノが名を呼ぶと真っ白な耳をピンと立てて、顔を上げた。

箱の裏側へ逃げ込んだ時よりも、ずっと早い動きで真白はヴェルノの足に駆け寄り、しがみ付く。

「名前！今、名前を呼んでくださいました！！」

「それが何だ。」

「初めてです！ヴェルノさんが真白って呼んでくれたの、初めてでしたよ！」

ルイスを警戒していたことなど綺麗サッパリ忘れて足元でワーワー騒ぐヌイグルミを抱き上げたヴェルノは呆れた表情で、だがとても楽しそうな雰囲気滲ませて「くだらねエな。」と言う。

それから真白をルイスの方へ向かせた。

途端にピタリと口を噤んでしまった真っ白なうさぎのヌイグルミにルイスだけでなく、その場にいた全員が苦笑する。

「俺はルイス・クラウザー、小さなヌイグルミ君の名前は？」

「あ…真白といいます。」

「真白か。真っ白だからとか？」

「いえ、もともとそういう名前なのです。」

言いながら真白はマジマジとルイスを見て、それから自分を抱えるヴェルノを見た。

分かりやすい動きにヴェルノが笑いながら種明かしをする。

「ルイスは俺の兄だ。」

「え、え？ルイスさんはヴェルノさんのお兄様なのですか？」

「そう、正真正銘ヴェルノは俺の弟だよ。」

衝撃の事実にならずショックを受けている様子の真白を抱え直し、ヴェルノはせっかくだから今日は宴でも開こうと提案し、それは良いと楽しげに承諾するルイスに双方の船員が両手を上げて喜んだ。

置いていかれていた真白も漸く我に返って「宴ですか。」と呟く。

それを耳聡く聞いたルイスがなかなか手に入らない物も幾つか持ってきたと言うものだから、真白の興味は既に「珍しいもの」と「宴」に向いてしまう。

さっきまではおっかなびっくりだったクセに、キラキラと目を輝かせてルイスを見やるヌイグルミの好奇心の旺盛さと単純さにヴェルノは一度軽く頭を叩いてから笑った。

じゅうぶらずに。

ルイスさんという、ヴェルノさんのお兄様が来られたからか、船の中はいつもよりとても騒がしい声が聞こえてきます。

でも嫌な気持ちは微塵も湧きません。不思議なのです。

ちょっと離れた場所ではルイスさん率いる船員の方々とヴェルノさん率いる船員の方々が互いに肩を組み合って楽しそうにお酒を酌み交わしていました。

「おい。」

かけられた声に視線を戻しますと、見たこともない不思議な物を沢山持ったルイスさんが私を見つめています。

先ほどは珍しい物という言葉に釣られてしまいました。今回はそ

うは行きません。

私はヴェルノさんのペットではありませんが心持ちは船員の意気なのです。

例えお兄様であろうとも簡単になびいてはいけないのです。

キラキラと輝いて誘惑している貝殻のネックレスなどはとても気になりますが見てみぬふりです。

プイとそつばを向きましたら頭上からヴェルノさんのクツクツと笑う声が降ってきました。

見上げれば案の定口元に手を添えて愉快そうに目を細めていらっしやいます。

「良いのか？ 気になるんだろ。」

思い切り心の中を見透かされているのです。

「ダメなのです。」

「何がだ。」

「私はヴェルノさんのペットです。だから、簡単に他の人になびいては面子に関わるのです。」

私の言葉に一瞬虚をつかれた顔をし、それから口を開けて大きくヴェルノさんは笑い出してしまいました。

ルイスさんも、アイヴィーさんも、幹部の皆さんも肩が震えていらつしやいます。

見つめていますと未だ笑いの収まらない様子のヴェルノさんが頭の上に手を乗せてグリグリと撫でられます。

痛みはありませんが押し潰されてしまいそうなので、そろそろ離していただければ嬉しいのですが。

何とか大きな手を退けた私にカラリと笑うのです。

「別に見たけりや見れば良い。」

「いいのですか？」

「俺以外の奴について行かねエ限りはな。」

「それは絶対にはないのです。私はこの船以外に乗るつもりも、下りるつもりもありません。」

私の言葉にヴェルノさんは良い心掛けじゃねエかと褒めてくださいました。

船長さんに褒めていただけると、胸の辺りがほんわり温かくなるのです。

ご褒美の代わりに差し出されたリンゴのような果物をしゃくりと齧ればほのかな甘みとサッパリとした味が口の中に広がります。

ヴェルノさんの手から食べるといふ少々お行儀の悪い食べ方ではありますが、美味しく私が食べさせてもらいましたらペロリとその指を舐めました。

ちょっと悪戯っぽく笑ってそんなことをするものですから妙に気恥ずかしいのです。

…最近恥かしいことが増えた気がします。気のせいでしょうか？

記憶の中を探っていた私の目の前にルイスさんが持ってきてくださった沢山の不思議なものがガチャガチャと音を立てながら小山を築きました。

「まったく！イチャ付くのも良いが少しは周りを気にしろよ？」

「悪いな、こういう性分だ。」

触って良いぞと膝から下ろしていただき、許可ももらったので私はさっそく不思議な物の山へと歩み寄ります。

まず気になっていた大きな貝殻で作られたペンダント。薄い貝殻の表面を綺麗に、かつ滑らかに削って一番上にはチェーンがしっかり通っていました。

閉じていた貝殻を開ければ中には綺麗な押し花が小さな硝子の丸枠の中に納まっているではありませんか。

真っ白ですが光によってキラキラと七色に色を変える貝殻のペンダントは見惚れるほどに素敵なのですが、ヌイグルミの体では大き過ぎる気がします。

次に手に取ったのは小さな小さなナイフでした。

見た目は丸くて少しぺったんこの細長い楕円形の短刀は本来紙を切ったりするものだそうです。

赤地に金と赤、それから綺麗な青色を使って豪華な仕上がりになっていました。気になって刀の刃部分見たかったのですが残念ながら「切れたら危ないわよ。」というアイヴィーさんの言葉で中身まで見ることはできませんでした。

それでも外見がとても色鮮やかでしたので観賞していた私にルイスさんが「それやるよ。」とにこやかに言います。

「え？」

「珍しい物だけど俺には必要ないから、欲しいもんは持ってって良いぞ。」

「…本当にいいのですか？」

「男に二言はねえってな。」

後ろから伸びてきたヴェルノさんの手がぼすんと頭に乗せられます。

さすがヴェルノさんのお兄様、とても優しい方なのでした。

ごそごそと小山を一通り見てから私は短剣と琥珀色の綺麗なペンダントを一ついただきました。

ルイスさんはもっと持って行って良いとおっしゃってくださいましたが、私にはその二つだけで充分でしたので後はお返しすることにします。

あんまり欲がないんだな。などと言われましたが、そんなことは全くございません。

ただお洋服も食事も、何もかも不自由なく与えてもらっているので欲しいものがないのです。

何も困ることなく穏やかに過ごせているだけで幸せ者なのですよ。

いただいた短剣を服の隙間に押し込んでいましたらヴェルノさんがジツとその様子を眺めていることに気が付きます。

「どこに入れたんだ？」

「服の隙間です。」

「…ねエぞ。」

ピラリとスカートの裾を捲って確認する船長さんには流石の私も怒ります。

丸い手でヴェルノさんの顔を叩くとシンと静まり返ってしまいました。

…？

周りを見回してみましたら全員が目を見開いて私を見ています。

何故か少し顔が青いような気がするのは気のせいでしょうか？

ヴェルノさんは顔から私の手を離すと愉快そうに低く笑って、そのまま私を抱き上げてしまいます。

「何しやがる、オラ。」

むぎゅむぎゅと頬を引つ張られたり全身をぎゅぎゅーっと抱き締め
てくる船長さんに抗議させていただきます。

「女の子のスカートをめくってはいけないですよ。」

「別に減るもんじゃねエだろうが。」

「気持ち的にはビックリドンキリで寿命が縮んでしまつかもしれま
せん。」

「あ？人形に寿命もクソも無いだろ。」

「……それもそうかもしれないね……？」

未だペタペタと短剣を探そうとするヴェルノさんの言葉に納得して
しまいました。

アイヴィーさんが「納得するところってソコなのお？」と呆れた顔
で笑いましたが、私としましてもヌイグルミに寿命なるものがある
のか分かりません。

…あれ、何か話しが逸れてしまった気がするのです。

小首を傾げて見上げましたらヴェルノさんが意地の悪い笑みを浮かべて私にグラスを差し出します。

「飲め。」

未成年者はお酒を飲んではいけないのですよ、ヴェルノさん。

じゅう ぶらす さん。 (前書き)

軽いキス描写があります。

本当にとっても軽くなので、問題ないかと思われませんが…。

じゅうぶらすさん。

生まれて初めてアルコールというものを私は口にしました。

でも、ヴェルノさんやアイヴィーさんが飲んでいらつしやるお酒はどれも苦味が強く、クセもあつてあまり好みではありません。

結局度数の低い果実酒をいただいて何とか切り抜けました。

お酒が喉を通るたびにカツと熱くなり、まだ体の内側がほんのり火照っている気がします。

ヌイグルミなので見た目では分からないかもしれませんが。

それこそ飛び上がってしまいそうなくらい強い度数のお酒を皆さんはまるで水のように飲んでいき、大きな樽が次々と空けられていく光景は驚きです。

私は時々お水が欲しいという船員の方々や幹部の方々へカップをお届けしたり、眠ってしまった方々に毛布をかけたりと細々と働かせていただいています。

ルイスさんの煽るような声に振り向きますと、丁度ヴェルノさんが大きなジョッキのお酒を飲み干しているところでした。

…皆さん急性アルコール中毒に気をつけてくださいね。

一度にお酒の多量摂取は危険なのですよ。

歩み寄れば振り返ったヴェルノさんにヒョイと抱え上げられました。とつてもお酒臭いのです。

「お水はいりますか？」

「要らねエ。」

「では果物はいかがですか？」

「それもいい。」

はあ…と首下にかかる吐息がお酒のせいか熱くて、ちょっとだけドキリとしてしまいます。

正面に座っているルイスさんは興味深々で見つめてきますが助けてくださらないのですね。

そんなところまで似ているとは流石兄弟なのです。

何とか腕の中で振り返ってヴェルノさんを見やれば金の瞳が何やら不穏な光を湛えて私を見つめていました。

「何か欲しいものはないのですか？」

目を逸らそうとしましたが片手でしっかりと顎を止められてしまい身動きすら取れません。

何とか話題を繋げた私にヴェルノさんはニヤリと笑って言います。

「お前。」

「…ヴェルノさん酔っていらっしやいますね。もうお部屋で休んだ方がよろしいですよ。」

「まだ眠くはねエ。」

「それでもお部屋に行きましょう？」

「…分ーったよ。」

何とか立ち上がってくださったことにホッとしつつも下ろしていただけないことにおや？と思います。

私はまだお手伝いをしたいのですが。

しかしヴェルノさんにその願いは即座に却下されてしまい、私は船長室に連行されてしまいました。

ルイスさんの楽しげな笑みと振られた手が少しだけ気に入らなかったのは秘密です。

酔っているにも関わらず暗い廊下を迷うことも、ぶつかることもなくスタスタと歩くヴェルノさんは船長室に付くと着替えもせずベッドへ寝転がってしまいます。

それも私を抱えたままで、です。

ぼふんと一度軽く跳ねましたがベッドは意外にも壊れることなくヴェルノさんの重みを受け止めました。

とつさに閉じてしまいました目を開けると細められた金の瞳と目が合います。

「着替えないといけませんよ。」

「面倒くせエ。」

「せめて巻いてある布だけでも。」

頭に巻かれた布に手を伸ばしてそつと外す私にされるがままの船長さん。

何とか外し終えた布はヴェルノさんの手によってベッドの外へ投げ捨てられてしまいました。

布についた装飾がチャリンと小さく高い音を立てて床にぶつかってしまいます。

壊れないかと心配する私をよそにヴェルノさんはワンピースと合わせで着ていた上着を片手で器用に取ってしまった。

ワンピースだけになった私の体にもふつと顔が埋められます。

「寝ますか？」

「いや、まだ寝ねエ。」

アルコールで普段よりも温かいヴェルノさんの体はとってもぬくぬくしていて心地良いのです。

シーツに散らばっている青い髪が邪魔にならないよう、額から避け

ていましたらお腹の辺りが揺れ出しました。

何が可笑しいのかは分かりませんが笑っているようなのです。

しばらく笑っていたヴェルノさんは私のお腹から顔を上げると、心底愉快そうな表情で私の手を緩く掴み、ぷらぷらと揺らしました。

「…探してみるか？」

唐突な問いに何のことだろうと首を傾げてしまいます。

「お前が人間に戻る方法。」

「…あるのでしょうか？」

「さあな。だが探さなきゃ見つからねエ。」

でも人間の体に戻ってしまったら私は珍しいものではなくなってしまうのです。

それではこの船のペットとしていられないのではないのでしょうか？

ジツと金の瞳を見つめていましたら大きな手が私の頭を撫でていました。

「人間に戻ってしまえば私は珍しくないですよ。」

「だろうな。」

「そうなたらお別れなのです。」

「あ？」

思ったままに言った私の言葉に何故かヴェルノさんは面食らった様子で顔を上げて、金の瞳を僅かに見開いて私を見下ろします。

私が動くヌイグルミだから、珍しい買われたのですから、人間に戻ってしまったらもう普通の女の子なのです。

皆さんの優しさも温かさも知ってしまったのに船を降りなければいけないになったら、私はすごく悲しくて、きつと泣いてしまいうでしよう。

それでしたらヌイグルミでいた方がいいのかもかもしれません。

ヴェルノさんがズイと顔を近づけたかと思えば、睫毛が触れるのではと思うくらい間近に金の瞳がありました。

唇に柔らかいけれど、ほんの少し力サついた感触が押し付けられていま、す…？

驚きのあまり固まっていた私に「…目くらい閉じれねエのか。」と艶のある掠れた声が囁きます。

「…え、え？」

すぐ眼前にありますウエルノさんの顔をマジマジと見ていましたら喉の奥で低く笑われてしまいました。

「お前は俺が買ったんだ、人形じゃなくともペットにや変わりねエよ。」

人間の体になったら俺としては願ったりだけどなと怪しい言葉を言い、それからもう一度口元に柔らかい感触が触れ合いました。

それでも茫然としていた私に痺れを切らしたのか大きな手で目元を覆い隠されてしまいます。

しばらく何度か感触が触れたり離れたりした後、漸く手が離れて視界が広がりました。

ペロリと唇を舐めたヴェルノさんは「人形のわりに感触は人間と同じだな。」なんて獰猛な光を湛えた瞳に射竦められて穴があったら入りたい衝動に駆られます。

ですがガツチリホールドされているためそれも叶いません。

何でヴェルノさんがこんなことをしたのか分かりませんが、私としては何よりも嬉しい言葉をいただけたことだけは確かなのです。

「…人間に戻っても、捨てないでくださいね。」

私の言葉にヴェルノさんは優しいキスを額に一つ、落としてくれました。

じゅっ ぶらす よん。

「――…よお、起きたか。」

目が覚めると目の前に素敵過ぎるニヤリとした笑みがありました。

とりあえず、朝のご挨拶をすると寝起きの掠れた艶っぽい声で「ああ。」と返してくださいます。

そうして頬にキスが一つ。……昨夜のことを思い出してしまいました。

お陰様で薄れかけていた羞恥心というものが私の顔を紅くします。

本当にヌイグルミでよかったのです。

これが人間の姿だったとしたらヴェルノさんは嬉々として私に色々な意地悪をしたでしょうから。

そんなことをツラツラと考えながらもやはり恥かしいので、枕に顔

を埋めて唸ってみたい、シーツを手繰り寄せて隠れてみたいと気を紛らわせようと試みてみます。

でもヴェルノさんは私からシーツを引っぺがすと逞しい腕の中へ抱き込んでしまいました。

逃げるところか身動き一つ満足にできません。

「…これくらいで恥かしがってんじゃねエよ…。」

笑いの混じった声がすぐ耳元で囁かれます。

「ヴェルノさんは変態さんなのですか？」

「…ああ？」

だってそうではありませんか。

ヌイグルミ相手に甘く囁いても困るのです。

私の言葉に呆れたような顔をして、それから抱き締められていた手が外れたかと思えますと、いきなり頬を左右に引っ張られました。

…痛くはないけれどこれは酷いのです。

「んなふざけた事言いやがるのはこの口か。」

いくらヌイグルミとは言えあんまりな仕打ちです。

「そふではないでふか。私は、ふいぐるみ^{ヌイグルミ}、なんでふよ？ふいぐるみに、きふするなんへ、変れふよ。」

「うるせエ。それ以上グダグダ言うなら口塞ぐぞ。」

「…なにへへすか^{なにですか}？」

「知^しりてエか？」

口角をつり上げて笑うヴェルノさんに嫌な予感がして思わず首を振れば、小さな舌打ちをいただきました。

パツと手が離れたので頬の形を両手で押して直します。

ヴェルノさんはすっきりしたのか満足したのか、ベッドから起き上

がって昨日のままだった服を脱ぎ捨てて新しい服へ着替え出しました。

海の男というものは大雑把なのでしょうか？

脱ぎ捨てられた服をきちんと拾って洗濯物専用のかごへ入れるのも私の役目になりそうです。

それからヴェルノさんは自分の机の上から何かを取りました。

「おい、何ボケっとしてんだ。」

洗濯かごの傍で立っていましたらヒョイと持ち上げられてベッドの縁に座られました。

手に持っていらっしやるのは私のお洋服で、それをもらおうとしたのに、ヴェルノさんは渡してくれません。

それどころかワザと手の届かない少し遠くにお洋服を置いて、私の着ているワンピースに手を伸ばしてくるのです。

「後ろ向けよ。どうせ一人じゃ脱げねエだろ？」

そんなことはないのです。

見た目は小さなヌイグルミですが、幼児ではないのできちんと着替えも出来るのです。

「大丈夫なのです。」

「あ？聞こえねえな。」

「わっ？！」

問答無用で捕まえられと場所を入れ替わるようにヴェルノさんがベッドに腰掛け、私はその膝に座らされます。

ワンピースの小さなボタンに手がかけられて、片手で私を捕まえているというのにとっても器用にボタンを解いていくのです。

ヌイグルミでなければ赤面ものの状態ですね。

ニヤニヤ笑いながら見下ろしてくる黄金色の瞳は愉しげで、こんな風に意地悪をされているのに嫌な気持ちも怒りも湧かないのですから不思議です。

相変わらず色気のない下着にやっぱり「色気がねえ。」なんてばやかれても困ります。

ヌイグルミに色気というものがあつたら逆に恐ろしいですよ。

手早く着せられたワンピースは先ほどまで着ていたものとは違い、
キャミソール風のワンピースで色はオレンジから白のグラデーショ
ンが綺麗です。

裾と胸元辺りに白でお花の刺繍がされていて可愛いお洋服ですね。

耳にはやっぱりワンピースとお揃いのオレンジのシュシュがつけら
れます。

なんだかワンピースですが若干ドレスのような要素も見受けられる
のですが…、

「今日は何かあるのでしょうか？」

頭を撫でてくるヴェルノさんを見上げれば軽く瞠目してから、へえ
と笑います。

「よく分かったな。」

「お洋服がドレスに似ているので、何か御祝いごとか大切なことが
あるのかと思つたのです。」

「良い線はいつてるが、祝い事じゃあねエよ。海賊達ダクテイストの孤島に今日は行くからだ。」

「だくていすと、ですか？」

人の名前のようにも聞こえますが、どのような場所なのでしょう。聞いてみても「着けば分かる。」としか言ってくれません。

立ち上がって私を机に乗せてからヴェルノさんはトレードマークのようなターバンを巻きます。

ターバンの横一方についている装飾がぶつかり合い、シャラリと耳に心地良い音を奏でました。

自然な動作で抱き上げられてしまいますが私は歩けないわけではないので、そろそろ歩かせて欲しいのです。

…一緒に歩くとどうしても歩幅の関係で遅くなってしまうが。

薄暗い通路をスタスタと歩くヴェルノさんの腕の中でそんなことを考えていれば、すぐに食堂に着きました。

いつもならば大勢の船員の方々がいるのですが今日は半分いるかないくらいしかありません。

キョロキョロと見回していると大きな手が頭をぼんぽん撫でます。

「大半の奴はまだ寝てるぞ。昨夜はかなり飲んでたからな。」

なるほど。皆さんはまだ夢の中なのですね。

ヴェルノさんに抱えられたまま席に着くと調理場から料理人さんが来て朝食を出してくださいました。

ベーグルサンドなのです。多分ヴェルノさんと私も分を合わせて三つお皿にあります。

手を伸ばそうとしましたがヴェルノさんが先にベーグルサンドをナイフを使って綺麗に切り分けてくださいました。

取りやすいようお皿の端に置かれたそれから小さな一片を取ってパクリと一口。

「…美味しいごはんは幸せなのです。」

「随分安上がりだな、お前の幸せってのは。」

もぐもぐ食べる私にクツクツと笑ってからヴェルノさんもベーグルを食べ始めます。

カリッとした表面と弾力のある食感食べるのが少々大変ですが、
とっても美味なのです。

これは明日の朝食にも期待が出来そうなのですよ。

じゅっ ぶらっす い。

ベーグルを半分ほど食べたところで、隣の席にドカリと誰かが座ります。

横を見ればアイヴィーさんがテーブルに突っ伏していました。

「おはようございます、アイヴィーさん。」

「…おはよう、真白ちゃん…。」

腕に顔を埋めているせいかな、ややぐもった声の返事は力がありません。

もしかなくともこれは二日酔いという状態でしょうか。

私は分かりませんが二日酔いは気持ち悪くなって頭も痛くなるそうですね。

かなり大量にお酒を飲んでいましたヴェルノさんがケロリとしてい

たのですっかり忘れておりました。

「大丈夫ですか？何か鉄分の多いものを取られるといいのですよ？」

「そうねえ……。」

返事とは裏腹に起き上がったアイヴィーさんは気だるそうにサングラスをかけます。

目が合うとニコリと笑いかけてくださいましたが、ちょっとお疲れ気味なのですよ。

心配なのですがヴェルノさんに顔の向きをお皿へ戻されてしまったので、諦めて今は朝食を食べ切ることに専念することにしました。

時折頬を突付いたり自分のお皿のものをくれたりとヴェルノさんは優しいのですが本当にペット感覚になってしまっているので、人間に戻ったときが少し心配です。

そんなことを考えているうちにテーブルの正面にルイスさんが静かに腰掛けました。

昨夜は幹部の方々と飲み比べていたようですが、やはり何事もなかったかのような様子で料理長さんに大声でご飯を頼んでいます。

アイヴィーさんが恨めしそうに「大声出さないでちょうだい。頭に

響くわあ…。」と片手を額に添えてルイスさんを睨んでいました。

それに軽く謝りながら私を見てニヤニヤします。

「何時もそうやって食べてんのか？」

「はい。普通に座るとテーブルに届かないのです。」

「へえ…羨ましいねえ。」

「言つとくが、コレは俺のペットだ。」

「分かってるって。そうカッカすんなよ。」

頭上で交わされる言葉を聞きながら食事をしていれば、アイヴィーさんがジッと私を見つめていることに気が付きます。

小さく「ドレスも可愛いわねえ…。」なんて聞こえたのは聞かなかったことにしておきましょう。

せっかくの美味しい料理も、朝では沢山食べられなくて少し残してしまいました。

作ってくださった料理人の皆さんには申し訳ないのですがご馳走様です。

ぽふっと両手を合わせて小さく頭を下げると、それが食事終了の挨拶だと分かっているヴェルノさんが布で口元を拭ってくださいます。
…何故でしょうか、ルイスさんやアイヴィーさんなど食堂にいらっしやる方々の穏やかな笑みがすごく気になります。

強過ぎず、かと言って弱過ぎず、適度な力加減で口元を拭いてもらいスッキリしました。

汚れてはいませんでしたがお返しにヴェルノさんの口元を、膝に立って拭って差し上げたらとても楽しそうな笑みを浮べて頭を撫でられます。

「ああ、そうだ。今日は海賊達の孤島に行くぞ。」

「そうだな。二人揃ってるし丁度良いかもしれないなあ。」

「だから真白ちゃんがドレス着てるのねえ。納得だわあ。」

何やら訳知り顔で頷くアイヴィーさん。

私はその‘だくていす’が何なのか知りませんが、皆さんの様子を見ると楽しいところなのでしょう。

ヴェルノさんもルイスさんも、アイヴィーさんも楽しげな表情なのです。

…教えていただけなくてちょっぴり仲間ハズレな気分もしますが。

三人で私には理解不能な会話を繰り広げられてつまらなくなっていました。

仕方ないのでヴェルノさんの膝の上で眠ることにします。

……決して不貞寝^{ふてね}ではないのですよ？

「…ん？あ、真白寝ちまったか？」

話し込んでいるうちにヴェルノの膝の腕で眠りこけてしまっている
ヌイグルミを見てルイスが苦笑する。

ふわふわの真っ白なそれを日焼けしたヴェルノの大きな手がゆっく
りと撫でた。

もう片手は柔らかかそうな背中に添えられ、膝から落ちないように留
めている。

自分と同じ黄金色の鋭い瞳が優しく細められているのをルイスはど
こか遠くのことのように眺めていた。

前回の時には二人で軍艦を一隻襲撃したが、その時には絶対になか
ったであろう弟の穏やかな表情に何とも言えない気持ちになる。

「コイツには海賊達の孤島の事は教えてねエからな。暇だったんだ
ろ。」

「あら、教えなくて良いのお？真白ちゃんみたいな子がウロウロし
てたら、それこそ直ぐに捕まえられて売り飛ばされちゃうんじゃない

いかしら？」

海賊達の孤島はその名の通り、海で生きる海賊たちだけが訪れることを許される場所だ。

つまり無法地帯である。

そこで盗みや喧嘩、殺しなど、何があっても、それらは自己責任となるため腕に覚えのある者でなければ好んで行くことはないくらいである。

真白のように物珍しい生き物が一人でウロついていれば、それこそ捕まえてくださいと言わんばかりの状態だろう。

狼の群れに子羊を投げ入れるようなものだ。

が、それは力無い者の場合である。

「俺がそれを許すと思っただけなのか？」

「まさか！アタシだって真白ちゃんを他の奴らに渡す気なんてないわ。」

「なら気にする事じゃねエだろ。」

ヴェルノとアイヴィーの会話を聞いていたルイスが笑う。

「お前ら本当に真白の事、気に入ってるんだな。」

特に気紛れで飽きやすい性格のヴェルノがここまで一つの物に執着を見せるのは珍しい。

確かに眠っているこのヌイグルミは世界に二つとない珍獣であるうし、どう見ても触っても柔らかな体は高級な布や動物の毛を惜しみなく使っているだろう。

だがこれほど気に入るなんて、恐らく初めてだ。

ルイスの言葉にヴェルノが低く笑う。

「ああ、気に入ってるぜ。コイツは俺を退屈させねエし、無駄に苛立たせねエ。そこらの娼船の女よりマシだ。」

上機嫌と分かる声音に嘘はなさそうだ。

よく分からない唸りを上げながら丸くなるヌイグルミをヴェルノは

抱え直して立ち上がる。

「後で部屋に来いよ。航路の確認くらい必要だろ。」

「ああ、分かった。」

真っ白なヌイグルミを抱えて食堂を出て行く弟の後ろ姿を見送って
から、ようやく来た料理にルイスも舌鼓を打った。

じゅうぶらするく。

温かな感触がゆっくりと背中を撫でて行きます。

優しく、包み込むような温かさはとても心地が良いのです。

もっと眠っていたい気持ちを押し目を開けますと、目の前には布が広がっていました。

潮の匂いのするそれから顔を離せば見慣れた黄金色の瞳が私を見下ろしています。

「おはようございます、ヴェルノさん。」

「やっと起きたか。もう着くぞ。」

着く、とは一体どこなのでしょう？

…あ、海賊達の孤島という場所なのでしょう？

ヴェルノさんは甲板にいたようで風がぶわりと吹き付けてきます。

真つ青な空にヴェルノさんの青い髪が不思議と映えて見えて、思わず見惚れてしまいかけたのは内緒にしておきましょう。

風で飛ばされないよう服を掴ませていただきますと大きな手がしっかり支えてくださいます。

温か過ぎてまた眠ってしまいそうになる私を見てニヤリと笑い、頬を抓られてしまいました。

「もう着くって言うてんだろ。寝るな。」

「ヴェルノさんが温かすぎるのがいけないのですよ。」

「おーい、イチャつくんなら部屋でやれよ。」

ルイスさんが苦笑交じりにそう言いながらヴェルノさんの隣りに並びます。

こうして揃っているところを見ますと、本当にご兄弟なのだなあと考えるくらいよく似ていらっします。

横から伸びてきたルイスさんの手がワシワシと頭を撫でてきます。痛くはないですが視界がブレるのもう少しお手柔らかにお願いし

たいのです。

そこでふと船が向かっている先に島のようなものが見えました。

ルイスさんの手を両手でガードしながらヴェルノさんを見上げます。

「あれが海賊達の孤島なのですか？」

「そうだ。船から下りたら、俺から離れんじゃねエぞ。」

「？」

「お前みたいなのは捕まって売り飛ばされんのがオチだ。」

そんなに危険な場所なのですか。

思わず手から力が抜けてしまい、ルイスさんの手が顔に落ちてきてしまいました。

もしも漫画のように背景が描けるのでしたらきっと私の後ろには雷が落ちていることと思います。

もちろん、ヴェルノさんを信用していない訳ではありません。

ですが前置きもなくそのように危険な場所へ行くとすると心の準備といえますか、色々と準備をせねばならないのです。

ルイスさんからもらった短剣はすっかり服の中に隠してありますので何かあった際にはそれで対処することとしましょう。

それでも出来る限りヴェルノさんから離れないようにするのが一番なのですね。

段々と近付いて来る島を見ながら、一応服を握らせてもらう約束もしておきました。

いつもと違い今日はきちんと自分の足で歩くようにとアイヴィーさんから言われます。…普段から歩きたいのですが、皆さんがすぐに抱っこしてしまうのが良くないのですよ。

なんて心の中で言ってみます。

このドキドキが治まらなくてヌイグルミの身の上なのに口から心臓が飛び出てくるのではと冷や冷やしてしまいます。

島だと思っていた海賊達の孤島はかなり近くまで行って漸くそれが船なのだと気付きました。

いくつもの大きな船を繋ぎ合わせて作られていまして、その周りにまた様々な旗を掲げた船がくっついていきます。

「髑髏ばかり…もしかして全部海賊船なのですか？」

「そうよお。よく見てるのね真白ちゃん！偉いわぁ。」

よしよしとアイヴィーさんが頭を撫でてくださいます。

それでも胸のドキドキは治まりません。緊張と興奮で少々おかしくなってしまうようなのです。

「ヴェルノさん、ヴェルノさんっ。ドキドキしてますっ。このまま上陸したら緊張のあまり気絶してしまうかもしれないっ。」

少しでもこの気持ちをお伝えしたくてそう言ったのですが何故だかヴェルノさんは笑ってらっしゃいます。

オマケに手の平を胸元に当てて、わざわざ心音を確認しようとするのです。

その手を叩きましたら「心音なんか感じねえな。」と悪戯っ子のように意地の悪い笑みを浮べました。

けれど大きな手が背を軽く叩いてくださりました。

そんな些細なことで私の心臓のうるさは少しだけ落ち着いてしまいうのですからヴェルノさんはすごいのです。

そろそろ島に着くからと床に下ろされましたがヴェルノさんの服の

ヒラヒラとした裾部分を掴ませてもらいます。

まだ着いてないと笑っていましたが私の心の安寧のためにはもう必要なのですよ。

ガタンと船が揺れたかと思うと船員の方々が数人がかりで錨を下ろします。それから何やら縄を投げて、下にいる方が傍にあった杭が何かにしっかり縄を縛り付けます。

そうして縄梯子が下ろされますとアイヴィーさんが素早く船から下りました。

ヴェルノさんに抱えてもらおうかとも思いましたが何事も挑戦してみなければ分かりませんので、私も頑張って縄梯子を降りて行きます。

下では先に下りたヴェルノさんとアイヴィーさんがいて、上を見ますとルイスさんや船員の方々が心配そうに見下ろしています。

意気込んで縄梯子に手をかけましたが、想像よりも高く、とても滑るので怖いのです。

そつと足を伸ばしましたが下の梯子がずれて足が滑ってしまいました。

あ、落ちますね。

腕だけで体重を支えられるほど筋肉もないので私の柔らかな体が梯子から落ちます。

さすがにこの高さからでは痛いのでは、と思いました。が下にいらっしやいましたヴェルノさんがキャッチしてくださいました。

まさに危機一髪なのです。

「ありがとうございます。ナイスタイミングでさすがなのです。」

「お前にもう梯子は使わせねエ。」

「そうですね。その方がいいと私も思いました。」

地面に下ろしてもらい、乱れたスカートを整えていますと下りてきたルイスさんが呆れた顔で私を見下ろします。

目が離せないとおっしゃっていました。それは危なっかしいと言いたいのでしょうか？

確かに先ほどのことは危険でしたが常日頃から危険に突っ込んで行く訳ではないのですよ。

結局船から下りたのは幹部のヴェルノさん、アイヴィーさん、幹部の方々、ルイスさん。それから買出し組の方々だけでした。

そういえばお野菜などは新鮮でしたが一体どうやって鮮度を保っていたのでしょうか？

後ほどヴェルノさんに聞いてみようと思います。

じゅう ぶらす なな。

海賊達の孤島は想像していたよりも戦場と化しておりました。

普通にお店などがありまして船の上ということ忘れてしまいそうな場所でしたが、そこかしこに強面のいかにもな方々がたむろっていらつしやいます。

確かにこんな所でヴェルノさんから離れては私は売り飛ばされる運命でしょう。

絶対に離さないよう服をしっかりと掴んでヴェルノさんを見上げれば随分悪い笑みを浮べておりました。

何やら良からぬことを考えているようにしか見えません。

私のことを気遣ってかゆったりとした歩調で歩き出したヴェルノさんに私は少し早足で着いて行きます。

ヴェルノさんの横にアイヴィーさんとルイスさんが、私の後ろには幹部の方々が並びます。

後ろから何となくですが背中に視線が刺さります。でもきつと、も

つと奥へ行つてしまえばより視線が多くなることでしょう。

船と船とを繋ぐ大きな道を渡ってお店が佇む場所へ入りましたら一気に人が増えました。

ヴェルノさんはお店を冷やかしながらのんびりしていらっしゃいます。

時折私を抱き上げてお店に並ぶ品を見せてくださいますが、ヴェルノさんは大抵お店の方に私を売ってくれないか、どこで手に入れたのかと質問されては愉しげな笑みを返しておられました。

「あの、どこへ行くのですか？」

お店を見て回るのも楽しいのですが今日の目的が全く分からないのです。

「特にはねエよ。」

「ないのですか？」

「ああ、たまに顔出さねエと死んだと思われるからな。他の奴らの顔も見えおきてエし。」

なるほど。各々の生存確認も兼ねているんですね。

少々スリルのある島ですが、海賊なのですからいつまでも尻込みしては舐められてしまいます。

私も毅然とした態度で歩かなければ。…でもやっぱりヴェルノさんのお洋服は掴ませて欲しいのです。

沢山のお店を抜けていけば今度は食事処がズラリと並んでおりました。

色々なところから騒ぎ声が聞こえてきたり、開けっ放しの出入り口から時折コップが飛び出てきます。

その中を何てことない風にゆったり歩くヴェルノさんはカッコイイのです。

さすが船長さん。飛んでくる物もあっさり交わしておられます。

などと見ていましたら突然ヴェルノさんが立ち止まりました。

キョロキョロしていた私はお恥かしいことながら、その足に思い切り突っ込んでしまい、後ろにいた幹部の方々が噴出しています。

アイヴィーさんもクスクス笑い、ヴェルノさんに至っては気を付けるとやや呆れた様子です。

何故立ち止まったのでしょうか？

足の横から前を見ようとした瞬間、ものすごい轟音がして目の前に何か飛び出していらっしやいました。

お店の壁だろう木板や木片もご一緒しています。

かなりの勢いで道に飛んできたはずなのにそれは起き上がりました。

「おー、痛ってえなあ。もちつと優しくしてくれよう。」

しかも盛大に口を開けてがははははと笑っています。

…体は何ともないのでしょうか？

「よお、相変わらずじゃねエか。」

ヴェルノさんがそう声をかけましたら、その方が勢い良く振り返ります。

あんまり勢いが良すぎて怖かったのは秘密です。

「おお、ヴェルノ！生きてたかあ！！」

「ハッ、そう死ぬかよ。」

「アンタも元気そうねえ。この店の壁ぶち破ったのは今日で何回目？」

「んなモン忘れちまったあ！」

大柄な体格に似合った豪快な方のようにです。

ジッと見ていたらバツチリ視線が合ってしまいました。

慌てて足の後ろに隠れようとしたが、ヴェルノさんに捕まえられて抱き上げられてしまいました。

これでは逃げることも隠れることもできません。

「おお？！何だコイツあ！生きてんのか？！」

ズズズイーっと顔を寄せられて思わずヴェルノさんの服に顔を押し付けて避けてしまいました。

すぐ人見知りという訳ではありませんが海賊の方々は何かこう何とも言えないオーラを持っているので、あまりお近づきになりたくないのです。

もちろんヴェルノさんやアイヴィーさんなど私がお世話になっている船の方々は別ですが。

頬を突付かれていますますが顔を上げる勇気が出てきません。

…うう、このままスルーしていただけないでしょうか。

そんな私の考えを読んだようにヴェルノさんが苦笑しました。その振動が布越しに伝わってきます。

「ああ、俺のペットだ。まあお前は嫌われたみてエだがな。」

「ありや、そうか、そりや残念だ。でも良いなあ、こんな変わったモン聞いた事もない。」

「悪いがコイツはやれねエ。」

「がはははっ、だと思った!」

ポンポンと頭を撫でられる感覚がしてから、手が離れていく気配がした。

そーっと振り返ると健康そうな褐色の肌の大柄な人とまた目が合っ
てしまいます。

やっぱりずっと合わせられなくて逸らしてしまいました。

残念がってくださってはいましたが、今の私にはあなたのような方
々は大き過ぎて少々怖いのです。

それから一言二言話してヴェルノさんはその方と分かれてしまいま
した。

下ろされてしまうのではと思いましたが、背中をゆっくり撫でてく
ださる手からして私は下ろされなくて済みそうなのです。

海賊達の孤島はちよっぴり恐ろしい場所なのです。

「…ここは怖い場所なのです。」

「そりゃ海賊だらけだからな。」

「そうではないのです。大きい方々も沢山いらっしゃいますし、も
しも逸れて踏み潰されたり蹴り飛ばされたりと思うとドキドキスリ
ル満点で私の心臓は爆発寸前なのですよ。」

「お前そんな事考えてたのか？」

「？ 何かおかしいですか？」

でも怖いので抱っこしててください。

そう甘えてみましたら笑って、手のかかるヤツだと抱え直してくださいました。

ヴェルノさんの船にいる方々はさほど大柄な人もいません。ダイヴィさんは少々大柄ですが、大男という程でもありませんし。

そこらじゅうにいる大柄の人に蹴られ、潰されしては綿と布でできたヌイグルミの私なんてあつと言う間にボロボロなのです。

女の子として綺麗にしておきたいのもそうなのですが、何かあつてはヴェルノさんにご迷惑もかけてしまいますから。

…今日一日は大人しくしているべきなのでしょう。

探検は諦めるしかありませんね。

じゅう ぶらす はち。

胸元にしっかりとくっついて離れないヌイグルミを片手で抱えながら、ヴェルノは海賊達の孤島の奥へ歩いて行く。

先ほど出会った古い知人ともう暫く話をするのも一興だったが真白が知人へ怯えるような仕草をしたので、手短に済ませて分かれた。

最初は海賊が怖いのかとも思ったが、どうやらそうではないらしく、大柄な男はヌイグルミにとって少々恐怖を煽られるらしい。

小さなヌイグルミからすれば自分達でさえ大きく見えるのだから更に大きな男を怖がるのも無理はない。

海賊だから怖がっている訳ではない。という所も面白い。

普通は海賊だと知ると大抵泣き叫んだり逃げ惑うものだ。

だがこのヌイグルミは逃げるところか他の者を見たら自分の下へ寄ってくる。

自分こそが海賊だというのに変わった女だ。

抱えられて安心したのか立ち並ぶ酒場や娼館を物珍しそうに眺めて

いる。元々大きな赤い目が更に大きく見えて、そのうち零れ落ちてしまっんじゃないかと内心噴出しそうになりながらヌイグルミの様子を眺めていた。

「ヴェルノさん、ヴェルノさんっ。」

何時もののんびりとした口調よりも、やや興奮で上ずった幼さの残るソプラノの声が名を呼んでくる。

「何だ。」

「あの人ナイスバディですよっ。どうやったらあんな素晴らしい体になれるのでしょうかっ？」

丸い手が示す方には鮮やかな赤のドレスを纏った魅惑的な女がいた。娼婦だろう。

紅い口紅が実に扇情的だがあれを見て興奮しているのだからやはりこのヌイグルミは変わっている。

「さあな。」

「そうですか……。あんな大人な雰囲気漂う女性に私もなりたいのです。」

そりゃ無理だろう。口から出かけた言葉を何となく飲み込んだ。

キラキラと輝く赤い目にそんなことを言えば、気落ちするのが目に見えている。

全くこのヌイグルミはコロコロと表情を変えて飽きさせないのだから不思議な生き物だ。

中身は女だろうに、男の腕の中でワーワー楽しげにはしゃいでいる辺り、まだ男女の仲なんてものとは無縁なのだろう。

セシルの買ってきた串肉を喜んで食べていたが、食べ終わった後にウサギの肉だと聞かされて衝撃を受けていた。

小さな「共食い……！」という言葉を拾ってしまった時は流石のヴェルノも笑いが漏れた。

ヌイグルミのウサギなのだから別に共食いにはならないだろう。

海賊らしくない、この柔らかな空気を案外気に入っていた。

商船や別の海賊船を襲う時の楽しさと、ヌイグルミと戯れる楽しさは根本的に何かが違うのだ。だが、それが何なのか分からないほど

ヴェルノも子どもではない。

…まさかこの俺が、な。

腕の中のヌイグルミを見下ろせば、赤い瞳がきょとんと見つめ返してくる。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもねエよ。」

「そうですか？あ、帰りにお皿とかフォークとか買いたいのです。今のままだと大きいので。」

「あ？いらねエだろ。」

「いります、とっても必要なですよ。あの大きいお皿のままでは、いつか私のお腹がはち切れてしまうのです。」

ぺちぺちと叩いてくる丸い腕が抗議する。

痛くも痒くもないが、全く以って新鮮な反応だ。

仕方ねエなと言うと嬉しそうに笑って礼を述べてくるヌイグルミは、媚びたりしない。

まあ、甘えたりはするが今まで抱いてきた娼婦達に比べれば可愛いものだ。

大量の服をせがむ事もない、食事にも文句は言わない、言われた事はしっかりこなす。けれど自分の言いたい事はハッキリ言う。

少々抜けているところはあるが幼さと相まって愛嬌にしか思えない。

子どもと大人の中間のようなヌイグルミだ。

「ふーん、ふーん、ふーん。かけっこ、かけっこ、捕まったら負け負け。捕まえたら勝ちよ。海賊ルールで負けたら没収、勝ったら強奪、弱肉強食、海賊の世っ界」

目の前を駆けていった数人の海賊達を見て、どこか調子つ外れな歌を歌い出す。

穏やかで間延びした歌の内容にアイヴィーが若干口元を引きつらせる。

「ねえ、真白ちゃん。その歌、今考えたのかしら？」

「はい、そうですよー。海賊の世界はとてモワイルドなのです。」

あれは狩られる側と狩る側の命をかけた鬼ごっこではあるが、真白が歌うと妙に間の抜けた感じがする。

が、本人は気に入ったようで、また続きを考えるように鼻唄を歌い始めた。

それに合わせて白い体が揺れてリズムを刻んでいるのだが恐らく無意識なのだろう。

その後も道端で起こる喧嘩を見て歌ったり、途中立ち寄った娼館の女達を見て綺麗綺麗と歌って大層喜ばれたり、ある意味満喫しているようだった。

「次はどこに行くんですか？」

娼婦から貰った棒付きの飴を食べながらヌイグルミが聞いてくる。

喋るたびにモゴモゴと口の辺りから生えている棒が動いた。

最近では随分見慣れたその光景に視線を落としつつ、答える。

「海賊達の孤島のお頭さ。」

「お頭さん？ですか？」

「本当に会いてエのは違うが、居るか分からねエしな。」

この島を束ねる男の所には一人の老婆がいる。

ソイツはだいぶ歳のいったヤツだが先視師^{さきみし}と呼ばれる、世界でも数少ない特殊な力を持つ老婆だ。

客の望みを聞き、そうしてその望みを叶えるためのきっかけや必要な物を教えてくれる。

勿論望みが叶うか叶わないかは、その後の客自身の努力や選択によって異なるが。

とりあえずどうすりゃこのヌイグルミが人間になるか、だ。

自分だって何時までものんびり腰を据えて待つつもりはない。

ヴェルノのそんな考えなど欠片も気付いた様子もなく、真白は腕の中で辺りを見回している。

「おい、少しは落ち着け。」

「あ、はい。」

軽く注意すれば視線を巡らすのをやめて腕の中で静かになる。

従順過ぎる女はつまらないが、気の強過ぎる女はうざりたい。

これくらいの女が一番丁度良いのだ。

楽しげに口元に弧を描いて歩くヴェルノの姿にアイヴィーと幹部達は顔を見合わせて苦笑した。

気付かないのは何時だって本人ばかり。^{ましう}

じゅうぶらず きゅう。

海賊達の孤島の中央にありましたのは、エジプトなどのアラビアンな雰囲気漂う大きなテントの建物でした。

サーカスの建物にも似ていますがそれほど大きくないのです。

けれど風でテントの裾がヒラヒラと揺らいでとても涼しそうなのですね。

ヴェルノさんのターバンと言い海賊の方々の間ではアラビアンが流っているのでしょうか？

あ、でもターバンを巻いているのはヴェルノさんだけなのです。歩く度に布の片側についた装飾がシャリと音を立ててお洒落なのですよ。

私も一度で良いのでターバンを巻いてみたいと思います。

テントの前では筋骨隆々な男の人たちがナイフやらを持って物騒なのです。

けれどヴェルノさんの顔を見ましたら不思議なくらいアッサリ道を

譲ってくださいました。

さすがなのです。海賊船長というのは凄いことですね。

幾重にも垂れていたカーテンのような布を持ち上げてテントの中へ入りますと予想よりも涼しく、快適な温度が保たれているのです。

暑いエジプトなどの地方で使われている理由がよく分かります。

ちなみに幹部の方々はテントの外で待つようで、私とヴェルノさんしか入れませんでした。

中もアラビアンテイストに統一されていて、壁には不思議な模様のタペストリーが、床にも同じ模様の絨毯が敷かれています。

…とても触り心地が良さそうなのですが残念なことにヴェルノさんは私を下ろしてくださいません。

室内の中央にはテーブルとソファが置かれています。

一人掛けのソファには随分細身の男の人が座っています。

「久しぶりだな、ウエルダン。」

ヴェルノさんが軽く手を振りながら近付きますと、本を読んでいたウエルダンさんという方が顔を上げました。

少し病的なくらいに細いその方はダークグレーの髪に群青色の瞳をして、真っ白な肌と白いワイシャツの色はさほど変わりなく見えます。

やや神経質そうな顔には細身の眼鏡がかけられていました。

「…ヴェルノ？久しぶりじゃないか。元気そうで何よりだよ。」

けれど見た目よりも穏やかな声と口調でソファから立ち上がりました。

ヴェルノさんと握手を交わして、私を見ます。

群青色の瞳があんまりジツと見つめてくるのでとても居心地が悪いのですよ。

「君はこんなものを持ち歩くような趣味だったかな？」

「冗談は止せ。コイツは俺のペットだ。」

「ペット？」

カチャリと眼鏡のフレームを持ち上げてズレを直すウェルダンさん。ソファアに座ったヴェルノさんは同じく座ったウェルダンさんの目の前のテーブルに私を下ろします。

やっと下りられたのは嬉しいのですがテーブルの上はいただけなのです。

それでもきちんと挨拶をしなければいけないのですね。

「真白といいます。ヴェルノさんに助けていただきました。」

「これはご丁寧に、僕はウェルディーノ＝ダンガルド。ウェルダンで良い。」

「はい、ウェルダンさんですね。」

「にしても驚いた。こんな生き物見たことも聞いたこともない。」

ヒョイと持ち上げられて耳の付け根や顔を凝視されます。

そんなに見つめられてもこのヌイグルミの体に糸や紐などはないのですよ。私自身の体なのですから。

心行くまで見た後、そっとテーブルに戻してくださいました。です

が私は絨毯やタペストリーがとても気になるのです。

テーブルから下りようと思いましたらヴェルノさんに捕まえられてしまいます。

「おい、どこ行く気だ。」

「絨毯やタペストリーを見たいのですつ。」

「ああ、それならゆっくり見ると良い。壊さないよう注意してくれるなら、だけれど。」

「気を付けますです！」

もちろん、ヴェルノさんから見える場所にいますよ。

柔らかな絨毯に下ろしてもらい、まずは足元の絨毯を手で軽く撫でってみました。綺麗に掃除がされているらしく毛玉のない滑らかな感触がします。

壁にあるタペストリーなども様々な模様が色鮮やかで素敵なのです。ヴェルノさんとウェルダンさんがお話をしている間、私はいくつもあるタペストリーと絨毯を見学させていただきました。

とても満足な気持ちでソファアに戻りますと何やらお二人は真剣な

顔で何か難しいことを話し合っておりまして。

邪魔になっではいけませんのでそつとテーブルに寄ったのですが、すぐに気付いたウエルダンさんが楽しそうな笑い声を上げて私を見ます。

「ふふふつ、そんなに気にせず好きなようにすると良いよ。ウエルノが連れて来たのなら、君は僕の大切なお客だからね。」

「あんまり甘やかすんじゃないよ。」

「ああ、すまない。つい、ね。可愛らしい外見だと、どうしても甘やかしてしまいたくなるじゃないか。」

とりあえずウエルノさんのお隣に座らせてもらいます。

ウエルダンさんがどうぞとクッキーを勧めてくださいましたので、ウエルノさんを見上げましたら軽く頭を撫でられました。

どうやら食べてもいいようです。シンプルなジンジャーケーキはサクサクと軽い音と、歯ごたえがよく、口の中に広がる生姜の香りはホツとします。

喉が渴いたなと思っていましたらウエルノさんがグラスをくださいました。

飲んでみたら普通のお水でした。お酒ではなくて良かったのです。

そんな風にクッキーを食べていたときにテントの入り口から誰かが入ってきて、顔を上げたウェルダンさんが手を振ります。

「丁度良いところに戻ってきた。…すまない、ちょっとこっちへ来てくれないか。」

振り返ると初老のおばあさんが真っ黒な布を頭から被って顔を隠していました。

日焼けから肌を守るためか、暑さ対策なのかは分かりませんがミステリアスな雰囲気が漂っています。

おばあさんとは言え真っ直ぐに伸びた背筋が綺麗な方で、傍まで来ると顔の布を少しだけ外してヴェルノさんと私を見ました。

「来ると思っていましたよ。」

「え？」

「人の姿になりたいのでしょうか？こんな婆おばあだけれど頼ってくれて嬉しいわ。」

物腰穩やかなおばあさんの言葉に思わず、マジマジと見つめ返してしまいました。

「お前は向こうでソイツと話して来い。」

おばあさんに押し付けるように手渡されてしまいます。おばあさんは心得た様子で私をしっかりと抱えると、テントの更に奥の小さな部屋へ行きます。

ヴェルノさんと離れて少々不安はありますが、おばあさんは悪い人には見えないし、ヴェルノさんが言うのですからきっと大丈夫なのだと思います。

水晶玉の乗ったテーブルの上に下ろしていただき、おばあさんも前の椅子に腰掛けます。

頭から布を取ったおばあさんは随分若く見えます。淡い紫の髪が緩くウェーブを描いていて人の良さそうな方でした。

にじゅう。

「貴女、随分不思議な体験をしているのね。」

ゆっくりとした口調で、けれど労わるような言葉に思わず頷いてしまいます。

おばあさんは一度私を上から下まで見つめました。そうして、ヌイグルミは随分窮屈ではないかしらと苦笑いを浮かべました。

どうして見ただけで私がただのヌイグルミではないのだと分かったのでしょうか？

水晶を撫でながらおばあさんは朗らかに笑います。

「一週間程前に偶然水晶に貴女が映ったのよ？それに私の目は物の本質が見えるから、貴女の本物の姿もそのヌイグルミに透けて見えるわ。」

「あの、なら、人間の姿に戻る方法はあるのでしょうか？」

つい力んで前のめりになってしまった私を見ておばあさんは頷いてくださいました。

それだけで私の心には希望が湧きます。

「あるわ。」

「本当ですか?!」

「ええ、それに心配しなくても貴女の大好きな船長さんと一緒にいれば、自ずと見つかるわ。」

「そうなのですか?」

それは何てすごいことでしょう。

ヴェルノさんは本当にすごい方なのかもしれません。

でも、大好きというのは照れるのです。確かにヴェルノさんのことは大好きなのですが、皆さんのことも大好きなのですよ。

おばあさんが早く見つかるよう、おまじないをかけた小さな花のブ

ローチを一つくさいました。

花弁が何十にも重なって見て見た事もないお花でしたが、可愛く素敵なデザインに嬉しくなります。

それを服の胸元につけると身体の中から元気が出てくるような気がしました。

けれど人の姿に戻るのがどんな方法なのかは教えていただけないそうです。

結果はそこに辿り着くまでの過程の苦労が大事なのだそうで、簡単に分かってしまっただけでは意味がないようなのです。

何事にもツライことや苦しいことはあつて、それを知らずに結果を得ても、私のためにはならないのだそうです。

言葉は難しかったですが私のことを考えてくださっていることはよく分かりました。

私も自分のことですのでやはり多少なりとも努力したいと思います。なので、方法があると分かっただけで十分です。

おばあさんとお話をしていましたら布を持ち上げてヴェルノさんが顔を出してきました。

「話しは済んだか？戻るぞ。」

「あ、はい。…おばあさん、今日はありがとうございました。私がんばってみます！」

とても素敵なブローチもいただきましたし、今の私はやる気も元気も百パーセントなのですよ。

おばあさんはニツコリ笑って送り出してくださいました。

ウェルダンさんはお仕事が入ってしまったらしくヴェルノさんと共にテントを出るときにはいらっしやいませんでした。

お礼を言いたかったのですがお仕事では仕方ありませんね。

今度会う機会にきちんとお礼を言いたいと思います。

「買い物行くぞ。」

「買い物ですか？」

「食器を買ったんだろうが。言い出したお前が忘れてんじゃないよ、馬鹿。」

そういえばそうなのでした。

おばあさんと会ってお話を聞いて、ついつい忘れてしまいました。

そこでふとヴェルノさんに報告しなければいけないことに気が付きます。

「ヴェルノさん、ヴェルノさん。」

「あ？」

「私、人の姿に戻るそうですよ。それもヴェルノさんと一緒にいると見つかるかと教えていただきました。」

「そうか。なら思ったよりも時間はかかんねエかもな。」

「そうだと、とても良いのです！」

頭の上に乗るヴェルノさんの手に撫でてもらいながら、私はへらりと笑ってしまいました。

きつととても間抜けな笑顔だったでしょう。でも良いのです。

皆さんとまだまだ一緒にいられるのですから嬉しくないはずがありません。

早く人の姿に戻る方法が見つかって、元に戻れたら、皆さんのお手伝いを沢山したいのです。

甲板のデッキがけも、調理場のお手伝いも、見張り台に上ったり自分でドアを開けたり、したいことはいっぱいあるのです。

「あら、真白ちゃん。良いことでもあったのかしら？ 凄く嬉しそうよお？」

「分かりますか？」

外で待つていてくださったアイヴィーさんが頬を突付いてきます。

そんなに私は分かりやすいのでしょうか？

「なんだか嬉しそうな雰囲気でしたわ。」

羨ましいわね！と笑うアイヴィーさんも楽しげで嬉しそうなのです。ヴェルノさんがいて、アイヴィーさんがいて、幹部の方々がいて、船員の方々がいて。私はやはりヴェルノさんの船にいられて幸せ者なのです。

皆さんのために出来ることは少ないかもしれませんが私もこれから色々頑張りたいと思います。

「新しい食器を買ってもらえるのですよ。」

「ああ、普通の食器でも真白ちゃんには大き過ぎるものね。」

「はい。できれば可愛いお皿が欲しいのです。」

「ならアタシの行きつけのお店に行きましょ！とっても可愛い小物とか色々あるのよぉー！」

アイヴィーさんを先頭に歩き出します。私はまた抱っこしていただいています。

上を見上げればヴェルノさんが丁度見下ろしていました。

空よりも淡く海よりも深い青い髪と黄金色の瞳は何度見ても綺麗な色で、空に映えて素敵なのです。

…食器も青色か黄色系の色で統一しようかと思っています。

にじゅう ぶらす いち。

「おーい、酒が足りないぞ！！酒ーっ！！」

「こっちは料理もだ！」

宴会さながらの大騒ぎとなっている船員の方々を眺めながら、私はヴェルノさんの膝の上でいつも通り夕食をいただいております。

あの後アイヴィーさんが連れて行ってくださったお店は可愛い小物などが沢山ありまして、満足行く食器を買うことができました。

お皿はにんじんの形とオレンジ色で、フォークやスプーンなどは青色の持ち手部分がお魚になっているものです。

ちなみにお皿を選んでくださったのはヴェルノさんなのです。

兎には人参だとおっしゃって、冗談交じりにアイヴィーさんに渡ししていました。

紙袋に入れてもらい今は私の手の中にあります。レイナーさんが船へ持って行きましたよかと言ってくれたのですが、持っていたかったのでご遠慮させていただいたのです。

皆さんは久しぶりに揺れの少ない寢床で寝れる！と喜んでいらつしやいますが、私はなんだか少し落ち着きません。

揺れに慣れてしまった今となつては逆に船の方がいいですよ。

そうしてヴェルノさんの左右にはナイスバディな女性が二人、座つていらつしやいます。

でもお酒を注いだりする程度で何故かあまりお話はしないのです。

「今日はこのお店で寝るのですか？」

少し汗を掻いたグラスでお酒の色を楽しむように眺めているヴェルノさんに聞きましたら、溜め息のようにああと返事が返ってきました。

「久しぶりだからな、どうせアイツらも今晚は船に戻らねエだろ。」

「徹夜で夜遊びですか？私は夜に出歩いたことがないのですが、どんな遊びをするのですか？」

「…今のお前にやまだ早エよ。そのうちな。」

一瞬眉を寄せて変な顔をしたヴェルノさんがポンポンと頭を撫でてくださいます。

両側の女性がクスクスととても楽しげに笑いましたが、何かおかしかったのでしょうか？

見上げてみてもヴェルノさんは何もおっしゃりません。

こういう時はどんなに聞いても答えてくだらないので仕方なくジュースを飲むことにします。

…リンゴのような甘酸っぱいジュースなのです。

思わず美味しくておかわりをしたらヴェルノさんに可笑しそうにクツと喉の奥で笑われてしまいました。

「アイヴィー。」

それから少しして、不意にヴェルノさんがアイヴィーさんと呼びます。

アイヴィーさんは何やらニツコリ笑って頷くと私を抱き上げてくだ
さいました。

「はいはい、それじゃあ真白ちゃんはアタシと船に戻りましょうね
？」

「私は船でお留守番ですか？」

「そうよお。真白ちゃんにはまだちょっと早いもの。アタシと一緒に
留守番よ。」

ヴェルノさんと同じようなことをおっしゃいます。

ですが、お二人がそう思うのでしたら私は我慢しようと思います。

人間に戻ったら俺が教えてやる、とヴェルノさんにお約束してもら
いましたので夜遊びはそれまでのお楽しみにとっておくことにしま
しょう。

アイヴィーさんと一緒にお店を出ると外は既に真っ暗です。白に近
いお月様の光りに負けないくらい、島中の至る所は明るく灯されて
いました。

「なんだかお祭りみたいなのです。」

「オマツリ？」

「はい。神様に感謝とお祈りをする行事なのです。踊ったり、騒いだり、私はよく屋台を回っているいろいろな物を食べてました。」

私の言葉にアイヴィーさんは「真白ちゃんらしいわね。」と笑って、途中の屋台のようなお店で飴を買ってくださいました。

リンゴ飴によく似ていて、果物を飴で包んだそれは赤い綺麗な色なのです。

けれどすぐに食べてしまっただけなので今日は眺めるだけにします。

松明や蠟燭の光りに照らされた飴は赤く綺麗な光沢を放って、鏡のように私の顔を反射させていました。

私も小さい頃はよく駄々を捏ねてお父さんに飴を買ってもらいました。

……あれ？

お父さん……お祖父ちゃんでしたっけ？

思い出せなくて小首を傾げてしまっていましたら、呼ぶ声がします。顔を上げるともう船が見える場所まで戻っていました、見張り台の

上から居残り組の方々が手を振っていました。

それに手を振り返せば楽しい笑い声が返ってきます。

「今日は一緒に寝ましょう？真白ちゃん。」

「アイヴィーさんとは初めてですね。」

「そうね、ヴェルノは独占欲が強いから。」

「？」

意味はよく分かりませんが、アイヴィーさんは穏やかな笑みを浮べていらっしかったです。

幸せそうで、温かな笑みに私の心もほっこりします。

手に持っていた飴を見ても、やはり小さい頃に飴を買ってくれたのが誰だったのかは思い出せませんが、心がぽかぽかと温かくなります。

きつとド忘れしているだけなのですね。

アイヴィーさんに抱えてもらって船へ戻ると船員さんたちが「お帰り」と声をかけてくださいます。

なんだか沢山の家族ができたようで嬉しいのです。

ヴェルノさんのお部屋でシャワーを浴びて、買ったばかりの食器を料理長さんへ渡して、アイヴィーさんのお部屋へ行きます。

先視師さんにいただいたブローチはヴェルノさんのお部屋に置いておきました。

アイヴィーさんのお部屋はヴェルノさんのお部屋の近くなので、とても覚えやすいですよ。

ドアをノックしたら、すぐに関けてくださいます。

「いらつしゃい。」

「お邪魔しますです。」

結局その日はヴェルノさんは帰らないとのことでしたので、アイヴィーさんとお洋服の布のお話などをしてからベッドで一緒に眠りました。

にじゅうぶすに。

朝、目が覚めますとベッドの上にアイヴィーさんはいらっしやいませんでした。

…どこに行ったのでしょうか？

ヴェルノさんと一緒に寝ていた時には必ず私が起きた時も隣りにいましたので、少しだけ寂しい気持ちになりました。

部屋を見回しましたらアイヴィーさんは鏡の前で器用に髪を編んでいらっしやいます。

ジッと見つめていましたら鏡越しに目が合いました。

「お早う、真白ちゃん。」

「おはようございますです。」

手早く綺麗に編まれていく髪を見ていましたら、アイヴィーさんが笑います。

うさぎのヌイグルミには髪がないので編み込むことも結うことも出来ないのです、残念なのです。

終わるまで待つて、アイヴィーさんお手製の可愛いワンピースを着せてもらい、いつものように抱き上げもらってご飯を食べに行きます。

船員の皆さんはほとんど出払っているそうで普段と違い食堂は閑散とした雰囲気でした。

朝とは言え騒がしいくらいの部屋がシンと静まり返っていると何だかつまらないものですね。

朝ご飯をしつかり食べてからアイヴィーさんと甲板で過ごすことにしました。

私たちの乗っている船とは別の船が沢山停泊しています。が、ほとんどが海賊船なのだと思うととても不思議な気分になります。

こんなに沢山いるのにすぐに喧嘩が起きないんですから。

それともヴェルノさんのように大らかな方が海賊には多いのでしょうか？

その話をアイヴィーさんしてみると、苦笑しながら「そうでもないわよ。むしろ海賊は短気な奴が多いわあ。」とおっしゃっておりました。

何より血気盛んな人たちだからこそ他船を襲撃したり、喧嘩などが好きなのだとか。

私はたまたまそういう場面を見ていないからそう思うのかもしれない。

アイヴィーさんのお話を聞きながら船の縁に寄りかかっていますと、段々船員の方々が戻って来る姿が見えました。

手を振れば、皆さん顔を見合わせてから笑って手を振り返してくださいます。

…どんなお話を聞いてもやはりこうして優しく接してくださる皆さんを悪い人とは思えないのです。

「ヴェルノさんはまだお店なのですか？」

縄梯子をヒヨヒヨイと上ってきたセシル君に声をかけましたら、一度お店のある方角を振り返ってから何故か少し眉を下げて困ったような顔をされます。

「あ…そうっす。多分船長は昼過ぎになると思っっすよ。」

「そうなのですか？」

「いいのよ真白ちゃん。ヴェルノの事は放っておいて今日は買い物に行きましょう？」

「？ またお買い物ですか？」

「ええ、食べ歩きもたまには良いでしょ？」

食べ歩き！それはとっても心惹かれるお誘いなのです！！

一にもなく頷きましたらアイヴィーさんだけでなくセシル君にまで笑われてしまいました。

だいぶ日が昇って船員の方々が戻って来た頃に、アイヴィーさんと一緒に船から降りて海賊達の孤島の中心へ向かいます。

「逸れちゃうと危ないから、今日は抱っこでね。」

と、抱き上げられて屋台を見て回るようになりました。

アイヴィーさんの抱き上げ方は本当に小さな子どもを抱えるように両手で支えながらですが、ヴェルノさんは片手で荷物を持つように抱えます。

安定感で言うならばアイヴィーさんの抱え方が一番安全なのです。

おかげ様で屋台を見るときに前のめりになっても全然怖くないのですよ。

「これは何ですか？」

キャラメルのような甘く香ばしい匂い。けれど見た目は焼き栗のよう。

お店のおじさんが私を見て驚いた顔をした後に大らかに笑います。

「サムナンを知らんのかい？」

「さむなん、？」

「固い殻の中に甘い実が詰まっっていてね、それをキャラメルと一緒に殻ごとじっくり燻すんだよ。食べる時には殻を取って実だけ食べるんだ。」

おじさんが殻を剥いたサムナンを一つくいただきます。

少し熱いそれを一口食べましたら何とカルメ焼きのような味があるではありませんか。

甘くて美味しいお菓子なのです。

お願いして一袋分買ってもらいました。

本当は歩きながら食べたかったのですがゴミが出ますし、殻が固くて私では剥くことが出来ないので諦めて帰ってから食べることにしました。

代わりに中に少しピリ辛な野菜の料理が詰まったナンのようなものを食べながら歩きます。

ご飯を食べたばかりでも美味しいものは軽々とお腹へ収まってしまいますね。

そんな風に屋台を回っていましたら、船を停泊させている方が何やら騒がしくなってきました。

「何かしら？」

「喧嘩、でしょうか？」

「それにしても騒がしいわねえ。」

流石のアイヴィーさんも気になったご様子で船のある方角を見ます。すると、慌てたように数人の男の人たちが足をもつらせながら走って来ました。

その人たちが立ち並ぶお店の人々へ声をかけますと、皆さん一様に顔を青くしてお店を仕舞い始めます。

バタバタと走る男の人の一人が叫びました。

「海軍が来たぞーっ！！！」

その声に周囲の人たちも慌ただしくざわめき、動き始めました。

「あら、もうバレちゃったの？」

「どういふことですか？」

「海賊を捕まえたがってる海軍に見つかっちゃったのよ。残念だけど船に戻ってすぐに出航しなきゃ。」

大勢の人たちが殺到している船着場へアイヴィーさんは駆け出します。

私は買っていたお菓子のいくつかを抱えて、落ちないように服を掴ませていただいています。

が、船着場が近づくに連れて沢山の怒号と地響きのような音が大きくなっている気がするのですが…。

もしかしくとも船着場は戦場と化してしまっているのでしょうか？

にじゅうぶらすさん。

アイヴィーさんが多くの人を押し退けて船着場へ着きますと、予想通りいくつもありました船が焦げたり、燃えていたり悲惨な状態になっているのです。

幸い私たちの船は無事でしたが、周囲の波間に落ちてくる黒い砲弾によって不安定に揺れていました。

「おい、さつさと乗れー！」

既に乗り込んでいたらしいヴェルノさんがアイヴィーさんと私を見て怒鳴ります。

焦っているのでしょうか。大声を出している姿を見たのは初めてなのです。

素早い動作でアイヴィーさんが船へ上がると縄梯子がすぐに回収されました。

どうやら私たちで最後だったようで、ヴェルノさんは忙しそうに動き回る船員の方々へ出航の指示を出します。

私は船の隅っこで邪魔にならないように身を小さくしていることしか出来ません。

「船長、砲弾が来ます！」

「！ 全員船体にしがみ付け！」

ヴェルノさんの声がしたかと思うと、激しい揺れが船を襲いました。

まるで地震のような揺れで船が傾きかけてしまい、私は濡れた床の上を転がってしまいます。

掴むところ、掴むところ！

慌てて探してみましたが私の周りには何もなくて、しかも運の悪いことに転がった私の体は柵の隙間からポーンと船外へ投げ出されてしまいました。

「っ、真白ちゃん……！」

気付いたアイヴィーさんの呼ぶ声がしましたが私は船着場の地面にぼてりと落ちてしまいました。

錨を上げた船はもう離れ始めてしまい、小さな身体の私には飛び移ることも出来ません。

「真白！」

アイヴィーさんの声を聞いたヴェルノさんがすぐに柵から身を乗り出します。

そうして、縁に足をかけてこちらへ飛び移ろうとしました。

そんなことをしてしまえばヴェルノさんも逃げ遅れてしまいますよ。

「行ってくださいです！」

私の言葉にアイヴィーさんとヴェルノさんが驚いた顔をしました。

「このままでは危ないのです！だから、行ってください！」

「何言つてやがる！お前は俺のペットだぞ？！」

「はい！だから待つのです！！必ずお迎えに来てください！！！」

船がまた大きくグラリと揺れました。

ヴェルノさんは思い切り眉を顰めたまま、縁から足を離しました。

そうして大声で叫びます。

「出航しろ！」

ヴェルノさんの声を合図に船が離れるスピードを増します。

きつとすぐに見えなくなってしまうのでしょうか。

振り返ったヴェルノさんの黄金色の綺麗な瞳と視線が合いました。

今まで見たこともないくらい鋭い顔付きに少々驚きましたが、私は手を振ります。

大丈夫ですよ。私だってヴェルノさんの海賊の一員なのです。

離れて行く船とは別に大きな軍艦が何隻も近付いてきます。

このまま船着場においては危険なので人波に逆らって海賊達の孤島の中央へ向かうことにしました。

目的地はウェルダンさんのテント。

あそこまで行けば何とかなると思うのです。

こういう時だけはヌイグルミで良かったのです。小さな体は人目に付き難く、綿と布の体は息切れありません。

…小さすぎて歩幅が足りないのが難点ですが。

全力で走ってみてもなかなか目的地には辿り着けません。

走って、走って、テントに着く頃には中央付近に人気はほとんどありません。

そつとテントの隙間から中に入りますと、ウェルダンさんの声が聞こえてきます。

出航の指示や海軍への攻撃など内容は様々でしたが、それも何時まで持つかは分かりません。

あれ程大きな海軍の船ならば乗っている人の数も多いはずですから。そう思っていましたらテントの外から大勢の人の足音が聞こえてき

ました。

遠目に見てもウェルダンさんの顔に緊張の色が映ります。

「動くな！」

勢い良くテントの布を分けて押し入ってきたのは、やはり軍人さんです。

全員同じような服を着て、とても厳しい顔付きをしていらっしやいます。

ウェルダンさんは抵抗することなく縄で両手を縛られて拘束されてしまいました。

他の方々も捕まり、これでは逃げることも出来ないでしょう。

…どうしよう…？

考えていましたら私の隠れていたテントの布が思い切り開かれ、体がぽーんと前へ飛び出します。

正確には他の軍人さんに蹴られてしまったのですが。

地面に落ちた私を軍人さんの一人が訝しげに見ます。

ウエルダンさんも驚いた顔で私を見ていましたが、動いてはいけな
いと思い、ヌイグルミのフリをしました。

無造作に首根っこを掴まれて持ち上げられます。

「何だこれは？」

「っ、返しなさい！それは僕の母の形見なんです！」

ナイスです、ウエルダンさん。

軍人さんはウエルダンさんの言葉に笑いました。こんな可愛いヌイ
グルミが形見なのが可笑しいのかもしれませんが。

それでもそこは市民の味方の軍だけありまして、何とかウエルダン
さんの下へ持つて行ってくださいます。

そうしてウエルダンさんの肩の辺りにポイと投げ捨てられてしま
いました。

動けずにいると落ちないように肩と頭で挟んでくれます。

「何故貴女がここに？ヴェルノと一緒に逃げたのではなかったんで
すか？」

小さく囁かれて、私も小声で返します。

「砲弾の衝撃で落ちてしまったのです。」

「…よくヴェルノが残ることを許しましたね。」

「私が行くように言ったのです。迎えが来るまではウェルダンさんと待つつもりなのですよ。」

「なるほど。」

貴女がいるのなら、彼も必ず迎えに来るでしょうね。

と、納得した声音で呟きました。

それまでは私は出来る限りヌイグルミのフリをして過ごすことにしましょう。

近くに來た軍人さんに引つ立てられてウェルダンさんが立ち上がります。

捕まってしまったと言うのに堂々としたウェルダンさんの態度はとてすごいのです。

にじゅう ぶらす よん。

軍人さんに連れて行かれたのは軍艦にある薄暗い牢屋でした。

ウエルダンさん自身は海賊でないにしろ、海賊達に加担しているからという理由で拘束されてしまうのだそうです。

…海賊の一員である私には何が良くて何が悪いのか分かりません。

ウエルダンさんにそう言いましたら「海賊の世界は力が全てです。弱い者が悪い、という具合ですから。」と苦笑していました。

いくつもある牢屋には沢山の海賊らしき人たちがいましたが誰もが多かれ少なかれ怪我をしていました。

ウエルダンさんは一人用の牢屋に押し込まれてしまいました。

もちろん、私もいるので一人というわけではありませんが。

軍人さんがいなくなるのをきちんと確認してから、漸くウエルダンさんの肩から下ろさせていただけました。

「困ったことになってしまったんですね。」

「ふふっ、貴女が言つとあまり困った様には聞こえませんか。」

「そうでしょうか？」

「普通海賊や海賊に加担した者は斬首なんですよ？」

「斬首！」

それは本当に一大事なのです！

早く逃げなければウエルダンさんは殺されてしまうのですよー！

「どうすれば助かるのですか？」

「どうしようもない、というのが今の現状ですね。ヴェルノ達が助けに来てくれれば良いのですが。」

それまでは手も足も出せない状況です。

ウエルダンさんは気持ちよいくらいハッキリと言いました。

とりあえず海軍基地のある島までは身の安全は保障されているそう

なので、精々体力を温存しておくくらいしかないのだそうです。

… ああ、早くヴェルノさんやアイヴィーさんが助けに来てくださらないでしょうか？

ヌイグルミである私ができることなんてないのです。

手助けをすることもできず、しょんぼりとしていましたらウェルダンさんが小さく笑います。

「そんなに気落ちしないで下さい。… ああ、そうだ、それではこの縄を切る道具を探して来てはくれませんか？」

擦れてとても痛いんです。そう言うウェルダンさんの手首はキツく縛られていまして、縄で擦れた部分は少し赤くなってしまうていました。

そういうことでしたらお安い御用なのですよ。

服の隙間に挟んでおいた小さなナイフを取り出して見せます。

「一体何所から出したんですか？」

「服の隙間に入れておいたのですよ。」

「不思議ですねえ。」

可笑しそうに笑うウェルダンさんの手首の縄へそつとナイフの刃を当てます。

間違えても手首に傷を付けてしまつては大変ですので、慎重に縄を切ると、あっさりバラバラと解けてしまいました。

ナイフをまた服の隙間に挟んでいる間に、ウェルダンさんは自由になつた手首を何度か動かしてから私の視線に気付いて「何ともないですよ。」と一言。

少し赤くはなっていますが、怪我はないようでよかったのです。

手が自由になつたとは言えまさか牢獄から抜け出す訳にはいきません。

いくらウェルダンさんでも流石に海軍の基地から一人で脱出するのは至難の業だそうで、とりあえず助けが来るまでは大人しくしているのだそうです。

「でもこんな所では少々寂しいですよ。」

「そうですね？」

「暗いし、狭いし、何もなくてとても退屈なんです！」

「ふふ、貴女からしたらそうかもしれないね。」

でもこれが普通なんですよ。と笑うウエルダンさんには申し訳ありませんが、こんな所にずっと閉じ込められているなんて精神的にも身体的にも悪い気がするのですよ。

そんな風にお話をしていましたら、コツコツと足音が響き、周りの牢獄の囚人さんたちが騒がしくなります。

パツとウエルダンさんと顔を見合わせまして、慌てて人形のフリをすれば、牢獄の木製の格子の前で数人の軍人さんが足を止めました。ガチャリ。そんな金属音がしたかと思うと牢獄の扉が開いて軍人さんが一人だけ入ってきました。

鮮やかな短い金髪にエメラルドグリーンの瞳。けれどとても冷たい顔立ちをした男の人がウエルダンさんを見ます。

「久しぶりだな、ダンガルド。」

落ち着いた深みのある声でウエルダンさんに話しかけます。

…なんだかその声には侮蔑のような響きが混ざっているように私には聞こえるのです。

「…懐かしいですね。カルヴァート。」

「数年ぶりの再会がこれとは随分皮肉な話だな。」

どうやらお二人は知り合いのようです。

エメラルドグリーンの瞳がウェルダンさんを上から見下ろし、手に持たれている私を見て整った顔が眉を顰めました。

「何だそれは。」

「大切な物でして。」

「牢獄内にはどのような物も持ち込めないという事ぐらい、元軍人のお前なら知っているだろう?」

「勿論、心得ていますよ。」

なんと、ウェルダンさんは元軍人さんだったのですか！

それなのにどうして海軍を辞めて海賊の手助けをするようになってしまったのでしょうか？

チラリとウェルダンさんを見上げると同時にグイと体が引き上げられてしまいます。

驚く間もなく、私は男の人に耳を掴まれていました。

「返して頂けませんか？」

ハッキリとした口調で言うウェルダンさんに男の人は笑います。

「それは出来ない相談だ。そうだな…返しても良いが、その時は貴様が絞首刑に上がる時だろうよ。」

それまで精々大人しくしていることだ、と男の人は言って、私を掴んだまま牢獄から出てしまいます。

にじゅう ぷらす 一。

…あれ、ウエルダンさんのところに戻してはくだらないのですか？

思わずキョトンとしてしまう私を余所に男の人は私を片手にどんどん牢獄から離れて行きます。

後ろからガチャリと扉の鍵を閉めるような音がして、薄暗い階段を上がって重厚な木製の扉を抜けると一気に辺りが明るくなって一瞬視界が真っ白になりました。

少しずつ目が慣れましたら綺麗な廊下が続いていることに気が付きます。

赤い絨毯を左右に等間隔で並ぶランプが照らしています。さながら映画の豪華客船のような造りをしているのです。

そこをコツコツと靴音を立てて歩く男の人を少しだけ見上げましたら酷く眉を寄せて不愉快そうな顔をしていました。

一言も話さず男の人は数人の軍人さんを引き連れてどこかの部屋に入りました。

室内はやはり豪華で、大きな机の上には沢山の書類やらよく分から

ない地図のようなものが広げているのです。

私はポイとその机の上に放られてしまいました。

何枚もの書類を潰してしまいましたが、起き上がる訳にもいきません。

残念なことに他の軍人さんはこの部屋へ入ることなく、廊下で分かれてしまいました。

ああ、どうしよう？

そう考えているとダスン！と固い音がして何やら体に違和感を感じました。

少しだけ視線をずらしましたらエメラルドグリーンの瞳が冷たく私を見下ろし、白い肌の手が何かを私の体へ押し込んでいます。

離れた手の中を見て漸くそれが何なのか理解しました。ナイフの柄なのです。

つまり私の体にナイフが刺さっているのです。

これは流石に扱いが酷いのですよ。痛みはないのですが体にナイフが刺さっているなんて嫌なのです。

「…こんな人形ガラクタなんぞ…！」

怒りのこもった声が降ってきました。

コンコンと扉をノックする音がして「入れ」と男の人が言いますと、軍人さんが入ってきます。

一度敬礼をしてから何やら難しい話をし出して、それに男の人は軽く頷くと私に背を向けて部屋を出てしまいました。

シンと静まり返った部屋の外で足音がなくなってから、私は漸く動くことができるようになりました。

とは言いまでもお腹の辺りにグツサリ刺さったナイフはかなり深いようで、引っ張ってみてもビクともしないのです。

何度も試してみましたがやはり引き抜けません。

机に張り付け状態なのですよー…。

なんだか情けなくって起こしかけていた体を机に投げ出していましたら、突然扉が開きました。

そのままイグルミのフリをしていると視界の端にひょいと見知らぬ人が現れます。

歳は十代前半から二十代前半くらい、ダークグレーの長髪にやや眠たげな空色の瞳をした人が私を見ます。

「君、動けるんでしょ？」

のんびりとした口調で聞いてくるその人に思わず目を見開いてしまいました。

「どうして分かったのですか？」

少しだけ体を起こして見上げましたら眠たげな瞳が緩く笑います。

「俺ね、ウエルダンの弟のジーク。とは言っても腹違いなんだけどね。」

「弟さん…ではウエルダンさんから聞いたのですか？」

「うん。というかさっき軍師と一緒に牢にいたんだけど。」

「え、気付きませんでした。ごめんなさいです。…ぐんし？」

「カルヴァート軍師。」

ぺこりと頭を下げると、良いよ良いよと軽く手を振る。

…あの酷い人は軍師で確かにウエルダンさんがカルヴァートと呼んでいましたっけ。

あんな人にさん付けなんて必要ないのです。カルヴァートで十分なのです！

ちょっと怒りを感じつつナイフを抜いてくださいますかと聞きますと、何故か首を振られてしまいました。

「俺、勝手に入り込んでるからナイフ抜いたら誰かが入った事がバレちゃうし。」

だそうです。残念です、せっかく自由になれると思ったのに。

せめてどんな状態なのか教えて欲しいとお願いすると、それは頷いてくださいました。

「服切れてるよ。それにナイフが思いっきり腹部に刺さってて…ちよっと待って。……あ、机に刃が刺さってるね。これは君の力でも抜けないかな。資料を巻き込んでない辺りはさすが軍師だなあ。」

「自然に抜けた、という風には出来ませんよね…?」

「うん、無理だね。ありえない。」

キツパリ否定されてしまい溜め息が漏れてしまいます。

牢獄から出られてもこれではウエルダンさんのお手伝いも何もできないではありませんか。

「…あ。そうだ。ウエルダンから伝言。」

「はい?」

「無茶をせず。人形のフリをしていて下さいね、だってさ。」

「……はい、分かりましたです。」

先読みされてしまっていたのですよ。

しょんぼりして頷きましたらジークさんが笑って頭を撫でてくださいました。

…ヴェルノさんはポンポンと軽く叩くように頭を撫でてくださいますが、ジークさんは違うんですね。

なんてちょっとだけ寂しい気持ちになってしまいます。

そろそろ軍師が戻ってくるから、とジークさんは部屋を出て行きました。

ポツンと一人だけ取り残されてしまうと思い出されるのは離れてしまったヴェルノさんやアイヴィーさんたちのことばかりです。

ここに来ていないということはきっと逃げ切れたのでしょう。

無事であれば何よりなのですが最後に見たあの鋭い瞳は忘れられません。

「…早く、来てくださいますか？」

流石にナイフが刺さったままでは嫌なのですよ。

にじゅうぶらすろく。

暗くジツトリと湿った空気が溜まるそこは、海賊達の孤島からかなり離れた海にある小さな無人島だった。

断崖絶壁とも言える岩肌を抜け、世辞にも歩きやすいとは言いがたい草木の生い茂った森の中にあるその洞窟には何人もの男達が集結している。

それこそ名の知れた海賊から、ポツと出ながらも力のある海賊まで様々だ。

互いの顔が見えるか否か程しかない明かりで照らされた古ぼけたテーブルには、人数分のグラスが置かれていたが、中身は何もない。

男達の後ろには彼らを慕う部下達がその背を守っている。

「おいつ、まだ始まらねえのか?！」

苛立つた声と共にテーブルがガタンと音を立てて揺れる。

気の短い男の様子に何人かは呆れた顔をし、何人かは特に反応を示さなかったが、生憎互いの顔すらほとんど見えないため表情を読み取ることは出来ない。

男の声が洞窟内に反響して消えた頃、暗闇からコツコツと二人分の足音が響いてきた。

全員が音のする方へ視線を向ける。

「そう怒鳴^{がな}らないでちょうだい。」

楽しい話し合いが台無しでしょ？

どこか愉しげな雰囲気を含んだ低い声が静かに木霊する。

二人のうちの片方がテーブルに残っていた空席の一つに腰を下ろしたが、先ほど声を発した者ではなかった。

席が全て埋まると空いていたグラスに液体が注がれ、小さな蠟燭の光りに照らされた赤ワインが血のように怪しく揺らめく。

「…呼び出した理由は分かるな？」

椅子に腰掛けた男の低く、妙に威圧的な声が響く。

誰もが頷いた。見えるはずがないその様子を見回す気配がしてから、男の低い笑い声が広がった。

「海賊達の孤島が無きゃあ、俺達に休める場所はねえ。」

例え陸地にいても海賊は追われる。彼らの領分である海でも然り。

海賊が羽を休めることの出来る場所は、海賊達の孤島、だけなのだということは、新米の船乗りでも知っている事実だ。

そこが無くなってしまえば食糧や酒などの調達も今よりずっと不便になる。

普段は敵同士で顔を合わせれば命の奪い合いをする間柄であっても、この忌々しき事態のでは話は別だ。

「ウェルダン捕まったんだってねえ？」

「今回はあの軍師の独断だったせいで、逃げる余裕がなかったみた

い。」

「か、海軍もめ、面倒臭い事をしてくれたモ…モンだなあ。」

「俺あ換金しようとしてたモンの一部が海の藻屑になっちまったしよ。」

珍しい女海賊の言葉を皮切りに次々とそこかしこから文句やら溜め息やらが飛び交う。

周囲の海賊達からも大きくはないが野次が飛んでいた。

が、ダンッ！と力強い音と共にテーブルが跳ね、不協和音のように洞窟内に広がっていた数々の声はピタリと止む。

水を打ったように静まり返った中で、ナイフをテーブルに突き立てたまま男が口を開く。

「何時もならこれくらいで召集したりなんかしねエ。だが今回は別だ。」

目が合っているかも分からぬ暗さだと言うのに男から漂う切り裂かれるような殺気に誰もが思わず息を呑んだ。

「俺は気に入ったモンを奪われるのも、ましてや手から離れるのも許さねエ。」

「…そのお気に入りは海軍の所にあるってことかしら？」

「ああ。それもあのお堅い軍師サマの手元に、だ。……胸糞悪い。」

摂氏零度の空気を纏わせる男の機嫌が悪いことは言うまでも無い。

このまま機嫌が下降の一途を辿れば一体何が起こるのか。それは長年の付き合いをしている海賊達にも予測はつかなかった。

男の後ろから先程の音が響く。

声は「海軍基地に奇襲をかける」旨と「お気に入りで以外に興味がないから財宝は全て他に譲る」といった内容の話をした。

それには静かだった洞窟内も流石にざわめく。

かつてこの男がこれ程までに何かに執着した事はなかった。

人であっても物であってもそれは変わらず、だからこそ「冷酷な海の狼」と呼ばれているのだ。

「異論は認めねエ。」

「そんな事は言わないが、奇襲というからには何か作戦があるんだな？」

「勿論、海軍の鼻を明かすには最高の遊びスタイルを用意するつもりだ。」

「あら、それは楽しみね。」

男がグラスを手に持つと、全ての海賊が己もとグラスを片手に立ち上がった。

瞬間、眩しいほどの松明の明かりが一斉に壁に広がり、洞窟内が明るく照らし出される。

美しい女海賊、大柄で髭を生やした赤ら顔の海賊、開いているのか閉じているのか分からないほど目の細い海賊、パツと見は子供にしか見えない海賊――…

大きなテーブルを囲むように佇む海賊達の中で唯一椅子に腰掛けたままの男がグラスを掲げて笑う。

「成功を願って海の魔女、エトワールに祈りを。」

「……………祈りを！……………」

男がグラスを傾ければ、全員が一気に赤ワインを飲み干した。

そこからは飲んで騒げの宴会にも近い状態へとなっていくが、男はゆつたりと椅子に腰かけたまま優雅にグラスを傾けている。

その背後にずっと佇んでいた人物がやや不満げな声で男に声をかけた。

「今回の作戦はちよつと危険じゃない？ヴェルノ。」

何時ものようにただ突っ込んでいくだけではつまらない。

それだけでは、海軍の鼻を明かせないし、やるならば相手のプライドごとズタズタにしてやらねばヴェルノの気がすまなかった。

椅子の背もたれに寄りかかって聞いてくるアイヴィーに、ヴェルノは黄金色の瞳を滑らせて見やる。

「そうか？今までで一番簡単な策だ。」

「アンタねえ…自分がどれだけ有名か分かってるのかしら？顔見られたら一発でバレるんじゃないの？」

「そんなヘマ、俺がすると思ってるのか？」

「いいえ、思ってないわ。でも念には念をって言いたいのよ。…ア
ンタが怪我なんてしたら真白ちゃん、きつと泣いちゃうわよ？今じ
や珍しいくらい優しい子だもの。」

真白、という単語に黄金色の瞳が静かに細められた。

にじゅう ぶらす なな。

見た目も中身も名前通りの真っ白なヌイグルミの姿をヴェルノは思い浮かべた。

あれが泣く姿なんて到底想像も出来ない。

思い起こしてみても、浮かぶのは気の抜けた寝顔やキラキラと赤い目を輝かせた姿、足元でヒョコヒョコと動き回る姿ばかり。

海賊達の孤島へ海軍が襲撃をかけてきてから二日。たったそれだけしか経っていないというのに、ヴェルノは自身の瞳があのような存在を無意識に探していることに気が付いていた。

ここ最近当たり前になっていた片腕の重さがないことが酷く苛立つ。小さな子供のようなあのヌイグルミの周囲に漂う空気は、まるで麻薬のようにヴェルノの記憶に刻み込まれてしまっていた。

「フン、それくらいで泣くような奴じゃねえよ。」

「そうかしら？真白ちゃん、とってもヴェルノに懐いてるのに。…あーあ、早く取り返さないとね。アタシも真白ちゃんに癒されたい

わあゝ。」

傍にいた海賊の一人からビールジョッキを引つ手繰ったアイヴィーが、一気にそれを仰る。

そうして椅子の背から離れたかと思うと、海賊たちが騒ぐ輪の中へ飛び込むように分け入って行った。

椅子に座ったままヴェルノはそれを見送って、少し離れた位置ですと黙っていた己の腹違いの兄へ視線を向ける。

「アンタも飲んで来いよ。」

「……いや、今日はそんな気分じゃないな。」

肩を竦めるその姿に「そうか。」とだけ返してヴェルノはまたグラスの中身に口を付けた。

少し温くなってしまったそれを全て飲み干してから席を立つ。

肩からずり落ちかけていた上着を直しつつ、ヴェルノはこれから必要になるであろう物を頭の中に書き起こし、洞窟を後にした。

「これ程人員を割いているというのに何故見つからない?!」

苛立つ声と一緒に机がダンツ！と叩かれます。

そのせいで書類が数枚落ちたような音がしましたが、生憎私は見る事が出来ません。

だって相変わらずナイフで机に礫にされたままなのですから動きようありません。

私をナイフで刺した張本人のカルヴァートはとても怒っているのです。

海賊達の孤島を襲ったのに、本当に捕まえたかった大物の海賊の方々が捕まえられなかったそうなのです。

皆さんやはり慣れていらっしやるのでしょうか。

ヴェルノさんもあの時はとても的確な指示と素早い行動で船をすぐに出航させておりました。

もしも私を助けるために停まっていたら捕まっていたかもしれない。

そう思うと私の行動も間違いではないのではと、少しだけホッします。

…ですがヴェルノさんたちとこんなに長く離れたのは今回が初めてでした。

いつも皆さんは騒いだり、一緒に遊ばせていただいたりと楽しく過ごしていましたので、こうして机の上で天井の木目と睨めっこをしているだけというのは凄くつまらないですよ。

かと言って言葉を発してしまえばどうなるか分からないほど子どもでもありません。

ウェルダンさんの言いつけを守ってヌイグルミのフリをしつつ、カルヴァートや他の軍人さんのお話を間近でじっくり聞かせていただいています。

何か良い情報でもあればヴェルノさんの船に帰れたときにご報告しなければいけませんから。

時折ジークさんが様子を見に来てくださいますが、ナイフを外してもらえないのはとても残念なのです。

「それが…捕らえた者達のほとんどは海賊としての時期が浅く、海賊達の孤島の本場の場所を知らないようなのです。」

… 本当の場所？あの大きな船がそうなのではないのですか？

黙って聞き耳を立てているとカルヴァートが「そんな事は分かっている！」と若い軍人さんを怒鳴りつけるのです。

「金も時間も、人手すら費やしているというのに噂一つ持って来れないとは恥かしいとは思わないのか?!」

「軍師、落ち着いて下さい。」

「っ、私は落ち着いている。」

諫められて、白い手袋の親指を噛み締めるカルヴァート。

ヴェルノさんたちはそんな簡単に見つかるような方々でも、捕まるような方々でもないのですよ。

そう思っていましたら腹部に感じていた緩い圧迫感がふっと消えました。

チラリと見るとナイフが抜けて、ほんの少しだけ中身の綿が見えるのです。

やっと解放されたと内心気を緩めていたせいでしょうか、驚く間もなく私は床へ叩きつけられてしまいます。

痛みがないとは言え、本当に酷い扱いなのです。

物は大切にしなさいとこの人は教わらなかったのでしょうか？

それでも危うく踏まれそうになったところで、何とそれまでずっと黙っていたジークさんがカルヴァートの足を止めてくれたのです。

止められたカルヴァートもとても驚いた顔をしていました。

「何故止める？」

「軍師、物に当たるのは、よろしくないかと。…例えそれが海賊の持ち物であっても、物自体に罪はありません。」

「……。」

スツと足を退かしたのを見て、心の中でジークさんに拍手を送ってしまいます。

ありがとうございますのです。あのまま踏まれたら流石の私も堪忍袋の尾がぶちっと切れてしまったかもしれません。

この真っ白なヌイグルミである私でも待っていてくださる方がいる

のですから、黙ってやられ続けているわけにもいきません。

チラリとジークさんが私へ視線を落としてから、拾い上げて、軽く叩いてくださいました。

部屋全体を見渡せる壁際の棚の上にそつと置いてくれたので何とかお腹から綿がはみ出すような事態も避けられましたのです。

ジークさんのゆっくりとした空気のお陰かピリピリとしていた室内の空気が和らぎ、カルヴァートは何人かの軍人さんたちと何やら難しい話をし出すのです。

どこの島には海賊がないだとか、この島には実は海賊がいるのだとか。

なぜ海軍の人々はそこまで海賊を悪だと嫌うのでしょうか？

海賊同士の争いであれば仕方がないことでしょう。

もちろん、街を襲ったりするような海賊はしょっぴかれるのは当たり前です。

…あ、そうしますとヴェルノさんも商船を時々襲っているので海軍に追われるのは無理もないんですね。

それにしてもまるで海賊全てを根絶やしにしようとするような、どこか一方的過ぎる正義に思えるのです。

ヴェルノさんのように海賊にも優しい人がいるのだということを出せないのがとても悲しいのですよ。

にじゅう ぶらす はち。

そうこうしているうちに軍人さん方が部屋を出て行ってしまい、残ったのはカルヴァートだけ。

棚の上から見つめていると「クソッ……！」と綺麗な顔にとても似つかわしくない悪態を吐いて、部屋を出て行ってしまわれました。

扉の向こうの足音が遠退き、聞こえなくなってから私は棚からそーっと降ります。

何とか机の脚に掴まって上に上って、何かヴェルノさんかウェルダンさんのためになるような物を探してみました。

ただと残念なことに私は文字が読めないようなのです。

…どうして今まで気付かなかったのでしょうか？

ゴソゴソと机の上を探っておりましたら、いきなり体が宙に浮いてしまったのです！

「無重力！」

「…ねえ、君、一応捕まってるんだって分かってる？」

「あ、ジークさんでしたのですね。」

ゆったりとした口調と声に首だけで振り返りますと、ジークさんが私の服を後ろから掴んで持ち上げているではありませんか。

急に体が浮いてしまったのはジークさんのせいでしたか。

何故かジークさんは私を机の上ではなく棚の上に戻してしまうのです。

「人形のフリしてろって言ったよね？」

「はっ！そ、そうなのでした…。」

「気持ちは分からなくもないけど、静かにしていなよ。軍師にバレたら君、ナイフを刺される程度じゃ済まないんだからさ。」

「……はいです…。」

ちよつとだけ呆れを含んだジークさんの注意にしょんぼりなのです。

私がかした書類をジークさんが纏め始めてすぐにカルヴァートがいきなり部屋の扉を開けたのです。

ビックリでした。もしもジークさんがいらっしやらなかったら、机の上で書類を漁っているところをバツチリ目撃されてしまっていたでしょう。

カルヴァートは一瞬‘何で此处に居るんだ’と言いたげな顔でジークさんに視線を投げかけましたが、散らばったままの書類を整理している様子に寄せていた眉間の皺を消します。

そうして机から数枚の書類を取り出すとまた足早に部屋を出て行ってしまいました。

「こういう事もあるから、もう止めてよね。」背を向けたままのジークさんに、私は素直に従う他ありません。

書類をきっちり重ねて整理したジークさんは最後にチラリと私に視線を投げかけ、それから相変らずのんびりとした様子で部屋を出て行かれてしまいました。

「って訳。ちょっとあの危機感が欠片もない子、なんとかしてよ。
…兄さん。」

食事に混ぜた薬で眠りこけている軍人を押し退け、長椅子の端に腰掛けながらジークは呆れを多分に含んだ声音でそう言った。

目の前の独房にはウエルディーノ「ダンガルド——彼の腹違いの兄が、渡された食事を食べながら苦笑を浮べて格子越しに弟を見る。

「ふふつ、流石ヴェルノのお気に入りですね。予想もしない事をしてくださいます。」

そこが面白いのかもしれないね。と穏やかに言うウエルダンに、手の内で折り畳みナイフを弄っていたジークが僅かに目を見開いて顔を上げた。

のんびりとスープを飲む兄をマジマジと見つめる。

「え…、あれってウルフ船長のお気に入りなの？」

「ええ。言っていないませんでしたか？」

「聞いてない。あーあ…怒られないといいけど。」

「…何かあったのですか？」

かの有名な海賊であり兄の友人でもある男に殴られる自分の姿を想像しつつ、ジークは溜め息を零す。

それを見たウエルダンは笑みを引つ込めて弟の顔を見た。

友人の大切なものを預かっているのだから何かあつては困る。何よりウエルダンもあの真っ白なうさぎのヌイグルミの事は気に入っていた。

殺るか殺られるかという荒んだ海賊の世界に長く身を置いていたせいか、あの妙に緩い雰囲気醸し出すヌイグルミの傍は酷く心地良い。

…あの空恐ろしい友人から奪う気など毛頭ないが。

「軍師がさあ、ナイフで机に礫^{はりつけ}にしちゃったんだよね。もう外せたけど、この辺がザックリいつてる。」

この辺、とジークは自身の腹部の辺りを縦向きに指でなぞる。

…それはかなりの大怪我では？

ひくりと口の端を引きつらせたウェルダンに気付いたジークが「でも、本人は何ともなさそうだった。切れた所は少し気にしてたけど」と付け加えた。

これは早急にヴェルノへ伝えなければなりませんね。

何も知らずに彼女のそんな姿を見たら――…

そこまで考えてウェルダンは小さく身震いした。

青い髪の友人は普段は良い男だが、一度機嫌が悪くなってしまえば手がつけられない。

「そうですか…。その件は私が何とかしておきますよ。」

「うん、お願い。俺この年で死にたくないし。」

「そこまで言いますか。」

「だってあの人手加減しないじゃない。」

他を纏め上げるだけの才があり、他者を退ける技量を持ち、己の邪魔をする者や気に入らない者には何の容赦も無い。

ウエルダンも以前、送った使者が使い物にならなくなって帰って来た事が何度かあった。

その時の光景は未だ鮮明に思い起こせる。ジークも昔は一度と言わず二度も三度も殺されかけたことがあり、その際は弟だからとウエルダンが止めて何とか助かったのだ。

お気に入りのあの真つ白なヌイグルミに手を出されたと知ったら、一体どれ程気分を害するだろうか？

想像してみても、全く予測がつかない。

少なくとも軍師は無事では済まされないだろう。

助けが来る事は嬉しいものの、助けに来てもらいたくないような形容し難い思いを胸の内に押し込めながらウエルダンは苦笑した。

「その辺りは彼女も助けてくれますよ、きっと。」

「希望的憶測は期待すべきでないよ、兄さん。……それじゃあ俺は戻るから。」

カシヤンと軽い音を立ててジークは独房の中から空になった食器を引き下げた。

「ええ、ありがとうございます。」

背に届いたウエルダンの声に空いた片手を上げ、ジークは薄暗い独房を出て行ってしまう。

その少し後に薬の効果が切れて目を覚ました監視役の軍人は、やや眠そうな目を擦りながらウエルダンを見た。

にじゅう ぶらす きゅう。

「あゝっ、くそ眠い。」

深く腰掛けて眠っていたからか、頻りに首を捻ったり肩を回したりしながら気怠げに呟いた監視役をウエルダンは軽く目を細めて見や
った。

薄暗い中に溶け込むような暗い髪色の軍人はほんの少し鋭い八重歯
を隠しもせずに大きく欠伸をする。

「申し訳ありません。少々効き過ぎましたか？」

「いやあ、寝不足気味だったからある意味丁度いいんじゃないの？
アイツには俺の事、話すなって言われてっしょ。」

「…ご面倒おかけします。」

ウェルダンの言葉に、気にすんなよ、と人懐っこい笑みをニツと浮かべて男がひらひらと手を振った。

男は軍人ではあるもののヴェルノ率いるウルフの一員でもある。

その辺りを説明すると長くなってしまうので端折らせてもらうが、男は軍と海賊の二面の顔を持ち、尚且つ心内は海賊だ。

海軍の皮を被った海賊とでも言えいいのだろうか。

友人は変わった物が好きだが、彼自身も風変わりだと思う。

オマケにこの男の存在は弟だけでなく、他にも間諜として入っている海賊たちの誰も知らない友人の切り札でもある。

「にしても、薬の扱いに長けてる奴は便利だなあ。」

監視役を眠らせ、堂々と捕虜である海賊と話が出るのだから。

監視役を殺す必要もないし、薬は一定時間をすれば効果が切れて対象者は自然と目を覚ます。

食事も全て食べてしまうから証拠も残らない。

そついうやり方もあるのかと感心した様子で呟く男には悪いが、ウ

エルダンは少しだけ笑ってしまった。

「失礼ながら、貴方に調合云々は似合わないと思いますよ。」

「だろうなあ。俺ってば適当豪快がモットーだもん。ちまちま薬の調合なんてやってらんねーよ。」

ケラケラと楽しげに笑って、目元を軽く拭いっつ膝に両肘を立てて頬杖をつく。

性格からして細かいことが苦手そうだと感じていたが、本人も自覚があるようで「やっぱやらんらド派手にいきたいよなあ」

などと言っている始末だ。

機嫌の良さそうな猫を彷彿とさせる目がウェルダンに向いた。

「まあ、それは置いといて真面目な話に戻そうぜ。」

長椅子から立ち上がり、男が格子の前に屈む。

傍からすれば軍人が捕まったウェルダンを嘲笑っているような体制

だ。勿論、彼らはそう周囲に見て取られるようワザとしているのだが。

男の手が頑丈な格子を確かめるように撫でていくのを横目に頷く。

「そうですね。ヴェルノは何と言っていましたか？」

「準備が出来次第行くつて。あ、でも何か面白い事考えてるみたいだったぜえ？」

「面白い事、ですか……？」

ヴェルノの言う「面白い事」が一体何であるのか分からないものの、あまり褒められたものではない事だけは何となく理解できる。

目の前の男は知っているのかニヤニヤとした笑みを浮かべているが内容を聞く気にはなれなかった。

助けに来てくれるのならば何だって構わない。

「ああ、それから。」

「？」

「先ほどの話をウエルノにお願いします。」

「旦那のお気に入りの子兎ちゃんがナイフで刺されたってやつか。本当に大丈夫なのかよ？」

「さあ？ですが彼女は人形ですから、直せば大丈夫なのではないでしょうか。」

うんうんと男は頷きながら長椅子に戻る。

そうして髪を巻き込みながら思い切りガシガシと頭を掻いた。

報告しなければならぬ事を頭の内でも纏めているらしく、猫のような瞳は鋭い光りを宿して宙を睨み付けている。

ややあつてから男はふつと目元を緩めて笑った。

「んじゃ今の所は旦那への報告なんてそんならいだな。」

「よろしくお願いします。出来る限り彼女の件は柔らかく、控えめに、脚色せず伝えて下さいね。」

「分かってるって。俺だって殴られたくない。」

互いに視線を合わせ、頷きを返すのと同時に遠くから監視役の交代を告げる声が響く。

それに返事を返して立ち上がった男の瞳がウエルダンを見下ろしたが、そこには既に敵意にも似た冷たい光りが宿っていた。

男とは別の軍人が交代で現れて長椅子へ座る。

それへチラリと一瞥をくれたウエルダンもまた同様に無関心の色を瞳に乗せ、壁に寄りかかって瞼を閉じた。

監視の視線を感じながらも頭の中で先ほどの男の言葉を思い出し、考える。

ヴェルノのことだから、きっと大事になるに違いない。

しかしながらこの海軍基地に乗り込むならばかなりの数がいる。

他の海賊召集するのだろうか？それでも心配ではある。

どれほど強くとも、有名であろうともヴェルノだって一人の人間なのだ。

どのような手を打って出るのか…。

友人のお気に入りであるヌイグルミも気になってしまい、ウエルダンは小さく溜め息を零した。

…お願いですから軍師にだけはバレないで下さいね。

そんな祈りにも似た事を思いつつ、くすんだ木製の簡易なベッドへ
寄り掛かりながらウェルダン^{ダニ}は目を閉じた。

さんじゅう。

暗闇に乗じて一つの影が島に降り立った。

ゴツゴツとした岩肌の海岸を抜け、木々が鬱蒼と生い茂る森の中へと足を踏み入れる。

足元を照らす月明かりは木の葉のせいで微かに降り注ぐだけだったが、男は慣れた様子で獣道のような場所を進んだ。

そうして唐突に視界が開けてそびえ立つ断崖の前まで来ると歩調を緩める。

壁に出来た大きな穴の脇で壁に寄りかかりながら空に浮かぶ月を見上げている己の船長に声をかけた。

「すみません、待ちましたか？」

振り返った黄金色の瞳の鋭さに一瞬ヒヤリとしたものが男の背を伝

い落ちる。

しかしその後すぐに鋭さは掻き消えた。

「いや、待ってねエ。」

「ならイインですがね。さて、何から報告すればイインでしょうか？」

暗い森の中から姿を現した男——海軍に潜入させている部下だ——の言葉にヴェルノは逡巡してから、海軍の動向はどうだと問いかける。

男はそれに対して「かなり苛立ってますよ。」と愉しげに返した。だろうな、と返事を返すヴェルノの顔にもニヒルな笑みが浮かんでいる。

何十隻もの軍艦を出し、何百何千という軍人を使って、それでも海賊を見つけ出せないだなどという事態は、あの軍師にとっては屈辱だろう。

だからと言って簡単に捕まるほど海賊も馬鹿ではない。

己の身を隠す島の一つや二つ、それなりに名の知れた海賊であれば有しているのだ。

それらを見つけること自体困難であるのだから闇雲に探した所で無駄に金と時間を浪費するだけである。

苛立つ軍師の姿を思い浮かべてヴェルノは喉の奥で低く笑った。

「アイツは何時も肝心な所が見えてねエからな。」

ある程度笑いが収まってから、男はヴェルノに最も伝え難い事柄を言う。

「それで、旦那のお気に入りの子兔ちゃんの件なんですけど……ちつとばかり怪我してるみたいなんですよね。」

「……怪我？」

「あ、いや、本人は平気らしいですが、こう腹の辺りをナイフでザツクリ切られてるっぽいみたいで。ウェルダンの弟からの情報ですけど。」

「そうか。」

先ほどまでは機嫌が良さそうだったヴェルノの雰囲気グッと落ち

込むのが分かる。

冷え冷えとした殺気にも似た空気に男は（こういう時、報告すんの嫌なんだよなあ。）と冷や汗を隠しながら内心でばやく。

暫く考えるような素振りを見せた後にヴェルノが溜め息混じりに壁から背を離れた。

不機嫌さは消え去り、怒りなども見られず、どちらかと言えば呆れたような声音で口を開いた。

「目を離すとすぐにコレか。面倒臭エな。」

言葉のわりに表情は穏やかなもので、男は目を見開いて驚いた。

「旦那…？」

「おい、頼んでおいた物は集まってるか？」

「え？ええ、何時でも使えますけど。」

「持って来い。それから野郎共に準備をさせとけ。」

ヴェルノの指示に更に男は驚く。準備、ということは予定を繰り上げるつもりなのだろうか？

男の視線を受けてヴェルノは黄金の瞳を細めて笑う。

「明日の夜、決行する。」

「了解。」

「お前は明日の夜までに戻ってウェルダンに伝える。」

「うーっす。んじゃ今夜はこっちで酒でも楽しみますかぁ！」

男は嬉しそうに洞窟の中へと入っていく。

それを横目にヴェルノはまた空へと視線を向ける。月はぼ丸に近い。明日は満月だろう。

懐から取り出したパイプを口に銜え、マッチで火を付ける。

甘いキャラメルのような香りが煙と共に仄かに広がった。

ふうと煙を吐き出し、パイプを口元から離す。途端、バキリと音がして艶のある美しい木製のパイプは真っ二つにヘシ折れてしまっていた。

壊れたパイプになど目もくれずにヴェルノは苛立ちのこもる瞳で宙を睨み付ける。

——…怪我、だと？

先ほどは男の怯えた空気を感じ取り、一応怒りを腹の中に押さえ込んでいたものの、ヴェルノはかなりの苛立ちを感じていた。

ただでさえ手元から離れているというのに、己の目の届かぬ場所で傷を付けられたなど不愉快極まりない。

己以外の者が手を出した事が最もヴェルノの機嫌を損ねさせる。

感情のままに折れたパイプを岩壁に叩き付け、粉々になる様を眺めた。

「…ふざけやがって…！」

うなるように呟いて、上着を翻して洞窟の中へと戻る。

カツコツと足音を響かせながら考えるのは、軍師と呼ばれる男のプライドをどう叩き潰してやるかという事だけだ。

洞窟の最奥にある騒がしい部屋へ来たヴェルノに気付いた者は少ない。

ヴェルノは酒瓶を掴み、勢いよくテーブルの縁へ叩き付け、派手な音が洞窟内に木霊する。

その場にいた海賊達は誰もが口を噤んでヴェルノを見た。

「聞いただろうが、明日の夜までに準備を終わらせておけ。遅れは許さねエ。」

突然予定を変えたヴェルノにアイヴィーが歩み寄る。

「真白ちゃんの件ね？」

「ああ。手エ出されて黙ってる程、俺は温厚じゃねエからな。」

「そうね、アタシも苛々してたもの。」

「…酒持って来い。」

両者共に静かながらも怒りを露わにするヴェルノとアイヴィーを見ながら、中にいた半分ほどの海賊たちは繰り上がった予定を実行するべく己の船へとそれぞれ戻っていく。

残った半分は先ほどよりもやや声を落としながら遠目に二人を眺めている。

報告に来た男——イアン——はその様子を眺めながら、小さく呟いた。

「……楽しく酒を酌み交わしたかったんだけどなあ。」

狩りの時期を待つ狩人のような船長と副船長を眺めながら、傍にあった酒瓶をイアンは一気に仰った。

さんじゅう ぶらす いち。

カリカリカリカリ。ネズミさんが壁を齧るような音がずっとするのです。

音の発信源はわたしに背を見せて机に向かっているカルヴァートなのです。

何か書き物をしているようなのですが、このカリカリという音はどうにも耳についてしまって眠ることが出来ないのですよ。

ヴェルノさんもよく書き物をしていましたがこんな音ではなく、紙の上を羽ペンが滑るサラサラという心地良い音でした。

…はつきり言わせていただきますと、とても安眠妨害なのです。

せつかくうとうとしておりましたのにカリカリカリカリ音が響いてわたしの頭の中ではネズミさんが大量発生してしまっているのです。

カリカリカリカリカリカリカリカリ。

…もつこの音は嫌いになりそうなのですよ。

どれぐらいそうしていたのかは分かりません。けれど何やら仕事を
終えたらしいカルヴァートはパタンと本を閉じて棚に戻すと、その
足で立ち上がって部屋の外へ行ってしまうました。

これではようやく眠ることが出来ます。

目を閉じるとゆっくりと身体の力が抜けて、わたしは眠りに落ちま
した。

擬音語に直すなら、ドッカーン。そんな感じの、かなり大きな音と
地震のような揺れに唐突に目が覚めてしまいました。

はてさて一体何が起きたのでしょうか？

断続的に建物が揺れ、遠くから何やら映画などで聞くような派手な
音が聞こえてきます。

それに混じって廊下を走る人たちの慌ただしい足音と声も壁を通し
て届いてくるのですが、何やら由々しき事態なご様子なのです。

とりあえず起き上がって部屋の中を見回してみますと、棚の上にあ
る物が落ちてしまったり、テーブルの上にあったグラスが割れて床

に散らばったりしておりました。

これならわたしがいなくなってもすぐには気付かれなさそうです。

棚から降りようと後ろ向きで取っ手の部分に足をかけたところで、また大きな揺れと音がしました。

「ぶふっ…！」

頭でつかちな体は揺れで外側へ倒れて、物の見事に床とご対面してしまいます。

…顔から落ちなくて良かったのです。

キヨロキヨロと辺りを確かめてから机の脚を何とかよじ上ってから、カルヴァートが一生懸命書いていた本を引きずり出しました。

文庫本ほどの大きさと厚さの本を一度開けて見ました。が、わたしには読めない字なので、何が書いてあるのかサッパリ分かりません。けれど沢山書き込んであるということは何か大切なことなのでしょう。

ちょっとだけ悩みましたがその本は持っていくことにします。

本を服の内側に押し込んでから、どうやって机から下りようか思案

してしましたら部屋の扉が勢いよく開きました。

思わず硬直してしまった私を見たジークさんの姿にホッと胸を撫で下ろします。

「いたいた。」

ヒョイと抱え上げられたかと思うとジークさんは割れたグラスやらを踏みながら部屋を出て行こうとします。

「あの、どちらへ行かれるんですか？」

「甲板。君のお迎えが来たからね。」

「お迎え…ヴェルノさんですか！」

「うん、あの人だよ。」

ジークさんの肩に落ちないように手を添えます。

平然と会話をしていますが、ジークさんはかなりの速度で廊下を駆け抜けていて、途中で何人かの軍人さんとも擦れ違いましたが顔を

見る暇すらありませんでした。

上に行ったり左右に行ったり、それこそ迷路のような船内を風のよ
うに走ります。

ジェットコースターのような感覚が少し楽しいのです！

話しかけるとジークさんは返事を返してくださいますが、何やら急
いでいる様子でずっと前ばかり見ております。

と、急に立ち止まって壁に隠れて角の先の廊下の様子をそっと窺い
ました。

数人の軍人さんが剣を持ってウロウロしております。

これを突破するにはジークさん一人では難しい気がします。私はき
つと戦力になりません。

どうするのでしょうかとジークさんを見やれば、ポケットからビー玉
くらいの小さな銀色の玉を幾つか取り出して、数回確かめるように
手の内で軽く回します。

そうして軍人さんのいる廊下を見ながら玉を放り投げました。

銀色のそれは綺麗な放物線を描いた後に軍人さんたちの足元へ四方
八方にコロコロと転がり、動きが止まる前に小さく火花を散らせた
かと思えば、小さな球体から一気に真っ白な煙が噴出しました。

廊下は数個の玉のせいで真っ白になり、視界は完全に見えなくなっ
たのです。

しかしジークさんは真っ白な煙の中を走り出し、煙に咽たり焦ったりする軍人さんと鉢合わせする事無くあっさりと抜けてしまいます。一体どのような仕掛けなのでしょう？

「煙の中なのに見えたのですか？」

今だ疾走するジークさんに聞きましたら、見えてないと答えが返ってきました。

玉を投げる前にあらかじめ廊下の物の配置と軍人さんの位置を覚えておき、煙幕で見えなくなってから記憶を頼りに素早く抜けるのだそうです。

すごいのです、ジークさんは運動だけではなくて記憶力も良いのですね。

ですが煙幕の玉というのはとても役に立ちそうですね。

…なんだか忍者さんみたいなのですよ。

目の前に偶然現れた軍人さんへ眠り薬の入った玉を投げ付けるジークさんを見て、笑ってしまいました。

ジークさんはそれを聞き取ったのか不思議そうに眠たげな顔で首を

傾げます。

何でもありませんと言つと、そう、とだけ呟いてまた走り出しました。

さんじゅうぶらすに。

長い間：少なくとも数十分以上ジークさんは船内を走り続けました。これには流石のジークさんも少し息が上がってしまっていたようですが、もうすぐだからと休むことなく足を動かします。

一歩一歩甲板に近付く度に何かが爆発したり、壊れたりする音が大きくなっているのです。

ジークさんに言われて私は服に顔を埋めているので周囲の様子は分かりません。

でも、きつととても悲惨な状況なのだと思います。

時折、人の助けを求める声や怒声が聞こえてくるのは、ヴェルノさんたちと軍人さんたちが戦っているから。

怪我をした人や、もしかしたら亡くなってしまった方もいるのかもしれない。ジークさんは気を使って見ないように、私へ顔を隠すように言ったのかも。

けれどこればかりは甘える訳にはいかないのです。

これからもヴェルノさんたちと一緒にいるのですから、襲撃の度に見ないフリをするのはダメなのですよ。

意を決して顔を上げれば、すぐに壊れた扉が飛び込んで来ました。

それだけではありません。綺麗な装飾の施されておりました壁も所々が壊れ、人の血のようなものがこびり付いています。

開いたままの扉の向こうに倒れた人影も見えました。

泣きたいくらい悲しくて、今更怖い気持ち溢れてきます。

私が顔を上げたことに気付いたジークさんが「馬鹿、」と呟いて、無理矢理片手で私の顔を服に戻します。

けれど見てしまった光景は頭から離れません。

…ヴェルノさんの、あの優しく大きな手はきつと何人もの人を傷付け、時には殺してしまったこともあるのでしょうか。

そう分かっていながらも、迎えに来てくれたことが何よりも嬉しいと思う私は最低なのかもしれないのです。

海賊でも、人を傷付けるような人でも、ヴェルノさんは私の恩人で、優しくてちよつと意地悪さんで…よく笑う素敵な方なのですよ。

「見るなって、言ったでしょ。」

咎める口調のジークさんの言葉にぐつと唇を噛み締めます。

「私は現実をきちんと見たいのです。」

「…ツラいだけだよ。」

「それでも、目を背けてしまったらヴェルノさんたちと一緒にいられない気がするのです。」

少しの間ジークさんは黙って、頭を抑えていた手が離れていききました。

顔を上げて、走るジークさんの上から酷い状況の船内をジッと見つめます。

これから先もヴェルノさんたちと一緒にいるのならば、何度でも、こんな事態を目の当たりにするのでしょう。

ヴェルノさんたちは優しいから私に見せないようにしてくださいさるかもしません。

けれど、それではいけない気がするのです。

甲板へと続く最後の廊下を駆け抜け、ジークさんは唐突に足を止めてしまいました。

「ここから先に俺は行けないから、君一人で行きなよ。」

「はいです。」

そつと下ろされて、ゆっくりと甲板への扉に手が伸ばされます。

見上げれば相変わらず眠たげな表情をしたジークさんと目が合いました。

「お世話になりました。ありがとうございますのです。」

ジークさんは少しだけ口元に緩く笑みを浮べて一度私の頭をポンポンと撫でると、今度こそ促すように扉を開けてくださいました。

そうして久しぶりに出た外は船内よりも更に凄惨な状態でそこら中に倒れて動かない人もいます。

大きな軍艦のマストは根元からボッキリ折れていますし、船の縁はボロボロです。

それでも甲板では何人もの人たちが剣を合わせて戦っていました。

その中にはカルヴァートもいて、一人二人と剣で素早く海賊の人たちを切つては猛然と甲板の先端へ向かつて行きます。

何故あんなにも焦っているのかと甲板の先端へ視線を滑らせた私はハッと息を詰めてしまいました。

…ヴェルノさんとアイヴィーさんが戦っているのです。二人は互いの背を守るように立っており、ヴェルノさんは鋭く、そして素早く剣を扱います。アイヴィーさんはまるで踊るように、流れる動作で小剣を両手に持つて動きます。

二人の周りにはもう動かない人や、血を流して呻いている人がいました。

それなのに私は思わず二人に見入ってしまいます。

ヴェルノさんが危なくなるとアイヴィーさんが、アイヴィーさんが危なくなるとヴェルノさんが息ピッタリのタイミングで剣を振るうのです。

けれどもカルヴァートが二人に近付いているのです。

二人は周りにいる軍人さんの相手で手一杯な様子なのにカルヴァートはヴェルノさんの背中へ向けて、剣を掲げます。

もしかしくなくても投げるつもりなのでしょうか。

そんなことは絶対にさせる訳にはいかないですよ！

早く邪魔をしなければヴェルノさんが怪我をしてしまうのです！

後ろからジークさんの止める声が聞こえて来るのを振り切ってカルヴァートの元に走って行きます。

そうして今にも剣を投げてしまいそうなその足に勢いよく飛び掛って、投げられないようにズボンを引っ張ったり体当たりをしたりしました。

私程度の力では大した強さではありません。

しかし突然のことに驚いたようで、カルヴァートは足元の私を見ると目を見開きます。

「なっ？！人形が動いてるだっ？！？」

蹴られそうになり、慌てて離れればカルヴァートの意識が私の方へ向きました。

それでも剣を持つ腕は下がらないので床に散乱していた木片などを投げると、剣で払い除けられます。

「卑怯者っ！戦っている人の背中を遠くから狙うなんて、最低ですっ！！」

「何っ?!」

「だってそうではないですか！あなたは正々堂々戦わない卑怯な人なのですよ！！」

「このっ…！言わせておけば！」

バッとカルヴァートが剣を私の方へ向けてきます。

怖いと思う反面、これでヴェルノさんが狙われなくなったことにどこかホッとした気持ちになりました。

先ほどの蹴りを避けただけでも奇跡に近いのに向かって来る剣を避けることなど私には出来ません。

ぎゅっと目を閉じて衝撃に備えた私の耳に予想していた衝撃とは別の、キン…！と金属同士がぶつかり合う甲高い音が届きました。

さんじゅう ぶらす さん。

「真白！」

低く心地良い声が私の名前を呼びました。それに目を開けると、目の前には見慣れた上着を羽織ったヴェルノさんがいます。

片手で持つ剣でカルヴァートさんの剣を抑えながら私へもう片方の手が差し出されました。

躊躇うことなくその手を掴むと一気に引き上げられて、腕で抱き寄せられます。

たった数日でしたが、まるで何ヶ月も離れてしまっていたような気分になって思わずヴェルノさんにしがみ付いてしまいました。

「そんな奇妙な物をお前が傍に置くとはな。」

剣を擦り合わせたままカルヴァートが厭味っぽく言います。

ムツとした私とは裏腹にヴェルノさんは気にした様子もなく、剣を弾きました。

「何を持とうが俺の勝手だ。」

「フンッ、海賊の癖に一人前に人間らしい事を言う。」

「俺もお前も人間じゃねエか。」

「貴様のような男と一緒にするな！」

苛立った声でそう吐き捨てるように言って、カルヴァートは向かっ
てきます。

けれどヴェルノさんはサツと避けながら剣を持つ手を狙って、鋭く
剣先を突き出しました。

しかし軍師と呼ばれているだけあってカルヴァートはヴェルノさん
の攻撃を交わして、更に横なぎに剣を振ります。

片手でそれを受け止めるヴェルノさん。すごいのです。

でも、私を抱えている分きつと動きが制限されて不利なのですよ。

「ヴェルノさん、下ろしてくださいです！私を持っていたはきちんと戦えません！」

「あ？問題ねエよ。」

言葉通り、繰り出された突きを身を引いて避けたヴェルノさんは剣を持つ手を地面に付け、軽やかにバック転を披露します。

片手でバックテンをする人を初めて見ました。

とは言え抱えられている私も一緒にぐるんと回ったのですが。

ヴェルノさんとカルヴァートの戦いは明らかにヴェルノさんの方が強いのです。

それでも諦めずに剣を持って向かって来るカルヴァートも執念には思わず閉口してしまいました。

何時までも続くかと思われた戦いも、ヴェルノさんがカルヴァートの剣を弾いて終わりを迎えます。弾かれた剣は手の届かない遠くの甲板の上へ落ちました。

カルヴァートはとても悔しそうな顔で弾かれた左手首を押さえつつ、ヴェルノさんを睨むのです。

ヴェルノさんはカルヴァートを見て、いつもの意地の悪そうな笑みを浮かべているのです。

「相変わらず弱エな。」

ヴェルノさんのその言葉に怒り心頭といったカルヴァートですが、勝敗はもう決まっています。

殺せ！と顔を顰めて叫ぶカルヴァート。

でもヴェルノさんは私をちらりと見てから、持っていた剣でカルヴァートの足を刺しました。

殺さなかったのは私がいるからでしょうか？

「何故殺さない？！情けをかけたつもりか！！」

よほど嫌だったのかカルヴァートは顔を真っ赤にしています。

ヴェルノさんは涼しい顔で否定しました。

「違エ。お前にとっては死ぬより、この方が屈辱だろうと思ってな。」

「下衆^{げす}が…！」

「ククッ…海賊にや最高の褒め言葉だ。」

よくは分かりませんがカルヴァートにとって、ヴェルノさんに生かされることは屈辱なようなのです。

私には本当に理解できません。

だって生きていられたのに、喜ばずに嫌がるだなんて。

ヴェルノさんを見上げましたら、綺麗な黄金色の瞳と目が合いました。

何はともあれ、私はヴェルノさんの下へ戻って来れたのですね。

ふつつと沸き上がります嬉しさに思わず抱き着いてしまいました
が、ヴェルノさんは優しく頭を撫でてくださいます。

「船に戻るか。」

「はいです！」

抱え直され、私もすっかりヴェルノさんの服を掴みました。

カルヴァートがヴェルノさんに色々と呼んでいましたが、気にはしていないようです。

振り返ろうとした私の顔を服に押し付け、ヴェルノさんは「放っておけ」と言います。

素直に前を向きました私に傍で見守っていたアイヴィーさんが駆け寄ってきました。

ヴェルノさんの腕からアイヴィーさんに渡され、ぎゅうぎゅうと抱き締められます。

「こんなに切られて可哀相そうにつ！真白ちゃんみたいな可愛い子に手を上げるなんて最低よお！！」

ぶんぶん怒るアイヴィーさんに抱えられ、私は久しぶりにヴェルノさんの船に帰ることができました。

しかも戻り方がターザンみたいにマストから伸びたロープで戻ります。

風を切って綺麗に着地するヴェルノさんとアイヴィーさんが羨ましいですよ。

そうして船上を見てふと気が付いたことが一つ。

皆さん一様に同じ服を着ているのです。

それは軍人さんが着ているものと全く同じ物で、けれどよくよく見ますと細部が微妙に違っていました。

「こすぶれ…！」

「あ？」

「何で皆さん軍人さんの服を着ているのですかっ？」

いつもならちよつとダブつとした服に布を巻いてアラビアンな雰囲気なのですが、軍服を来た皆さんはキリッとして――…

…あれ？ んん？

ジツと眺めてみましたが、皆さん軍服の前を開けたりシャツを出したり。

何やら軍服を着ているにも関わらず悪そうな雰囲気が出ているのですよ。

「ああ、海軍に紛れ込ませて内側から潰してやったんだ。」

「内側：ヴェルノさんの作戦勝ちなのですね。」

「そんな所だな。」

「すごいです、と言っていれば次第に船上の皆さんが私たちに気付いて近付いて来ます。」

目が合った皆さんは誰もが「おかえり!」「やっと戻ってきたな!」とそれぞれ声をかけてくださいます。それが嬉しくて私は思わず大声で返してしまいました。

「はいっ、ただいまなのです!!」

さんじゅう ぶらす よん。

煙を上げる軍艦から無事離れ、もう追いかけて来れないところまで行きますと皆さんは大声を上げて船内から酒樽や食べ物をどんどん持ってきます。

それはもう宴の合図と分かっていたましたが久しぶりだったので少しだけ驚いてしまいました。

驚くことはそれだけではありません。

なんと船内からウェルダンさんが出て来たのです！

少し声を張り上げて名前を呼んだ私に振り返って、ニコリと笑みを浮かべながら歩み寄って来てくださいます。

「ああ、貴女も無事戻れましたか。」

「はいです。ウェルダンさんも助かってよかったのです！でも、私のところヘジークさんが来ていらしたのなら、ウェルダンさんはお一人で逃げられたのですか？」

「いいえ、もう一人ヴェルノの部下が軍には居るんですよ。その方に手引きをしてもらいました。」

「スパイ…！」

そんな方もいるのですね！アイヴィーさんを見上げましたら「本当は秘密なのよ？」と口元に人指し指を添えて悪戯っぽく笑います。

その後ウェルダンさんはすぐにどこかへ行ってしまう、私はお裁縫道具を持ってきてくださったアイヴィーさんにチクチクとお腹を縫っていたくことになりました。

服を脱いでお腹を見せた時のアイヴィーさんの悲鳴はすごかったです。

「あ？何だ？」

私が服を脱いだときにバサリと本が落ちました。

… ああ、忘れていたのですよ！

ヴェルノさんが拾い上げて本を開きます。カルヴァートの部屋にあったものを持ってきました、と言うと「盗んだのか。」なんてニヤ

リと笑います。

違うのですよ。お借りしているだけなのです。…いつお返しするかは分かりませんが。

お腹を縫っていただいている間、ヴェルノさんはその本を熱心に読んでおられました。

アイヴィーさんは色々とカルヴァートに対して悪態をばやきながらも慣れた手付きで丁寧に傷跡を直してくださいます。こういう時は痛覚というものがなくて本当に良かったのですよ。

十分程で終わったお腹を見ると縫った後なんて分からないくらい綺麗なのです。

アイヴィーさんに尊敬の眼差しを向けていましたら、横から伸びてきたヴェルノさんの腕に抱え上げられてしまいました。

それから日焼けした手でお腹の辺りを確かめるように触ったり、縫った後を指で触るのでとてもくすぐったいのです。

「問題ねエな。」

「当たり前でしょう？真白ちゃんだもの、綺麗に直さなきゃ。」

「ああ、でも少し触り心地が違い。」

「…縫った後まで消せなんて無茶言わないでちょうだいね？」

気持ち呆れた様子でそう言うとお裁縫道具を持ったアイヴィーさんは離れてしまいました。

まだぺたぺたとお腹を触られてちょっと恥かしいのです。しかもせっかく作っていただいたお洋服はもう破れて着れないのですから、もったいないし、残念なのですよ。

丈の短いキャミソールにかぼちゃパンツ姿なのですが周囲にはヴェルノさんとアイヴィーさんしかいないので、よしとしておきましよう。

耳や手を触ったりするヴェルノさんは他に怪我がないのか確かめているようでしたので、私はされるがままに撫でくり回されます。

満足した様子で膝の上に下ろされ、私もようやく食事を食べることができなのです。

目の前に出されたお皿とフォークを見てあっと声を上げてしまいました。

買ったのに使われることのなかったあのニンジン型のお皿と青いお魚のフォークなのです。

ヴェルノさんが片手でお皿を支えてくれたのでフォークで野菜の炒め物を食べると、お腹からキュルキュルグルウーと大きな音がしてしまいました。

頭上から笑う声が聞こえます。

「そんなに腹減ってんのか？」

「うー、だって軍人さんのところではご飯が食べられなかったのですよ。」

ヌイグルミだからか食べなくても問題はなかったのですが、やはり食べた方が良かったですね。

一口、二口食べる度にお腹に食べ物落ちる感覚がするのです。

一生懸命食べる私にヴェルノさんは小さく笑って食べやすそうなパンや料理を渡してくれます。

お腹いっぱいになってフォークを置くとヴェルノさんがお皿を遠ざけてくださいました。

うとうとと眠気が襲ってきて、船を漕いでしまっていたようで笑い声がしたかと思うとそっと寄りかかせてくれます。

そのまま目を閉じてしまえば寝不足気味だった私はあっさり眠ってしまいました。

自分に寄りかかりながらグッスリ眠ってしまったヌイグルミの頭を撫でながら、ヴェルノは酒を仰る。

数日振りの柔らかく手触りの良い感触を楽しみつつ、やや間の抜けた寝顔を見て笑みを浮べた。

真白が持ってきたのは日誌だった。それも海軍の軍議などで話されている内容まで事細かに載っているものだ。

中身が読めるのかは定かでは無いにしろ、素晴らしい手柄である。

日誌には海軍の巡回航路から新しい武器についてなど、海賊としては欲しい情報が多く載っている。

ウェルダンと真白を取り返し、あの軍師のプライドを叩き潰し、気持ちもある程度スッキリしていたが、これで更に胸の空く思いである。

本当ならば殺してしまいたいくらいには苛立っていたが、真白の前で人を殺すことだけは躊躇われたのだ。

今までならば誰がいようが何を言われようが己のしたいようにしていたと言つのに、気が付けばこのヌイグルミの事ばかり気にするようになってしまっている。

そんな変化ですら嫌だと思わない辺り相当入れ込んでしまっているらしい。

冷静に己を分析し、ヴェルノは一度軽く空を見上げた。

少し遠くから聞こえて来る部下の騒ぐ声と、すぐ腕の中で規則正しく繰り返す呼吸音に耳を傾け、何時も通りの日常に戻った事を確認する。

風が吹くと腕の中のヌイグルミが小さく唸りながら擦り寄ってきた。

色気の欠片もあったものではない下着姿を視界に映し、これでは寒いだろうと肩にかけていた上着で包んでやれば気持ち良さそうに自身の腹部に顔を寄せて、また寝息を立てる。

……起きたら洗ってやんねエとな。

以前よりも少し手触りの落ちてしまった、けれども相変わらず質の良いふわふわとした頭を撫でてやりながらヴェルノはグラスに残っていた酒を一気に飲み干し、彼女の初の大手柄である日誌へ視線を落とした。

さんじゅう ぶらす い。

朝、目を覚ましましたら目の前にヴェルノさんの寝顔がございました。

これにはビックリしてしまい、思わず叫びそうになった口を慌てて私自身の手で塞ぎます。

スキンシップに慣れたとは言いまでも素晴らしく整った顔が眼前にありますと、とても心臓に悪いのですよ。

部屋を見回し、窓の外の青い空を見ましたら太陽が随分高い位置に

…もしかして寝過ごしてしまったのでしょうか？

抱き寄せられていますヴェルノさんの腕を軽く叩きましたら、眠たげな金色の瞳が薄っすらと開かれます。

寝起きでやや掠れた低い声で「何だ…。」と呟きました。

「寝坊してしまったのです。そろそろ起きませんと、朝食と昼食が

一緒になつてしまつのですよ。」

「……眠てエ。」

「ダメなのですつ。夜眠れなくなつてしまいますよ?」

「…………仕方ねエな。」

むっくり起き上がったヴェルノさんに頭を撫でてもらいます。

それから着替えるためにお洋服をいただき、着ていた服を脱ごうとしてオカシイ点に気が付きました。

どうして私は下着姿なのでしょううか?

それに、汚れていたはずの手足をよくよく見てみますと何故か真っ白ふわもこの綺麗な毛並みに戻っております。

私、昨夜お風呂に入りましたっけ? そんな記憶は全くないのです。

ヴェルノさんを見上げてみましても、既に着替え初めていたのですね。顔を戻し、首を傾げつつお洋服を着ました。

きつとお風呂に入った後に疲れたまま眠ってしまったのかもかもしれませんね。それが眠たい状態で入って記憶があやふやなのかも。

着替えを終えたヴェルノさんに抱えてもらい食堂へ向かいましたら昼食後だったようで、船員の方々が疎らにいらっしやいました。

料理長さんが気付いてくださって少し遅めの昼食が出てきます。

にんじんの皿とお魚のフォークは、やはり何度見ても可愛いのです。

ご飯を食べていますとヴェルノさんが何やら私を見ているので、何となくジッと見つめ返しましたら頬をすりすり指の腹で撫でられました。

ちょっとガサついた手でしたが温かくて落ち着くのです。

「おや、起きたようですね。」

聞こえて来た声にヴェルノさんの腕の下から食堂の入り口を見れば、レイナーさんがニッコリと笑いながら歩き寄ってくるところでした。

片目のモノクルが素敵ですね。

ヴェルノさんの腰にくっつくように見ていたのですが、邪魔だったようで膝の上に引き戻されてしまいます。

残念です。腰の辺りにペタツとくっついてるのは結構安定していて居心地が良かったのですが。

でもヴェルノさんのお食事の邪魔をしてはいけませんね。

隣りに座ったレイナーさんにしげしげと見つめられつつ私は食事を
終えました。

…誰かに見られているとちょっと食べずらいのですよ。

「あの、」

「ん？」

「何かご用なんでしょうか？」

それはヴェルノさんになのか、私になのかは分かりません。それで
も横にいらっしゃるという事は何か御用事があるのでしょう。

しかしながら聞いてみましたら「特には無いんですがねえ。」カラ
リと笑います。

よく分からず困ってしまいました。ただヴェルノさんだけは関せず
といった様子でお食事を続けておりました。

「随分馴染んでしまいましたねえ、船長。」

「悪いか？」

「いいえ。」

頭上で二人が言葉を交わしておりますが、意味が分からないのです。

何だか仲間外れなようで寂しいのですよ。

ヴェルノさんのお腹にペタツとくつついていれば利き手とは反対の手で、背中をぽんぽんと叩かれました。それをされると凄く眠くなつてしまいます。

うとうとし始めていた私に気付いたらしいヴェルノさんに「寝んよ。」と注意されてしまいましたので、一生懸命目を開ける努力を試みました。

けれども食事を終えたヴェルノさんが立ち上がって私を抱えたままお部屋に向かいます。

歩く時の一定の揺れが心地良くて、やっぱり私は眠ってしまいました。歩いた。

サラサラと聞こえて来る微かな音にふつと目が覚めました。

でも目の前に広がるのは布。…シーツとは違う感触なのです。

温かくて心地の良いそれに擦り寄ると上から小さな笑い声が聞こえてきました。どうやらヴェルノさんのお膝の上にいるようなのです。

ですがまだ眠たいので目を閉じてくつつきましたら、背中を優しく撫でられ、余計に眠くなります。

…やはりヴェルノさんに撫でてもらうのが一番気持ち良いのですよ。海賊だなんて言いますが、少し力サついた大きな手は何時も優しく撫でてくださります。

そうしてもらうと何故だかホッと安心するのですから不思議なものですね。

眠たい目を開けて顔を上げれば柔らかく細められた金色の瞳が私を

見下ろしていました。

口元に浮かぶ笑みはニヒルなものではなくて、ほんの微かに口角を上げるだけの優しい微笑……例えば人を傷付ける手だったとしても私にはこんなにそつと触れてくださいます。

今まで会った人たちの中でここまで優しく触れる人を私は知りません。

危ないのを承知で、海賊なのに海軍まで迎えに来てくださいました。

……こんなに優しい人に私は何もお返しできないのでしょうか？

それがとても悲しいことのように思えてしまい、瞬きをしたらポタリと雫が零れ落ちます。それが涙なのだと気付くのにかなり時間がかかってしまいました。

ヴェルノさんは一度驚いたように目を見開きます。

それから親指の腹でそつと拭ってくださいさるのです。

「私はどうすれば恩返しができるのでしょうか。」

ポツリと呟いた言葉をヴェルノさんは黙って聞いています。

「二度も助けていただいて、なのに私は何も出来ません。お掃除も、お料理も、今の私には何一つ満足にできないのです。」

「別にお前に何か望んだりなんか無エ。」

「分かっています。でも、それでは私は色々してもらってばかりなのですよ。」

それは嫌なのです。私だってヴェルノさんのために何かしたいのです。

ヴェルノさんは少し考えるような素振りを見せた後、不意に視線を私へ向けました。

「人間に戻りゃ、色々ある。」

そうしてフツと顔に影が落ち、目の前にヴェルノさんの綺麗な瞳。すぐに離れた口元にはやっぱり柔らかな笑みが浮かんでいました。

「——…こっぴどい事だけだな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6449t/>

Jolly Rogerに杯を掲げよ

2011年11月24日14時03分発行